

棟高東弥三郎街道遺跡

主要地方道高崎渋川線バイパス地方特定整備事業
(道路整備課所管) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

正誤表

頁		誤	正
28	22図B33号土坑座標値	X=41897	X=41898
35	2行	B-2区	B-1区
38	本文13行	X=41940	X=41941
81	遺物観察表 遺物No.10		PL53 追加
82	遺物観察表 遺物No.12		PL53 削除
86	B1図使用面右座標値	X=42003	X=42002
106	遺物観察表 遺物No.9		PL61 追加
112	112図B10号土坑土層断面	左の7号住居	4号住居

munataka

higasi yasaburou kaidou

棟高東弥三郎街道遺跡

主要地方道高崎渋川線バイパス地方特定整備事業
(道路整備課所管) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

主要地方道高崎渋川線は近世の「^{みくにむかうかん}三国往還」を踏襲しており、古くから往来が盛んな道路として知られております。現在は高崎市街地を南北に縦断しながら国道17号線高前バイパスと交差して群馬町、吉岡町の市街地を通り渋川市を結ぶ地方幹線道路となっております。近年は交通量が大幅に増加し慢性的な交通渋滞が発生し、その改善が強く望まれて来ました。これを受けて現道の東側を迂回するバイパスが整備され井野川以北の第1期工事区間が平成14年度に開通しました。

本事業はその主要地方道高崎渋川線のバイパスに交差する主要地方道前橋安中富岡線と群馬町町道の整備事業に伴い平成15年度に当事業団が発掘調査を実施したものです。

本遺跡の周辺には三ッ寺I遺跡、北谷遺跡、保渡田古墳群、上野国府跡、上野国分寺跡のような重要な遺跡が存在しております。また、周辺では関越自動車道、上越新幹線、県道バイパス建設、土地改良工事などに伴って、数多くの発掘調査が行われてきました。それらの地域内にある本遺跡は当地域の歴史を究明する上で貴重な資料を提供してくれるものと考えられてきました。

今回の調査では、縄文時代中期と奈良・平安時代の集落に関連する遺構が発見されました。これらの発見した集落遺構は当地での集落様相に新たな知見を与え、当地の古代史を究明する上で重要な資料となると確信しております。

本報告書の刊行にいたるまでには、群馬県県土整備局、高崎土木事務所、群馬県教育委員会、群馬町教育委員会の諸機関並びに地元関係者の皆様にご尽力を賜りました。心から感謝の意を表しますとともに、本書が広く活用され、郷土の歴史の解明に大いに役立つことを願ひ序とします。

平成17年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野宇三郎

例 言

1. 本報告書は、群馬県主要地方道高崎渋川線特定工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地は以下のとおりである。
群馬県群馬郡群馬町大字棟高字東弥三郎街道1868、2057、2060、2062、2063、2066、2067、2068、2074、
2075、2076、2081、2092、2094、2099、2111、2112
3. 事業主体 群馬県高崎土木事務所
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 一次 2003年(平成15)4月1日～2003年(平成15)6月30日
二次 2004年(平成16)1月1日～2004年(平成16)2月29日
6. 調査組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 理事長 小野宇三郎
事務担当 住谷永市、神保脩史、萩原利通、右島和夫、植原恒夫、中東耕志、竹内 宏、高橋房雄、
国定 均、須田朋子、吉田有光、阿久澤玄洋、田中賢一、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、
本間久美子、北原かおり、若田 誠、狩野真子
7. 調査担当 一次 神谷佳明、石坂 聡
二次 神谷佳明
8. 整理期間 2004年(平成16)10月1日～2005年(平成17)3月31日
9. 整理組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 理事長 小野宇三郎
事務担当 住谷永市、神保脩史、矢崎俊夫、右島和夫、丸岡道雄、相草建史、竹内 宏、高橋房雄、
国定 均、須田朋子、吉田有光、栗原幸代、佐藤聖行、阿久澤玄洋、今井もと子、内山佳子、
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、若田 誠、狩野真子
10. 整理担当 神谷佳明
11. 報告書作成関係者
編集・本文執筆・遺物観察 神谷佳明
石器・石製品の石材同定 飯島静男（群馬地質協会）
写真撮影 遺構 発掘担当者 航空撮影写真 株式会社 測研 遺物 佐藤元彦
整理補助 阿部和子 岩瀧節子 長岡和恵 飯田文子 阿久津久子
高橋とし子 島崎敏子 下境マサ江 深代初子 萩原由香
遺物機械実測 富沢スミ江 伊東博子 岸 弘子 廣津真希子
保存処理 関 邦一 土橋まり子 小村浩一
12. 発掘調査での遺構掘削は一次 株式会社 飯塚組(現場代理人 須藤和春)、二次 株式会社 石岡組(現
場代理人 後藤喜八郎)が請負っている。
13. 発掘調査、整理作業では多くの機関、方々にご協力、ご指導、ご教授を受けた。(敬称省略)
群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会文化課、群馬町教育委員会、群馬町棟高地区自治会
志村 勇、志村篤一、齊藤利昭、齊藤英敏、飯森康広、関根慎二、澁川伸男、中沢 悟、中東耕志、
渡辺弘幸 沢田福宏、蔵持大輔 他多くの方々。
14. 記録図面、記録写真、出土遺物、その他記録類等は群馬県埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

1. 挿入図中に使用した方位は座標北を表している。
2. 発掘調査、整理作業及び挿入図中に使用した座標は日本測地系を利用している。なお、世界測地系、緯度・経度については1地点の変換を例として下記に表記したので参照してほしい。

日本測地系 9系 X=42000, Y=-73800→世界測地系GSR-80 X=42354.9319 Y=-74091.7757
→ 緯度・経度 緯度36° 22' 43.99906"、経度139° 00' 27.15875"

3. 本報告書で使用したテフラの略称は下記のとおりである。

As-A 浅間山A軽石, As-B 浅間山B軽石, As-C 浅間山C軽石

Hr-F A 榛名二ッ岳火山灰, Hr-F P 榛名二ッ岳軽石

4. 挿入図中の遺構図縮尺は次のとおりである。
住居、井戸、溝、土坑、畠 1/50、カマド 1/30、詳細図 1/20
5. 挿入図中の遺物図は原則1/3であるが、大型品は1/4、小型品1/2などで掲載し1/3以外は遺物番号の左に記した。なお、図版の縮尺は任意である。
6. 挿入図中の土層断面に記されているローマ数字は基本土層を表している。
7. 挿入図中で使用したトーンは下記のとおりである。なお、遺構図はその図ごとに表記してある。

遺物 黒色土器 黒色処理範囲 灰軸陶器 施軸範囲 土器 煤付着範囲



8. 遺構NOはA区、B区、C区、D区の各区ごとに通番になっている。
9. 本報告書で使用した地形図は下記のとおりである。
1図 国土地理院地形図 1/25,000「前橋」・「室田」
5図 国土地理院地形図 1/50,000「前橋」・「榛名」
6図 国土地理院地形図 1/25,000「前橋」・「室田」
10. 遺構の面積はデジタルプランメーターを使用して3回の計測値を平均したものである。
11. 出土位置の項に記載してある数値は住居なら床面から、その他の遺構は底面からの高さを表記してある。
12. 遺物観察表での計測箇所は次のとおりである。

口径 口径部端部の最高位と最高位間の長さ。

底径 高台の貼付してあるものは高台を取り外した状態での底径。

器高 その個体の最も高い箇所。

台径 高台径の略、高台端部(畳付け)間の長さ。

胴径 壺・瓶・甕等で口径より胴部の最大径が大きいものについて計測してある。

鈎径 羽釜での鈎の径。

13. 遺物観察表の計測値単位は全て長さがcm、重量がgである。

目 次

序	i
例言	iii
凡例	iv
目次	v
挿図目次・表目次・図版目次	vi

I 調査の経過	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2
II 遺跡地の環境	
1. 基本的層序	4
2. 地理的環境	6
3. 歴史的環境	8
III 検出した遺構と遺物	
1. 概要	12
2. 縄文時代	27
(1) 住居	27
(2) 土坑	28
(3) 遺構外出土遺物	30
3. 古墳時代～奈良・平安時代	32
(1) 住居	32
(2) 井戸	78
(3) 溝	88
(4) 土坑	98
(5) 遺構外出土遺物	103
4. 中世以降	107
(1) 井戸	107
(2) 溝	107
(3) 土坑	110
(4) 竈	113
(5) 遺構外出土遺物	114

まとめ 115

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

図No.	キャプション	頁
1 図	遺跡位置図	1
2 図	調査区図	3
3 図	基本順序概略図	4
4 図	基本土層柱状図	5
5 図	遺跡周辺地形図	7
6 図	周辺道路図	11
7 図	縄文時代 全体図	13
8 図	古墳時代前期(VI層下面)全体図	14
9 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)1	15
10 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)2	16
11 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)3	17
12 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)4	18
13 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)5	19
14 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)6	20
15 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)7	21
16 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)8	22
17 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)9	23
18 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)10	24
19 図	古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)11	25
20 図	中世以降(TV層上面)全体図	26
21 図	B 1号住居遺構図・遺物図	27
22 図	B31号土坑、B32号土坑、B33号土坑、B34号土坑遺構図	28
23 図	B34号土坑 遺物図	29
24 図	遺構外出土遺物 遺物図(1)	30
25 図	遺構外出土遺物 遺物図(2)	31
26 図	A 1号住居 遺構図	32
27 図	A 2号住居 遺構図・遺物図(1)	33
28 図	A 2号住居 遺物図(2)	34
29 図	B 2号住居 遺構図(1)	35
30 図	B 2号住居 遺構図(2)・遺物図	36
31 図	B 3号住居 遺構図・遺物図	37
32 図	B 4号住居・B 7号住居 遺構図	38
33 図	B 4号住居・B 7号住居 遺物図	39
34 図	B 5号住居・B 6号住居 遺構図	41
35 図	B 5号住居 遺物図(1)	42
36 図	B 5号住居 遺物図(2)	43
37 図	B 5号住居 遺物図(3)	44
38 図	B 6号住居 遺物図	44
39 図	B 8号住居・B 9号住居・B 16号住居 遺構図	47
40 図	B 8号住居 遺物図	48
41 図	B 9号住居 遺物図(1)	48
42 図	B 9号住居 遺物図(2)	49
43 図	B 16号住居 遺物図(1)	49
44 図	B 16号住居 遺物図(2)	50
45 図	B 16号住居 遺物図(3)	51
46 図	B 10号住居 遺構図・遺物図	52
47 図	B 11号住居 遺構図・遺物図	53
48 図	B 12号住居 遺構図	54
49 図	B 12号住居 遺物図	55
50 図	B 13号住居・B 14号住居 遺構図	56
51 図	B 13号住居・B 14号住居 遺物図	57
52 図	B 15号住居 遺構図(1)	58
53 図	B 15号住居 遺構図(2)・遺物図	59
54 図	B 17号住居・B 18号住居 遺構図(1)	61
55 図	B 17号住居・B 18号住居 遺構図(2)	62
56 図	B 17号住居 遺物図(1)	62
57 図	B 17号住居 遺物図(2)	63
58 図	B 18号住居 遺物図(1)	63
59 図	B 18号住居 遺物図(2)	64
60 図	B 19号住居 遺構図	65
61 図	B 19号住居 遺物図(1)	66
62 図	B 19号住居 遺物図(2)	67
63 図	B 21号住居 遺構図	68
64 図	B 21号住居 遺物図	69
65 図	B 22号住居・B 23号住居 遺構図(1)	70
66 図	B 22号住居・B 23号住居 遺構図(2)	71
67 図	B 23号住居 遺物図(1)	72
68 図	B 23号住居 遺物図(2)	73
69 図	B 24号住居 遺構図(1)	74
70 図	B 24号住居 遺構図(2)・遺物図	75
71 図	C 1号住居 遺構図	76
72 図	D 1号住居 遺構図・遺物図	76
73 図	D 2号住居 遺構図・遺物図	77
74 図	B 1号井戸 遺構図・遺物図(1)	78
75 図	B 1号井戸 遺物図(2)	79
76 図	B 3号井戸 遺構図・遺物図(1)	80
77 図	B 3号井戸 遺物図(2)	81
78 図	B 4号井戸 遺構図	82
79 図	B 4号井戸 遺物図(1)	83
80 図	B 4号井戸 遺物図(2)	84
81 図	D 1号井戸 遺構図・遺物図(1)	86
82 図	D 1号井戸 遺物図(2)	87
83 図	A 1号溝・A 3号溝・A 8号溝・A 9号溝 遺構図	88
84 図	B 1号溝 遺構図	89
85 図	B 3号溝 遺構図	90
86 図	B 3号溝 遺物図	91
87 図	B 4号溝 遺構図(1)	91
88 図	B 4号溝 遺構図(2)・遺物図(1)	92
89 図	B 4号溝 遺物図(2)	93
90 図	B 5号溝 遺構図・遺物図	93
91 図	B 6号溝 遺構図・遺物図	94
92 図	B 6号溝・B 7号溝・C 1号溝・C 2号溝・D 2号溝 遺構図	96
93 図	D 5号溝 遺構図・遺物図	96
94 図	D 6号溝 遺構図・遺物図(1)	96
95 図	D 6号溝 遺物図(2)	97
96 図	D 4号溝・D 7号溝・D 8号溝 遺構図	97
97 図	D 9号溝・D 10号溝 遺構図	98
98 図	A 7号～A 10号土坑 遺構図	98
99 図	B 1号～B 4号・B 6号・B 7号・B 9号・B 21号土坑 遺構図・遺物図	99
100 図	B 22号～B 25号土坑 遺構図・遺物図	100
101 図	B 26号～B 30号土坑・C 12号土坑・D 9号土坑 遺構図・遺物図	101
102 図	D 8号土坑・D 10号土坑 遺構図・遺物図	102
103 図	B 区遺構外出土遺物 遺物図(1)	103
104 図	B 区遺構外出土遺物 遺物図(2)	104
105 図	C 区遺構外出土遺物 遺物図	105
106 図	D 区遺構外出土遺物 遺物図	106
107 図	B 2号井戸 遺構図	107
108 図	A 2号溝・A 4号溝・A 5号溝・C 3号溝 遺構図	108
109 図	B 2号溝・C 4号溝・C 5号溝 遺構図	109
110 図	C 6号溝・C 8号溝・D 3号溝 遺構図	110
111 図	A 1号～A 6号土坑 遺構図	111

112図	B5号・B8号・B10号・C13号～21号土坑	
	遺構図	112
113図	C22号・D6号・D7号土坑	遺構図 113
114図	C1号品	遺構図 113
115図	遺構外出土遺物	遺物図 115
付図	樺高東弥三部街道遺跡 全体図(古墳時代～奈良・平安時代)	

表 目 次

表NO.	表 題 目	頁	
1表	古墳時代～奈良・平安時代 土坑一覧	102	2表 中世以降 土坑一覧 111

図 版 目 次

遺 構		B-7区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から
P.L1	遺跡地遺景	雨から		
	遺跡地近景	東から		
P.L2	基本的な層序	A-1区東 北から		
	基本的な層序	A-3区東 北から		
	基本的な層序	B-6区北 東から		
	基本的な層序	B-8区南 東から		
	基本的な層序	C-3区西 東から		
	基本的な層序	C-5区西 北から		
	基本的な層序	D-1区東 西から		
	基本的な層序	D-11区中 北から		
P.L3	榊名山相マノ原副状地	南東から		
	菅谷石塚遺跡	水田跡		
	菅谷石塚遺跡	鎌定東山道駅跡		
	菅谷石塚遺跡	7区・8区	全景	
P.L4	B-3区縄文時代	北から		
	B-8区縄文時代調査面	全景	北から	
	B-8区縄文時代	東から		
	B1号住居	全景	北から	
	B1号住居	遺物出土状況	北東から	
	B31号土坑	全景	北から	
	B31号土坑	土層断面	南から	
P.L5	B32号土坑	全景	北から	
	B32号土坑	土層断面	東から	
	B33号土坑	全景	北から	
	B33号土坑	土層断面	東から	
	B34号土坑	遺物出土状況①	北から	
	B34号土坑	遺物出土状況②	西から	
	B34号土坑	遺物出土状況③	西から	
	B34号土坑	全景	東から	
P.L6	A-1区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	A-2区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	B-1区古墳時代～奈良平安時代面	全景	北から	
	B-1区古墳時代～奈良平安時代面	全景	南から	
	B-2区古墳時代～奈良平安時代面	全景	北から	
	B-2区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
	B-2区古墳時代～奈良平安時代面	全景	南西から	
	B-4～5区古墳時代～奈良平安時代面	全景	北から	
P.L7	B-4区古墳時代～奈良平安時代面	全景	北から	
	B-4区古墳時代～奈良平安時代面	確認時	南から	
	B-5区古墳時代～奈良平安時代面	全景	南から	
	B-6～8区古墳時代～奈良平安時代面	全景	垂直	
P.L8	B-6～8区古墳時代～奈良平安時代面	全景	南から	
	B-6～8区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	B-6区古墳時代～奈良平安時代面	全景	垂直	
	B-6区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
	B-7区古墳時代～奈良平安時代面	全景	垂直	
P.L9	C-1区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
	C-2区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	C-3区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
	C-4区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	C-5区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
	C-5区古墳時代～奈良平安時代面	全景	北から	
	C-6区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
P.L10	D-1～6区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
	D-8～11区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-1区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
	D-2区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-3区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-4区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-5区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-6区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
P.L11	D-6区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-7区古墳時代～奈良平安時代面	全景	北から	
	D-8区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-9区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-10区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
	D-11区古墳時代～奈良平安時代面	全景	東から	
	D-11区古墳時代～奈良平安時代面	全景	西から	
P.L12	A1号住居	土層断面	南から	
	A2号住居	全景	東から	
	A2号住居	全景	西から	
	A2号住居	全景	北から	
	A2号住居	掘り方	北から	
	A2号住居	掘り方	東から	
	B2号住居	全景	西から	
	B2号住居	土層断面	南から	
P.L13	B2号住居	土層断面	西から	
	B2号住居	掘り方	西から	
	B2号住居	カマド掘り方	西から	
	B3号住居	全景	東から	
	B3号住居	土層断面	東から	
	B3号住居	掘り方	東から	
	B4号住居	B7号住居	全景	北東から
	B4号住居	全景	東から	
P.L14	B7号住居	土層断面	東から	
	B7号住居	土層断面	南から	
	B4号住居	B7号住居	掘り方	北から
	B5号住居	全景	北から	
	B5号住居	遺物出土状況	南東から	
	B6号住居	調査区範囲時遺物出土状況	東から	

B 5号住居 廻り方 東から
 B 5号住居 廻り方床下土坑 西から
 P L 15 B 6号住居 全景 南東から
 B 6号住居 全景 北から
 B 6号住居 調査区拡張時遺物出土状況 東から
 B 6号住居 廻り方 北から
 B 6号住居 廻り方 東から
 B 8号住居 全景 西から
 B 8号住居 遺物出土状況 南から
 B 8号住居 廻り方 北から
 P L 16 B 9号住居 全景 北から
 B 9号住居 全景 南から
 B 16号住居 全景 西から
 B 16号住居 全景 北から
 B 16号住居 調査区拡張時全景 西から
 B 16号住居 廻り方 西から
 B 10号住居 全景 南から
 B 10号住居 全景 西から
 P L 17 B 11号住居 全景 西から
 B 11号住居 全景 北から
 B 11号住居 土層断面 北から
 B 11号住居 廻り方 北から
 B 12号住居 全景 西から
 B 12号住居 全景 北から
 B 12号住居 貯蔵穴土層断面 東から
 B 12号住居 廻り方 西から
 P L 18 B 13号住居 全景 北から
 B 13号住居 廻り方 北から
 B 15号住居(1次調査) 全景 西から
 B 15号住居(2次調査) 全景 西から
 B 15号住居(1次調査) カマド 西から
 B 15号住居(1次調査) カマド断面 南から
 B 15号住居(1次調査) カマド断面 西から
 B 15号住居(1次調査) カマド廻り方 西から
 P L 19 B 15号住居(1次調査) 廻り方 西から
 B 15号住居(2次調査) 廻り方 西から
 B 17号住居 全景 西から
 B 17号住居 土層断面 東から
 B 17号住居 カマド土層断面 西から
 B 17号住居 廻り方 西から
 B 18号住居 全景 西から
 B 18号住居 貯蔵穴 東から
 P L 20 B 18号住居 カマド土層断面 西から
 B 18号住居 廻り方 西から
 B 19号住居 全景 西から
 B 19号住居 貯蔵穴 西から
 B 19号住居 貯蔵穴土層断面 西から
 B 19号住居 土層断面 東から
 B 19号住居 カマド土層断面 北から
 B 19号住居 廻り方 西から
 P L 21 B 21号住居 全景 西から
 B 21号住居 廻り方 西から
 B 22号住居 全景 西から
 B 22号住居 廻り方 南西から
 B 23号住居 全景 南西から
 B 23号住居 土層断面 南から
 B 23号住居 カマド確認時 南から
 B 23号住居 カマド全景 西から
 P L 22 B 23号住居 カマド土層断面 南西から
 B 23号住居 カマド煙道土層出土状況 南から
 B 23号住居 カマド廻り方 西から
 B 23号住居 廻り方 南西から

B 24号住居 全景 西から
 B 24号住居 貯蔵穴土層断面 南から
 B 24号住居 カマド土層断面 南から
 B 24号住居 廻り方 西から
 P L 23 C 1号住居 土層断面 西から
 C 1号住居 調査状況 西から
 D 1号住居 廻り方 北から
 D 1号住居 廻り方 東から
 D 1号住居 土層断面・焼土確認状況 東から
 D 2号住居 廻り方 東から
 D 2号住居 廻り方 西から
 D 2号住居 土層断面 北から
 P L 24 B 1号井戸 全景 東から
 B 1号井戸 土層断面 東から
 B 3号井戸 全景 東から
 B 4号井戸 全景 東から
 B 4号井戸 近接 東から
 B 4号井戸 遺物出土状況 東から
 B 4号井戸 遺物出土状況 西から
 B 4号井戸 調査区拡張前 東から
 P L 25 D 1号井戸 全景 南から
 D 1号井戸 石積み状況 東から
 D 1号井戸 廻り方 南から
 D 1号井戸 廻り方近接 南から
 A 1号溝 全景 北から
 A 3号溝 全景 北から
 A 8号溝 全景 北から
 A 9号溝 全景 北から
 P L 26 B 1号溝(B-1区) 全景 東から
 B 1号溝(B-4区) 全景 東から
 B 1号溝(B-1区) 土層断面 西から
 B 1号溝(B-4区) 土層断面 東から
 B 3号溝(B-2区) 全景 東から
 B 3号溝(B-2区) 全景 西から
 B 3号溝(B-5区) 全景 東から
 B 3号溝(B-2区) 土層断面 西から
 P L 27 B 4号溝(B-4区) 全景 東から
 B 4号溝(B-4区) 全景 西から
 B 4号溝(B-7区) 全景 東から
 B 4号溝(B-7区) 全景 西から
 B 5号溝 全景 西から
 B 5号溝 土層断面 西から
 B 7号溝 土層断面 東から
 B 8号溝 全景 南から
 P L 28 C 1号溝 全景 北から
 C 2号溝 全景 北から
 D 1号溝 全景 北西から
 D 2号溝 全景 北から
 D 4号溝 全景 北から
 D 5号溝 全景 北から
 D 6号溝 全景 北から
 D 6号溝 遺物出土状況 北から
 P L 29 D 8号溝 全景 北から
 D 8号溝 土層断面 北から
 D 9号溝 土層断面 南から
 D 10号溝 全景 北から
 A 8号土坑 土層断面 西から
 A 10号土坑 全景 南から
 B 3号土坑 全景 東から
 B 7号土坑 全景 東から
 P L 30 B 21号土坑 全景 南から
 B 21号土坑 土層断面 南から

- B22号土坑 全景 西から
 B22号土坑 遺物出土状況 西から
 B27号土坑 全景 東から
 D8号土坑 全景 南から
 P.L.31 B2号井戸 全景 西から
 B2号井戸 全景 西から
 A2号溝 A1号土坑 全景 南から
 A4号溝 全景 北から
 A5号溝 全景 北から
 B2号溝(B-4区) 土層断面 東から
 B2号溝(B-7区) 土層断面 東から
 C3号溝 全景 南から
 P.L.32 C4号溝 全景 北から
 C5号溝 全景 南から
 C6号溝 全景 東から
 C6号溝 土層断面 西から
 D3号溝 全景 北から
 A3号土坑 全景 北から
 A4号土坑 全景 北から
 A5号土坑 全景 北から
 P.L.33 B8号土坑 全景 東から
 C13号土坑 全景 西から
 C14号土坑 土層断面 東から
 C15号土坑 全景 南から
 C16号土坑・17号土坑 全景 南から
 C19号土坑 全景 南から
 D6号土坑 土層断面 西から
 D7号土坑 土層断面 北から
 P.L.34 C1号品 全景 北から
 C1号品 全景 南から
- 遺物
 P.L.35 B1号住居 出土遺物
 B34号土坑 出土遺物
 縄文時代 遺構外出土遺物(1)
 P.L.36 縄文時代 遺構外出土遺物(2)
 P.L.37 縄文時代 遺構外出土遺物(3)
 P.L.38 A2号住居 出土遺物
 B2号住居 出土遺物
 P.L.39 B3号住居 出土遺物
 B4号住居 出土遺物
 B5号住居 出土遺物(1)
 P.L.40 B5号住居 出土遺物(2)
 P.L.41 B5号住居 出土遺物(3)
 B6号住居 出土遺物
 B7号住居 出土遺物
- P.L.42 B8号住居 出土遺物
 B9号住居 出土遺物
 B10号住居 出土遺物
 P.L.43 B11号住居 出土遺物
 B12号住居 出土遺物
 B13号住居 出土遺物(1)
 P.L.44 B13号住居 出土遺物(2)
 B14号住居 出土遺物
 B15号住居 出土遺物
 B16号住居 出土遺物(1)
 P.L.45 B16号住居 出土遺物(2)
 P.L.46 B16号住居 出土遺物(3)
 B17号住居 出土遺物
 B18号住居 出土遺物(1)
 P.L.47 B18号住居 出土遺物(2)
 B19号住居 出土遺物(1)
 P.L.48 B19号住居 出土遺物(2)
 B21号住居 出土遺物
 P.L.49 B23号住居 出土遺物(1)
 P.L.50 B23号住居 出土遺物(2)
 P.L.51 B23号住居 出土遺物(3)
 B24号住居 出土遺物
 P.L.52 D1号住居 出土遺物
 B1号井戸 出土遺物
 B3号井戸 出土遺物(1)
 P.L.53 B3号井戸 出土遺物(2)
 B4号井戸 出土遺物(1)
 P.L.54 B4号井戸 出土遺物(2)
 P.L.55 B4号井戸 出土遺物(3)
 D1号井戸 出土遺物(1)
 P.L.56 D1号井戸 出土遺物(2)
 B3号溝 出土遺物
 B4号溝 出土遺物
 B8号溝 出土遺物(1)
 P.L.57 B8号溝 出土遺物(2)
 D5号溝 出土遺物
 D6号溝 出土遺物(1)
 P.L.58 D6号溝 出土遺物(2)
 B22号土坑 出土遺物
 B24号土坑 出土遺物
 B27号土坑 出土遺物
 D8号土坑 出土遺物
 P.L.59 古墳時代～奈良・平安時代遺構外出土遺物(1)
 P.L.60 古墳時代～奈良・平安時代遺構外出土遺物(2)
 P.L.61 古墳時代～奈良・平安時代遺構外出土遺物(3)
 中世以降遺構外出土遺物

I 調査の経過

1. 調査に至る経緯

本事業は主要地方道高崎渋川バイパス地方特定道路整備事業として主要地方道高崎渋川線改築(改良)工事に伴い交差する主要地方道前橋安中富岡線の改築、群馬町町道の一部廃止に伴う改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地内に位置し、東側に隣接する主要地方道高崎渋川バイパス用地内では平成12年度に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって省谷石塚遺跡が発掘調査されていることから、当事業地でも遺跡の存在が想定された。

平成13年9月に高崎土木事務所からの依頼により群馬県教育委員会文化財保護課で事業地内の試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居・溝などの遺構と土師器・須恵器などの遺物の出土が確認され、文化層の存在が明らかとなった。このことから、埋蔵文化財の記録保存の措置が必要な旨を、文化財保

護課から高崎土木事務所へ通知するとともに、地元の子馬町教育委員会と協議し、大字・小字から遺跡名を「棟高東弥三郎街道遺跡」と決定した。

試掘調査の結果にもとづいて、県教育委員会文化財保護課と高崎土木事務所との間で、発掘調査の予算・行程等の調整が行われ、平成15年度に発掘調査、平成16年度に整理事業をそれぞれ財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で実施することとした。

発掘調査は平成15年4月から6月までの3ヶ月間と平成16年1月から2月までの2ヶ月間の計5ヶ月間実施した。これは当初、発掘調査を開始した時点では用地買収が解決していなかった地点が、その後解決に至ったことから2ヶ月間の発掘調査が追加されたことによる。整理事業は平成16年10月1日から平成17年3月31日までの6ヶ月間実施し、本報告書を刊行した。



1図 遺跡位置図 (1/25,000)

2. 調査の経過

棟高東弥三郎街道遺跡は、群馬郡群馬町の南部、高崎市との境界に近い大字棟高東弥三郎街道に所在する。発掘調査は、用地買収の進捗で1次調査2003年(平成15)4月1日～6月30日と2次2004年1月1日～2月29日の二期間にかけて実施した。調査対象地は主要地方道高崎渋川線バイパスの棟高東交差点、菅谷交差点の西側の主要地方道前橋・安中・富岡線の両側幅2～5mと町道の両側幅1～4mの拡幅部分2,524㎡であった。

調査対象は道路予定地であるため現道路に沿った線状に細長いことから東西の町道の両側をA区、南北の町道の両側をB区、主要地方道前橋安中富岡線の南側をC区、北側をD区と呼称した。そしてこの調査区を横断する道路や民家や民地への進入路で細分を行い、1回に実施する調査区を設定した。その結果、A区は-1から-3、B区は-1から-8、C区は-1から-6、D区は-1から-11に細分した調査となった。

1次の発掘調査はA-1・2区、B-1～5区、C区全域、D区全域について実施した。2次は発掘調査対象が残ったA-3区、B-6～8区について実施した。

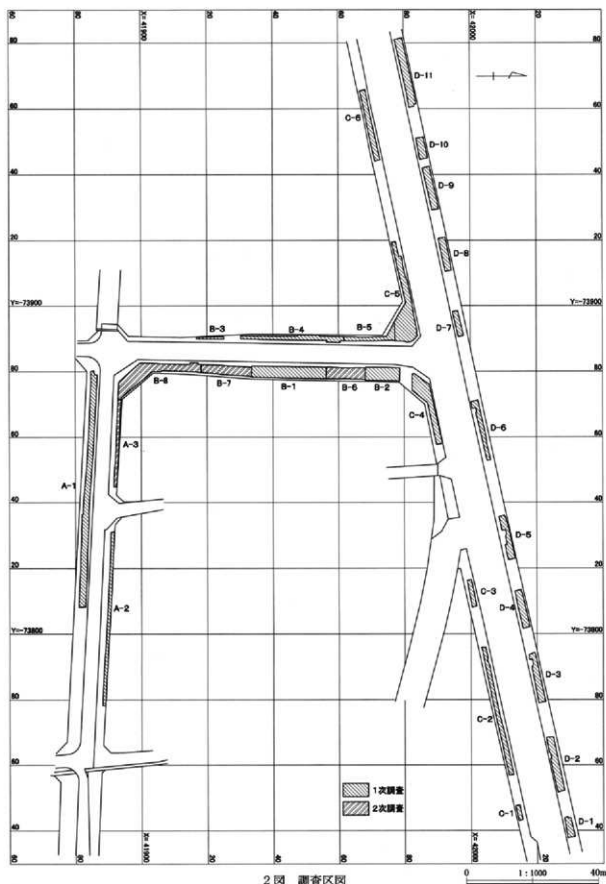
1次の発掘調査はB区より着手し、C区、D区、A区の順で行った。A区は現道が通学路にあたるため地元より調査中の車両通行止めを要請され、その許可などのため6月1日より実施した。B区は表土を掘削したところ第3章のとおり多くの遺構を検出したため、当初進入路として残す予定であった箇所でもB-4区とB-5区の間やB-5区とC-5区の間のように地権者の承諾を得て調査を行った。C区、D区は県道に面しているため調査対象地が元商店、工場などであったため攪乱が深所まで及んでいる箇所では調査を断念した。また、C-3区とC-4区の間は電話線など地下ケーブルが埋設されているため調査を行わなかった。C区、D区は遺構の分布が比較的少ないためB区のような進入路部分の調

査は必要ないと判断した。

2次の発掘調査はA-3区、B-6区、-7区、-8区について面積も狭く、調査区が近接していることから4箇所同時に表土を掘削し、平行して調査を実施した。なお、A-3区は戦後すぐにケーブルを埋設しているためⅤ層より下部まで掘削が行われているため遺構の確認ができなかった。B区については1次調査と同様に多くの遺構を検出したためB-7区では進入路確保で残した箇所を移設して全面調査を実施した。

発掘調査は、遺構が確認されると想定されるⅣ層、Ⅴ層、Ⅵ層上面まで重機を使用して表土の掘削を行った。Ⅳ層上面で遺構を確認可能な調査区はA-2区、B-2区など僅かな範囲でその他の調査区では中世から現在に至る耕作や掘削などによってⅣ層の残存状態は不良であったことからⅥ層またはⅤ層での遺構確認を行った。遺構の確認はB-4・5区など調査区幅が狭く、遺構の重複が激しい箇所では確認面での確認が難しい点が多いため調査区脇にサブトレンチを掘削して行った。

遺構の掘削は遺構全体が確認されるものは断面観察のベルトを残して掘削したが、多くの遺構では遺構の一部しか調査が可能でないため調査区端で断面観察を行った。



2図 調査区図

II 遺跡地の環境

1. 基本的層序

遺跡地内の基本的土層の堆積状態は地形的条件などで異なるが、原則は周辺地域と同様である。その違いはB区などの泥流丘の微高地とその周辺部の沖積地ではⅦ層以下に大きな違いが見られる点と微高地部分では火山噴出物の堆積層が薄いため後世の耕作などで残存が見られない点である。

基本的な層序は次のとおりである。

I層は現在の耕作土である。色調は地点によって多少異なるが概ね灰色や黄色を帯びた褐色を呈している。層位中には多量の浅間山B軽石(以後As-Bと略す)を多く含んでいるため比較的粘質のないサラサラした土質である。

II層はAs-B降下後の中世から近世にかけての耕作土である。色調はI層と同様であるが層位中にAs-Bを30~50%と多く含んでいる。

III層は1108年(天仁元年)に浅間山が噴火した時の火山噴出物であるAs-Bである。低地では軽石が10~20cmほど堆積しておりさらにその上位に灰褐色を呈する火山灰が確認できる。なお、微高地では後世の耕作によって踏み込まれてほとんど層位としては確認できた地点は少なく、残っていてもブロック状の状態であった。

IV層は6世紀初頭に標名二ツ岳が噴火した時の火山噴出物である標名二ツ岳火山灰(以後Hr-F Aと略す)が多量に踏み込まれている土層である。色調はHr-F Aを多量に含むため灰色に近い。また、層位中には5mm程度の白色軽石を含んでいる。この軽石は6世紀前半に起きた二度目の標名二ツ岳が噴火したときの火山噴出物である標名二ツ岳軽石(以後Hr-F Pと略す)や4世紀代に浅間山が噴火した時の火山噴出物である浅間山C軽石(以後As-Cと略す)である。

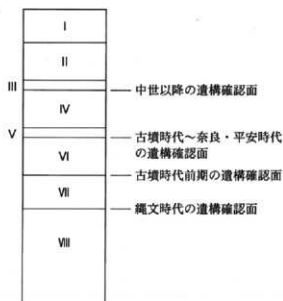
V層は6世紀初頭に標名二ツ岳が噴火した時の火山噴出物であるHr-F Aである。低地では5~10cmほど堆積している。微高地では部分的に2~5cm程度の堆積が確認されたが大部分は後世の耕作などによって踏み込まれほとんど層位としては確認できなかった。

VI層は4世紀に起きた浅間山の噴火した時の火山噴出物であるAs-Cが混入・踏み込まれている黒色土である。この層位は概ね20cmほどの堆積が確認できる。また、2区ではAs-Cの含有量が50~70%と非常に多い箇所が確認された。

Ⅶ層はやや粘土質の黒色土である。層位内には含有物がほとんど確認されない。層位下位では上位に比較してやや淡い色調を呈している。

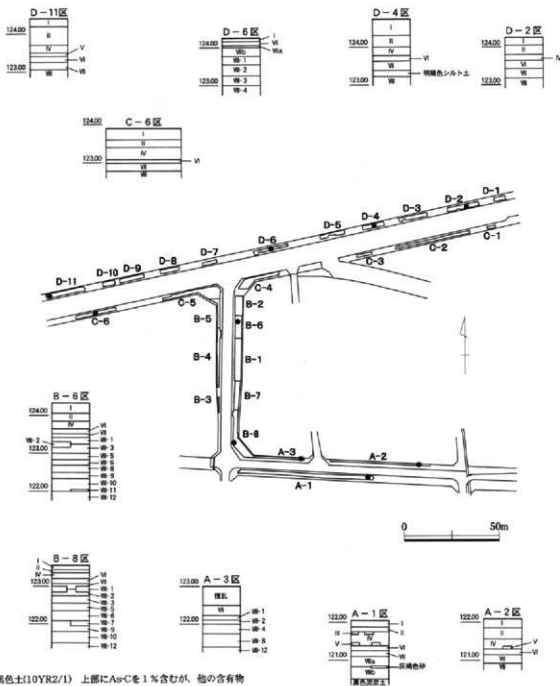
沖積地Ⅷ層は総社砂層と呼称されている灰白色のシルト土である。この層位の堆積は非常に厚く下層のローム土を確認できない。

泥流丘Ⅷ層はローム土である。泥流丘の周囲のみ確認できる。



3図 基本層序概略図

1. 基本的層序



Ⅷa 黒色土(10YR2/1) 上部にAs-Cを1%含むが、他の含有物は確認されない。

Ⅷb 黒褐色土(10YR3/2) aより淡い色調。下部はやや黄色を帯びている。

Ⅷ-1 ぶい黄褐色土 ローム土に近似、灰黄褐色土ブロックを2%と2~5cmの円礫を5%含む。

Ⅷ-2 黄褐色土 -1に類似、黄褐色土の硬質ブロックの集合土。

Ⅷ-3 明黄褐色土 黄褐色砂、褐色砂をブロック状に20%含む。

Ⅷ-4 ぶい黄色 -1に類似、比較的サラサラした土質。1~2cmの円礫を10%含む。

Ⅷ-5 緑灰色土 灰色砂。1~2cmの円礫からなる。

Ⅷ-6 黄褐色土 黄褐色砂が主体。

Ⅷ-7 黄褐色土 -6に1~3cmの円礫を10%含む。

Ⅷ-8 オリブ褐色土 オリブ褐色砂が主体。

Ⅷ-9 黄褐色土 灰白シルトブロックを20%含む。

Ⅷ-10 灰白色シルト

Ⅷ-11 灰黄砂

Ⅷ-12 黄褐色砂 1~2cmの円礫を5%含む。

4図 基本土層柱状図

2. 地理的環境

遺跡地は、群馬県の中央部に位置する群馬郡群馬町に所在する。群馬町のなかでは東南部に位置する大字棟高に所在する。遺跡は関東平野の西北端部、赤城山、妙義山と上毛三山の一つである榛名山の東南麓の末端、井野川の支流天王川左岸に立地する。標高は122~125mである。

榛名山東南麓は、その地形を見ると扇状地が発達していることが解る。遺跡地はこの扇状地の扇端に立地している。この扇状地は相馬ヶ原扇状地と呼ばれている。相馬ヶ原扇状地は火山山麓に形成された裾野扇状地で形成に関わった河川は榛名火山帯に源流を発する白川と午王頭川である。相馬ヶ原扇状地の範囲は明確ではないが次のような範囲が示されている。

扇頂は標高600m付近の白川と午王頭川で挟まれた棟東村上野原の山麓付近である。

扇端は標高110mの等高線。この付近は高崎市日高遺跡で見られるような微高地をはじめとする自然堤防状微高地が張り出しておりこの微高地を連ねたのが標高110m付近である。

扇側は南限が白川上流部から井野川のラインで井野川の右岸は白川扇状地である。北限は午王頭川から駒寄川のラインである。駒寄川の東側は前橋台地である。相馬ヶ原扇状地の形成は比較的短時間でほぼ終了し板鼻黄色軽石降下時(1.3~1.4万年前)にはすでに大部分が曝水していたとされている。扇状地内は多くの河川により浸食され扇状地面と河床面では4~5mの比高差をもつ。こうした河川は約1km前後の間隔で存在しており、これらの河川には扇側にあたる井野川、午王頭川や八幡川、牛池川、染谷川がある。菅谷石塚遺跡の西側を流れる井野川の支流である天王川も河川の規模のわりには比高差がある。しかし、天王川左岸、遺跡地の東側は染谷川までの約2kmには浸食の進んだ河川が存在していない。この状況については菅谷石塚遺跡3区調査区で埋没河川が見つかり、7区・8区調査区では洪水に

よる堆積層が確認されている。3区調査区の埋没河川は榛名二ツ岳火山灰(Hr-F A)降下によって起きた土石流で埋没している。洪水層は層の上面、及び下面から出土した遺物から奈良時代後半から平安時代初期と推定される。このような状況が見られることから本来は扇状地内で見られるような浸食の進んだ河川が複数存在していたと推定される。

相馬ヶ原扇状地の形成後に扇状地からは前橋台地にかけて存在していた谷を洪水堆積物が埋戻し始めている。この洪水堆積物は概ね灰色砂層で「総社砂層」と呼ばれているものである。この砂層は板鼻黄色軽石と浅間C軽石との間で確認され、砂層の上位では縄文時代後期の称名寺式土器が出土している。こうしたことからこの砂層の形成は縄文早期頃から始まり前期から中期には部分的に自然堤防が形成されている。砂層の形成は、縄文前期から後期まで続いたとされている。







総社砂層の上位は基本土層で見られるように4世紀代の浅間C軽石(As-C)、6世紀初頭の榛名二ツ岳火山灰(Hr-F A)、6世紀前半の榛名二ツ岳軽石(Hr-F P)、1108年(天仁元年)の浅間B軽石(As-B)などが見られる。

遺跡地の南部や天王川の左岸では小規模な古墳に見える泥流丘が存在している。これらの泥流丘では沢口宏氏によると「陣馬泥流丘」とは区別され「菅谷泥流丘」とされ相馬ヶ原扇状地の古期扇状地形成期の堆積物と考えられている。

参考文献

- 早田 勉「第1章 群馬県の自然と風土」『群馬県史 通史編1 原始古代1』群馬県史編さん委員会 1990
沢口 宏「第1章 地形・地質」『群馬県誌 資料編4 自然』群馬県誌編纂委員会 1995



-  陣馬泥流丘
-  相馬ヶ原古期扇状地面
-  相馬ヶ原新期扇状地面
-  ニツ岳第二軽石流推積物
-  自然堤防および微高地
-  後背低地

0 1:10000 5km

5 図 遺跡周辺地形図

3. 歴史的環境

棟高東弥三郎街道遺跡周辺は、群馬県の中心都市である高崎市と前橋市に隣接する群馬町に位置している。群馬町は両市の住宅地としてベッドタウン化していることから近年盛んに開発が行われ、開発に伴う発掘調査も多く行われている。こうした発掘調査の成果は多くの報告書によって公表され、群馬町や高崎市では発掘調査の成果をもとに町誌、市史が編集・刊行され地域史の解明を行っている。本項ではこれらの資料をもとに周辺の遺跡について時代ごとに記載する。

縄文時代 遺跡地周辺地域では前項の地理的環境で記載したように縄文時代前期以前は度重なる洪水により居住するのは不向きな環境であったため遺構・遺物は検出・出土は確認されていない。この地域の縄文時代の遺跡は、他の時代に比べると数少ない。そしてなかでもっとも古い時期の遺跡は西浦北Ⅱ遺跡で検出された前期の竪穴住居が1軒、上野国分僧寺・尼寺中間地域で検出された前期諸磯C期の埋壘がある。中期になると自然堤防による微高地が発達し遺構・遺物が検出・出土する遺跡がやや多くなる。遺構が検出されている遺跡は、西浦北遺跡から柄鏡式住居、権現原遺跡から住居、大八木箱田池遺跡から住居、上野国分僧寺・尼寺中間地域から住居、小八木志志貝戸遺跡から埋壘、土坑などがある。後期ではまた減少する傾向がみられ最近まで福島遺跡や西浦南遺跡で土器片が出土しているだけであった。こうした中において小八木志志貝戸遺跡では後期称名寺期の敷石住居、掘立柱建物、配石、円形柱列等が検出されている。また、遺構は検出されていないが後期堀之内式期の土器も多く出土している。

弥生時代 遺跡地周辺は水田耕作に適した小谷地が存在していることから集落遺跡が急激に増加している。集落の増加は弥生時代でも後期後半から中期の集落は東の染谷川流域に位置する西三社免遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、新保遺跡などだけでまだ少ない。また、後期前半の集落は熊野堂遺跡、

浜尻遺跡、新保遺跡などで検出されているだけで前段階と同様である。この様相は後期後半では一変している。小八木志志貝戸遺跡でも調査区北側の0区から2区にかけて集落、墓域などを検出した。正観寺遺跡群では環濠集落や方形周溝墓が検出され、小八木1遺跡でも集落を検出している。遺跡地西側の井野川左岸に位置する井出村東遺跡、西浦北遺跡、西浦南遺跡、熊野堂遺跡、雨壺遺跡などで多くの住居が検出されている。これらの集落遺跡では数軒単位のみとまとまりがみられる。こうした傾向は天王川の西側の諸口遺跡でもみることかができることからこの地域では後期後半には広範囲に小規模な集落が多く存在していたようである。

古墳時代 集落は弥生時代以上に増加の傾向が見られる。特に5世紀から6世紀にかけての集落の増加には顕著なものがみられる。こうした遺跡には中林遺跡、井出村東遺跡、三ツ寺Ⅱ遺跡、三ツ寺Ⅲ遺跡がある。また、弥生時代から継続する熊野堂遺跡などでもこの時期に住居件数が飛躍的に増加している。こうした背景には三ツ寺Ⅰ遺跡の豪族居館に代表される豪族層の存在がある。そして2000年には新たに北谷遺跡においても三ツ寺Ⅰ遺跡と同様の堀をもち堀内側を高く盛り土した豪族居館が検出されている。この地域はこうした居館の豪族層に支配され農地拡大のために大規模な開発が行われた地域であると考えられる。この豪族層を経済的に支えた水田や畠は周辺地域で検出されている。水田は古墳時代初頭の浅間山C軽石(As-C)、6世紀初頭の榛名ニツ岳火山灰(Hr-F A)、榛名ニツ岳軽石(Hr-F P)などで埋没したものが御布呂遺跡、芦田貝戸遺跡、大八木屋敷遺跡、熊野堂遺跡、小八木遺跡、菅谷石塚遺跡など多くの遺跡から検出されている。このほか祭祀遺構には正観寺遺跡で巨石を利用した盤座祭祀跡や井野川遺跡では河川流域内から石製模造品などがまとめて出土しており河川に対する祭祀場の可能性が指摘されている。

しかし、三ッ寺I遺跡や北谷遺跡でみられる繁栄も榛名山二ツ岳の二度の噴火やこれに伴う土石流による農地の埋没によって経済的基盤を失いその後の覇権は他地域へ移行し同様な繁栄はみられない。

遺跡地周辺の古墳は現在ほとんど開発によって削平されているが石塚古墳、権現塚古墳、オトウカ山古墳、三本山古墳、トミツカ山古墳などが存在した菅谷古墳群がある。この菅谷古墳群では正観寺遺跡群の発掘調査でも墳丘がすでに削平されている円墳が調査されている。1935年に刊行された「群馬県古墳総覧」では旧中川村所在の古墳は現尻尻町の天王山古墳と小八木町のトミツカ古墳が掲載されているだけであるが1957年(昭和32年)に刊行された中川村誌では12基の古墳が確認されており実際はこの数以上に存在していたと想定される。このうち三本山古墳と権現塚古墳は発掘調査が行われ直刀、刀子、鉄鏃、銅鏃などが出土している。こうした様相から菅谷古墳群は大部分が後期、終末期の円墳を中心とした古墳群と考えられる。天王川右岸では諸口古墳群がある。諸口古墳群は現在までに円墳3基が確認され発掘調査が行われている。この3基の古墳は1号、3号が埴輪を有し6世紀代と考えられている。また、埴輪棺が1基検出されており、使用されている埴輪は5世紀中葉のものである。

飛鳥・奈良・平安時代 遺跡地は隣接する高崎市の町名に「小八木」・「大八木」の地名が残っていることなどから律令制による評里制では上毛野国車評八木里(車評については藤原京出土木簡、郷名の漢字は和名類聚抄による)に相当すると推定されている。奈良時代には八木郷は推定上野国府や上野国分寺などの古代の中核施設が存在して地域の西に隣接して位置する。古代八木郷は地名や地形から推定すると旧中川村の範囲とその周囲に郷域の範囲を設定することができる。

遺跡地の周辺では古代八木郷の西部に当たる井野川両岸に位置する大八木屋敷遺跡、融通寺遺跡、熊野堂遺跡では律令制を象徴するような遺構・遺物が検出、出土している。大八木屋敷遺跡では八脚門を

もつ櫓列と溝で区画された内部に掘立柱建物群が存在する施設が検出され「上野国交代実録帳」に見られる「八木院」と想定されている。大八木屋敷遺跡の東側に隣接する融通寺遺跡では300軒近い竪穴住居が検出され大規模な集落遺跡である。融通寺遺跡ではその他に瓦、瓦塔、銅鏡、緑釉陶器唾壺が出土しており寺院が存在した可能性が指摘されている。熊野堂遺跡では200軒以上の竪穴住居と金銅製の装飾金具が出土している。こうした三遺跡は井野川を挟んではいが至近距離にあり古代八木郷の中心的存在を示している。

これに対して遺跡地近隣では正観寺遺跡群や小八木遺跡などでこの時代の集落が検出されているが竪穴住居が中心で農村の様相がみられた。こうした中で小八木志志貝戸遺跡では方1町以上の規模をもつ区画の中に規則的に配置された掘立柱建物で構成された8世紀中葉の居宅が検出されている。また、中川遺跡でも9世紀代の大規模掘立柱建物群が検出されている。こうした状況から古代八木郷内では東西に二大富裕・富豪層の存在が想定される。

菅谷石塚遺跡1区では東山道と想定される古道が検出されている。この古道は両側に側溝を持ち心々間距離が6m前後の道路遺構である。この道路遺構は同様な規模のものが高崎市寺ノ内遺跡、御布呂遺跡、熊野堂I遺跡、群馬町西浦南遺跡、福島飛地遺跡、高貝戸遺跡、正観寺菅谷遺跡で検出されている。これらの遺構を地図上に落とすとほぼ一直線上に並ぶことから同一の道路遺構と考えられる。上野での東山道は金坂清則氏によって提唱されたルート(国府ルート)とこれらの遺跡で発見された遺構とが一致することや推定国府の南側を通ることなどの条件からこのルートが東山道であると想定されていた。しかし、高貝戸遺跡では道路側溝と重複して側溝より古い段階の住居が9世紀後半代であることから律令制当初からの東山道としては疑問視されていた。近年の発掘調査の成果では高崎市情報団地遺跡や玉村町砂町遺跡、境町牛堀遺跡、矢ノ原遺跡、十三宝塚遺跡で7世紀から8世紀にかけて心々間距離12

II 遺跡地の環境

m前後の直線的な道路跡が発見されている。こうしたことから坂爪久純氏によって菅谷石塚遺跡1区で検出されている東山道に先行するものと想定されている(牛堀・矢ノ原ルート)。また、牛堀・矢ノ原ルートは十三宝塚遺跡で重複する住居との関係から8世紀末には廃絶されたと考えられている。こうした状況から国府ルートが開設されるまでは半世紀近い間隔があることから新田町下新田遺跡で検出されている道路跡のような第3のルートが存在する可能性が考えられている。

中世遺跡地の東では箕輪長野氏関係の平城である菅谷城が存在する。こうした城館跡には南に位置

する小八木志志貝戸遺跡や小八木井野川遺跡、正観寺遺跡群で館の堀が検出されている。このほか高崎市小八木町や浜尻町では小八木環濠遺跡、小八木新井屋敷跡、妙典寺、浜尻八幡屋敷跡などが存在している。

墓坑は小八木志志貝戸遺跡の2区・4区で100基以上が見つかり中世の墓坑群としては県内でも最大規模の墓域を形成している。なお、ここでは火葬跡も3基検出されている。

道路跡は小八木志志貝戸遺跡6区で南北走行のものが検出されており調査担当の坂井 隆氏は「東道」と想定している。

参考文献

- ・全般
- 高崎市史編さん委員会「新編 高崎市史 資料編2 原始古代II」
- 高崎市 2000
- 高崎市史編さん委員会「新編 高崎市史 通史編1 原始古代」
- 高崎市 2000
- 中川村誌編纂委員会「中川村誌」1957
- 群馬町町編さん委員会「群馬町誌 資料編 原始古代」群馬町誌刊行委員会 1999
- 群馬町町編さん委員会「群馬町誌 通史編上 原始古代・中世」群馬町誌刊行委員会 2001
- ・発掘調査報告等
- 「小八木志志貝戸遺跡群1 小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡・菅谷石塚遺跡 弥生時代編」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
- 「小八木志志貝戸遺跡群2 小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡・菅谷石塚遺跡 古墳時代編」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001
- 「小八木志志貝戸遺跡群3 小八木志志貝戸遺跡・小八木井野川遺跡 中世編」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001
- 「小八木志志貝戸遺跡4 2区 縄文時代・4～6区 縄文時代～平安時代編」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
- 「菅谷石塚遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003
- 「菅谷遺跡」群馬町教育委員会 1980
- 「小八木遺跡(I)」高崎市教育委員会 1979
- 「小八木遺跡(II)」高崎市教育委員会 1980
- 「正観寺遺跡群(I)」高崎市教育委員会 1979
- 「正観寺遺跡群(II)」高崎市教育委員会 1980
- 「正観寺遺跡群(III)」高崎市教育委員会 1981
- 「正観寺遺跡群(IV)」高崎市教育委員会 1982
- 「高崎市井野川遺跡」群馬県教育委員会 1970
- 「諸口遺跡」群馬町教育委員会 1984
- 「諸口Ⅲ遺跡」群馬町教育委員会 1985
- 「大八木堀田池遺跡」高崎市教育委員会 1983
- 「大八木堀田池遺跡Ⅱ」高崎市教育委員会 1984
- 「熊野堂遺跡第三地区・雨庭遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 「西瀬南遺跡」群馬町教育委員会 1988
- 「西瀬北遺跡」群馬町教育委員会 1989
- 「矢島遺跡・群島遺跡」高崎市教育委員会 1979

- 「芦田貝戸Ⅱ遺跡」高崎市教育委員会 1980
- 「大八木屋敷遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 「融造寺遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 「熊野堂遺跡(1)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 「熊野堂遺跡(2)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 「井出村東遺跡」群馬町教育委員会 1983
- 「三ツ寺Ⅰ遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 「三ツ寺Ⅱ遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 「中林遺跡」群馬町教育委員会 1983
- 「西三免社遺跡」群馬町教育委員会 1990
- 「諏訪西遺跡」群馬町教育委員会 1995
- 「小池遺跡」群馬町教育委員会 1992
- 「冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
- 「日高遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 「中尾遺跡 遺構編」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 「中尾遺跡 遺物編」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 「鳥羽遺跡」(1)～(6)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1986～1992
- 「国分寺・尼寺中間地域」(1)～(8)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986～1992
- 「史跡 上野国分寺跡」群馬県教育委員会 1989
- 「上野国分尼寺跡・上野国分二寺中間地域」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 「現地説明会資料 菅谷地区遺跡群 東久保遺跡・塚田中原遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
- 田辺芳昭「北谷遺跡」『平成13年度調査遺跡発表会要旨』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001
- 群馬町教育委員会・群馬県教育委員会「群馬町北谷遺跡 現地説明会資料」2002
- 金坂清樹「上野国府とその付近の東山道、および群馬、佐位駅家について」『歴史地理学紀要』16 歴史地理学会 1978
- 金坂清樹「上野国」『古代日本の交通路Ⅱ 東山道』大明堂 1987
- 坂爪久純・小宮俊久「上野国の古代交通路」『古代交通研究』新刊号古代交通研究会 1992
- 坂爪久純「上野国の古代道路」『古代文化』第47巻4号 (財)古代学協会 1996
- 「指定東山道一群馬町中泉・福島・菅谷地区を中心とする遺構確認調査」群馬町教育委員会 19987
- 「第70回企画展 古代のみち」群馬県立歴史博物館 2001



1 菅谷石塚 2 小八木野野川 3 小八木志志見戸 4 正観寺西原 5 オトワカ山古墳 6 小八木 7 正観寺遺跡群 8 野野川 9 樋口 10 大八木築田池 11 観音 12 西経南
 13 西経東 14 藤原原 15 戸田見戸 16 大八木遺跡 17 観音寺 18 観音堂 19 月影村家 20 三ツ寺 21 三ツ寺日 22 中林 23 西三免社 24 小池 25 藤原西 26 池本村東
 27 北寺 28 藤原池 29 藤原戸 30 日高 31 中野 32 池原 33 藤原寺・紀寺中間跡 34 上野原分寺 35 上野原分寺

6 図 周辺遺跡図 (1/25,000)

Ⅲ 検出した遺構と遺物

1. 概要

縄文時代

縄文時代の遺構は竪穴住居1軒、土坑4基を検出した。遺構の分布はB区の南側、B-3区、B-8区から他の調査区では確認されなかった。遺構の確認はⅦ層の堆積が良好な地点ではⅦ層上面、その他の地点ではⅧ層上面で行った。

竪穴住居は調査区の中で最も幅の狭いB-3区で検出したため竪穴住居のごく僅かな箇所ではしかなく全体像の把握には至らなかった。

土坑は4基を検出したが、B31号～33号土坑からは遺物の出土が見られず、時期の確定までには至らなかった。B34号土坑では縄文深鉢2個体と打製石斧が出土している。

縄文時代の遺物は竪穴住居、土坑以外からも後世の遺構や遺構外からも多少の出土を見ることができたが、その出土はB区を中心とする泥流丘の範囲からであった。

古墳時代～奈良・平安時代

古墳時代から奈良・平安時代の遺構は竪穴住居28軒、井戸4基、溝22条、土坑25基を検出した。遺構の分布はB区を中心にA-1区の西より、C-5区の東より、D-6区など陣馬泥流丘及びその周辺部に集中する。その周辺部では溝や土坑が僅かに確認されたが人為的なものであるか懐疑的なものが存在した。

竪穴住居は調査区の範囲が制約されているため全貌を明らかにできたものが1軒しかなくその他は全て一部分の調査に限られた。そのためカマドも6軒でしか確認することができなかった。残存状態は中世以降の耕作などによる攪拌が激しく確認面から床面までが全体的に浅いこともあって良好な状態ではなかった。

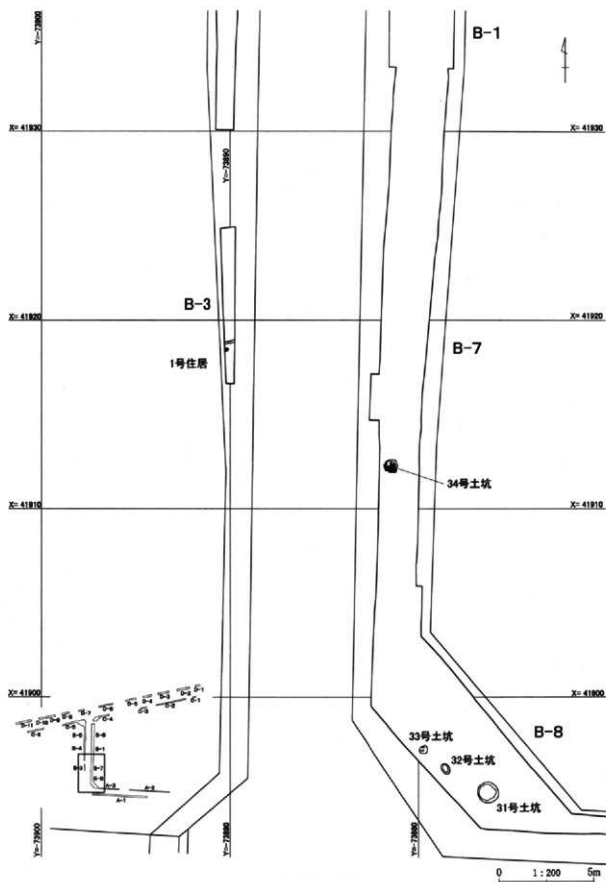
中世以降

中世以降の遺構としては井戸1基、溝10条、土坑21基を検出した。遺構の分布はA区、B区、C区、D区の各区に存在するが集中するようなことはなく散発的であった。

中世の遺構は隣接する菅谷石塚遺跡ではⅢ層、Ⅳ層上面での確認が可能であったが、榎高東弥三郎街道遺跡では中世での耕作が盛んであったためか大部分の地点でⅣ層が攪拌され残存している調査区が少なかった。Ⅳ層上面で遺構を確認できた調査区はA-2区、B-2区、C-3区、D-11区など僅かな地点であった。このため前記の調査区以外は古墳時代から奈良・平安時代の遺構確認と同様のⅥ層、Ⅶ層上面で行った。このため遺構の年代判断は遺物または埋没土でおこなった。しかし、中世の遺構からは遺物の出土がほとんどなく、出土しても奈良・平安時代の遺物が廃棄されていたり、周りに存在する奈良・平安時代の遺構からの流入とみられる。こうした状況から年代の比定は埋没土から判断した。中世遺構の埋没土はAs-Bを多く含むⅡ層が主体でこれに下層のⅣ層やⅥ層をブロック状に含んでいる。

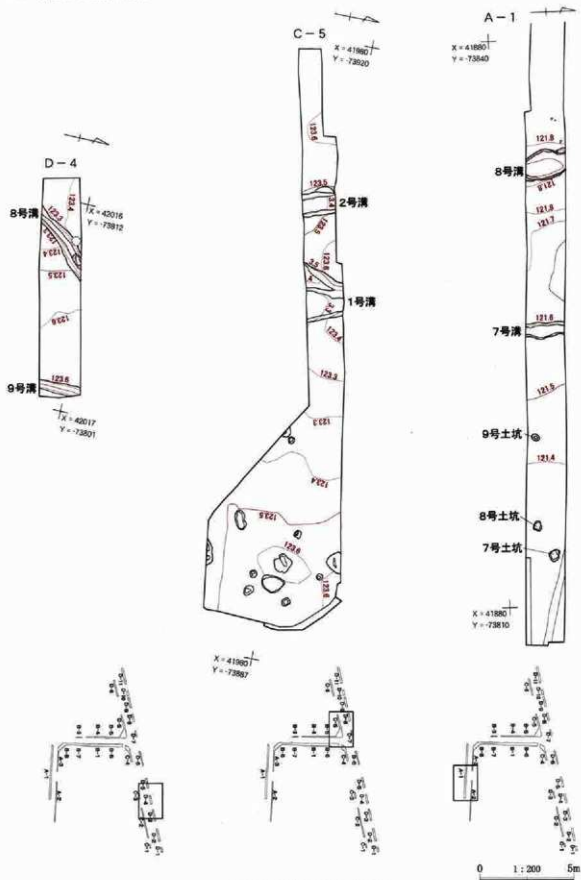
なお、中世以降で掲載している遺構は江戸時代後期の遺構までを対象としており、明らかに近代とみられる遺構については省略した。これらの遺構の多くはB-2区で検出した土坑群などが相当する。

1. 概要



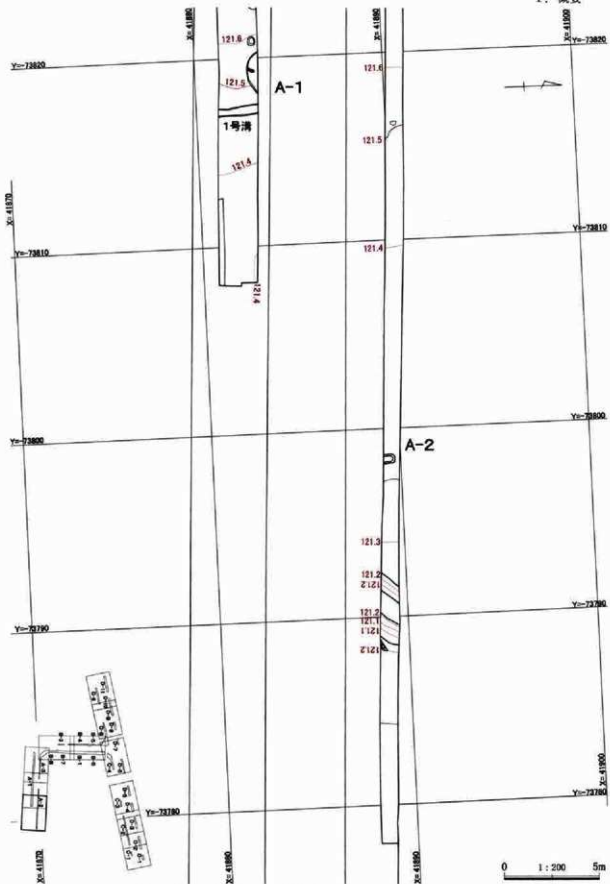
7 図 縄文時代 全体図

Ⅲ 検出した遺構と遺物



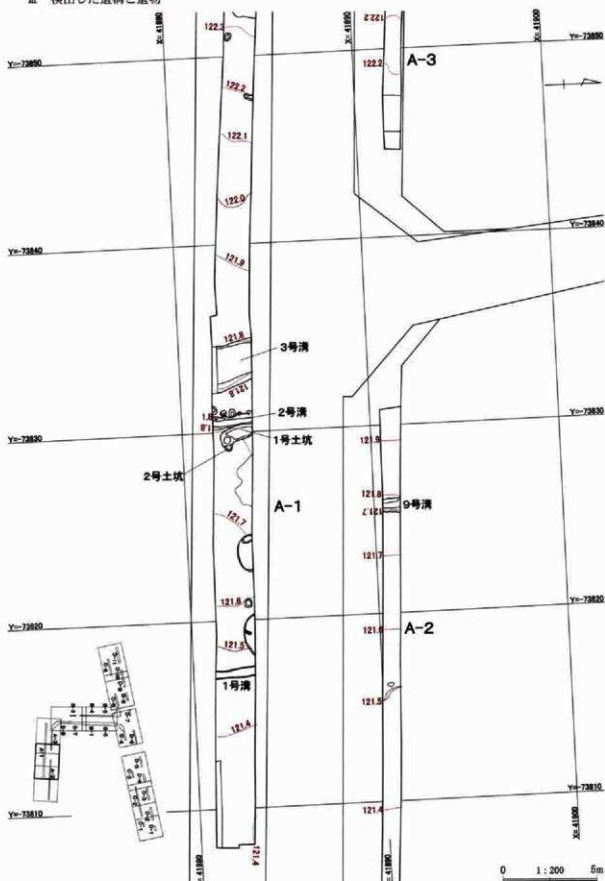
8图 古墳時代前期(VI層下面)全体図

1. 概要



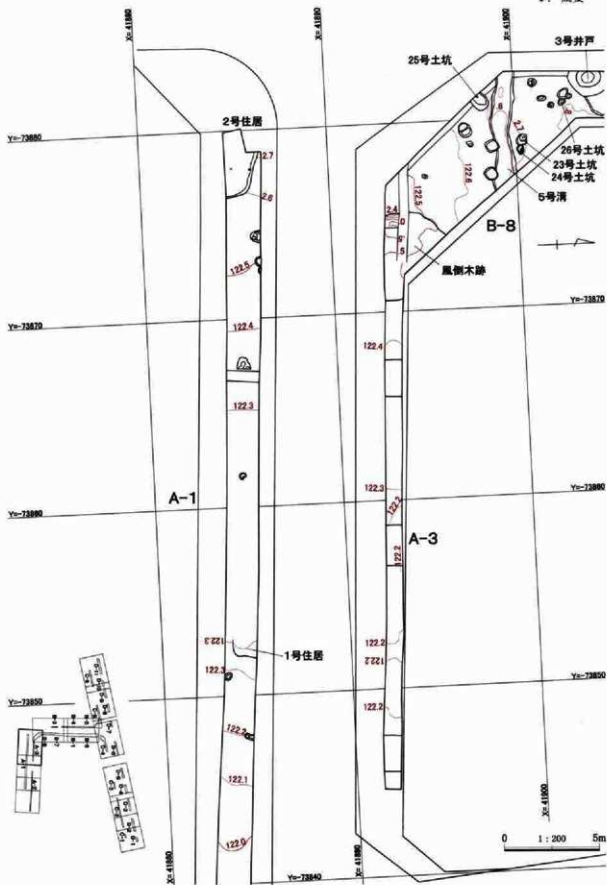
9 図 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)1

Ⅲ 検出した遺構と遺物



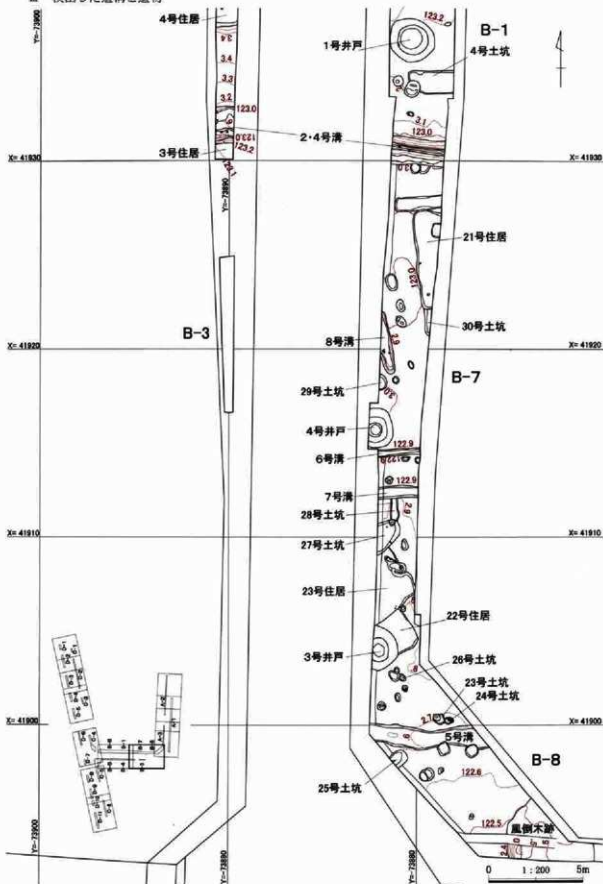
10図 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)2

1. 概要

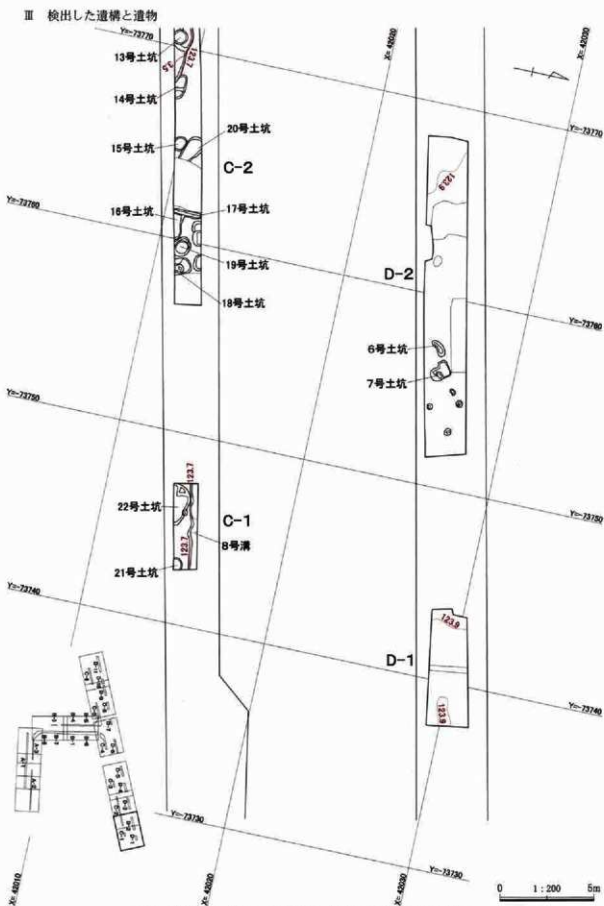


11图 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)3

III 検出した遺構と遺物

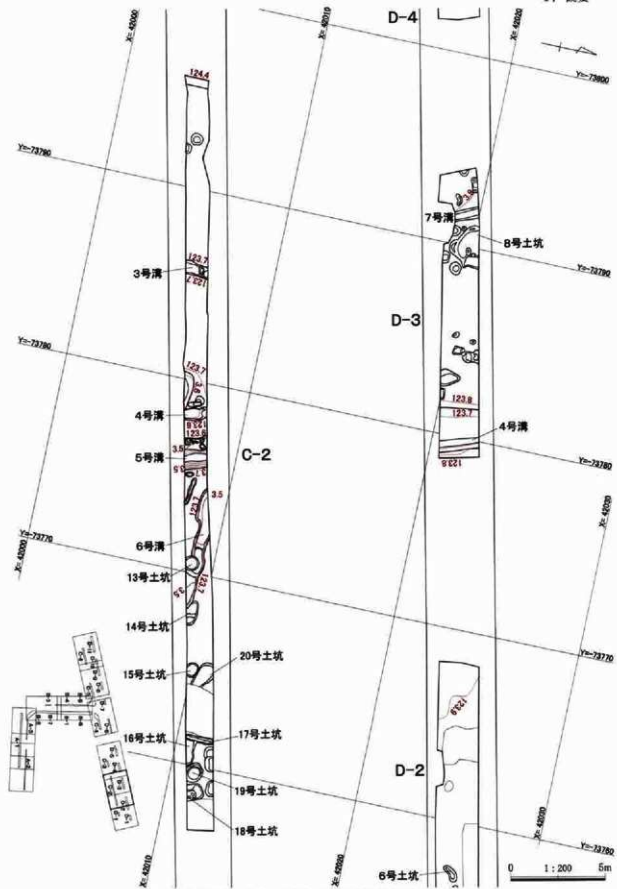


12図 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)4



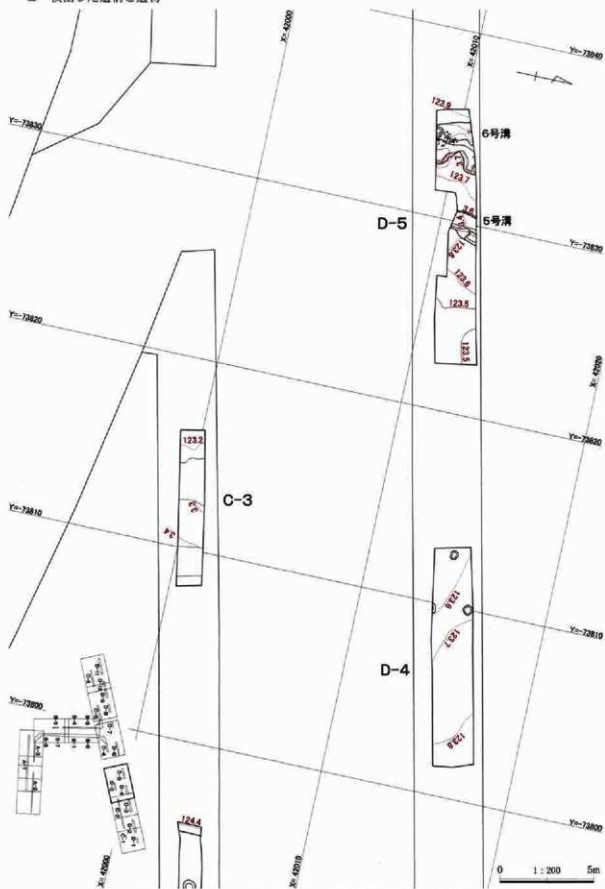
14图 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)6

1. 概要



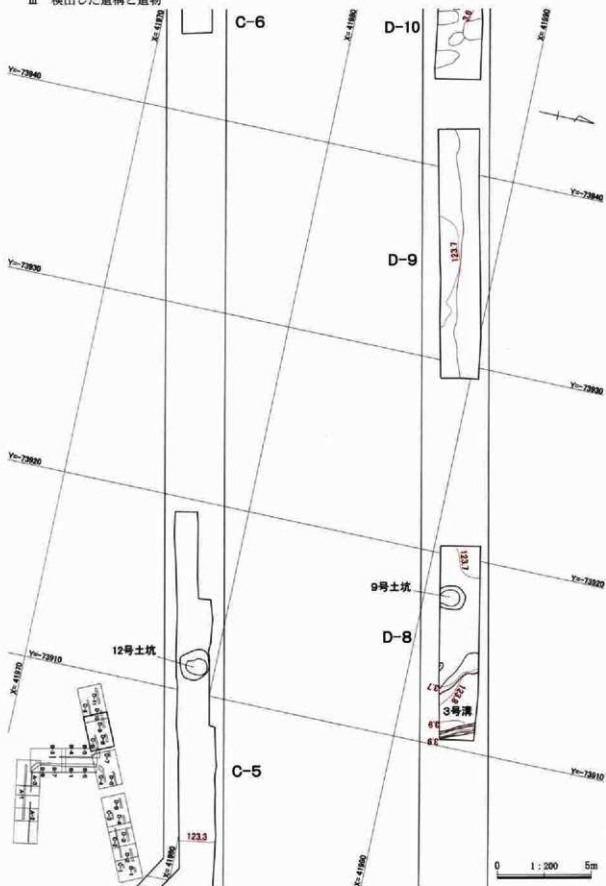
15図 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)7

Ⅲ 検出した遺構と遺物



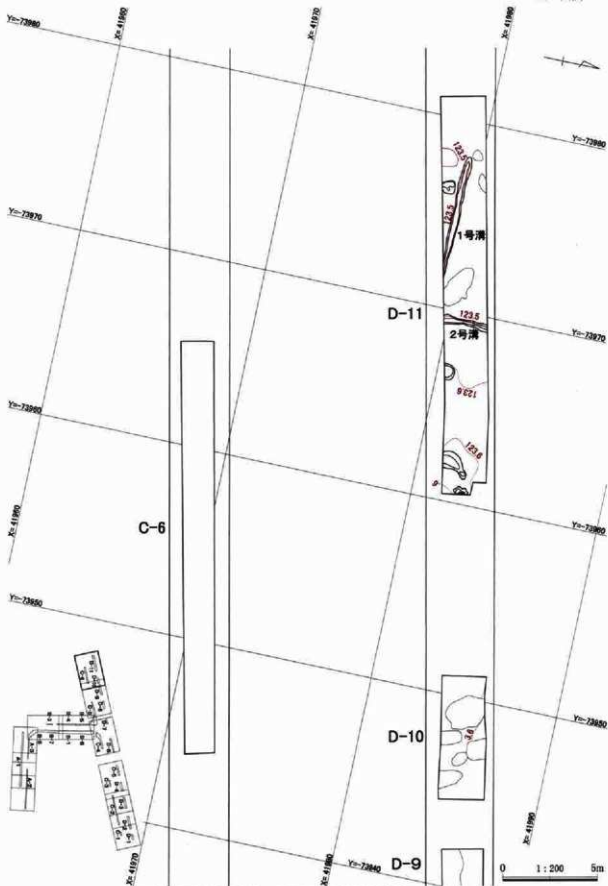
16図 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)8

Ⅲ 検出した遺構と遺物



18図 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)10

1. 概要

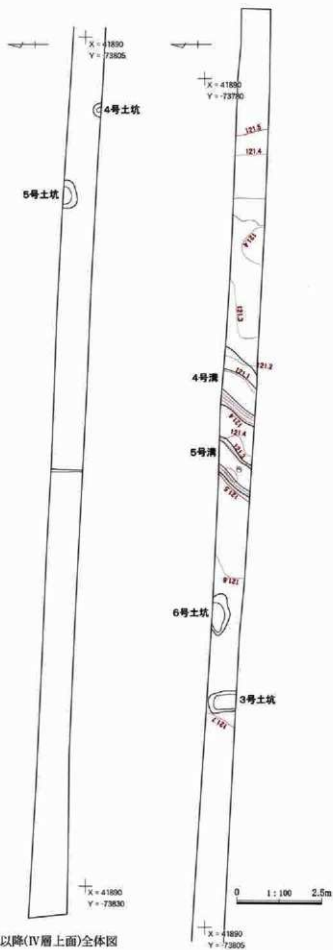


19図 古墳時代～奈良・平安時代、中世以降全体図(分割図)11

Ⅲ 検出した遺構と遺物



26



20图 中世以降(IV層上面)全体図

2. 縄文時代

(1)住居

B 1 号住居

本住居はB-3区南半、X=41916~41918、Y=-73889・-73890に位置する。調査区は調査可能な範囲が幅0.5~0.7mしかなく全貌は不明である。遺構の確認は埴馬泥流丘土のⅧ層である。

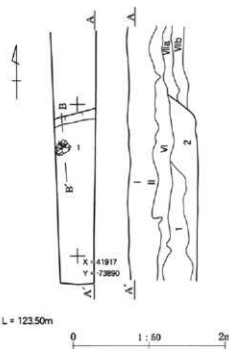
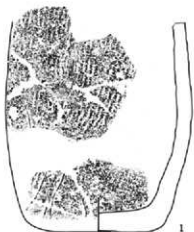
規模は南北2.30m+αを測る他は不明である。壁高は確認面からは10cm前後であるが、断面では30cmが確認された。

調査範囲内では貯蔵穴、柱穴、周溝は確認されなかった。床面は地山(Ⅷ層)をそのまま踏み固めて硬化面を構成していた。

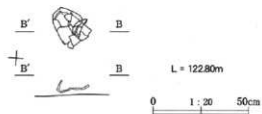
調査範囲内では炉は確認されなかった。

埋没状態は土層断面の観察から自然埋没とみられる。

遺物は北辺寄りで1の深鉢が出土しているが、出土位置は床面との間に僅かではあるが黒色土の堆積が確認された。出土した1、2の土器はともに中期加曾利E式の古い段階に比定され、本住居に共存すると考えられる。



- 1 黒色土 Ⅷに類似、Ⅷよりやや淡い色調。
- 2 黒色土 1に類似、1より暗い色調。



21図 B 1 号住居遺構図・遺物図

NO.	種類 P L	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形状の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	+3 底~胴下半	径 10.0	粗砂粒/良好 にぶい黄褐色	R L 縦位施文。	加曾利E 式
2	縄文土器 深鉢	埋没土中 胴部下半片		粗砂粒/良好 にぶい黄褐色	R L 縦位施文。	加曾利E 式

Ⅲ 検出した遺構と遺物

(2)土坑

B31号土坑

本土坑はB-8区南より、X=41894・41895、Y=-73875・-73876に位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。

平面形態はほぼ円形を呈し、規模は確認面で径1.10m、底面径0.90×0.85m、深度10~17cmを測る。遺物は出土していない。

B32号土坑

本土坑はB-8区南より、X=41895・41896、Y=-73878に位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。

平面形態は楕円形を呈し、規模は確認面で径0.58×0.40m、底面径0.43×0.27m、深度20cmを測る。遺物は出土していない。

B33号土坑

本土坑はB-8区南より、X=41897、Y=-73879に位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。

平面形態は不整形形を呈し、規模は確認面で径0.42×0.42m、底面径0.18×0.12m、深度17~18cmを測る。遺物は出土していない。

B34号土坑

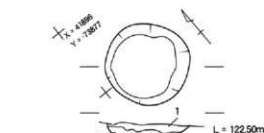
本土坑はB-8区中程、X=41911・41912、Y=-73881に位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。

平面形態は矩形に近い形態を呈し、規模は確認面で径0.68×0.68m、底面径0.58×0.52m、深度14~20cmを測る。

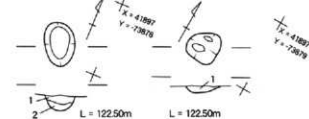
遺物は深鉢2個体と打製石斧の上半部分が出土している。深鉢は5cm大の破片で出土した。1は胴部

の一部が欠落するがほぼ完形になるだけの破片があったが2は底破片だけである。なお、1は中期勝坂式の新しい段階、2は加曾利E式の古い段階である。

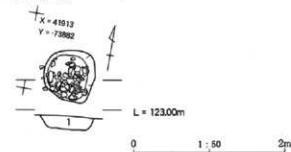
B31号土坑



B32号土坑



B34号土坑



- B31号土坑
1 褐色土 Ⅱ(黒色土)、Ⅲ(黄褐色土)ブロックを20~30%含む。
2 灰黄褐色土 1に類似、1よりⅢブロックを多く含む。

- B32号土坑
1 黒褐色土 Ⅱ(黄褐色土)粒を10%含む。
2 黒褐色土 1に類似、1より黄色みが強くⅢブロックを10%含む。

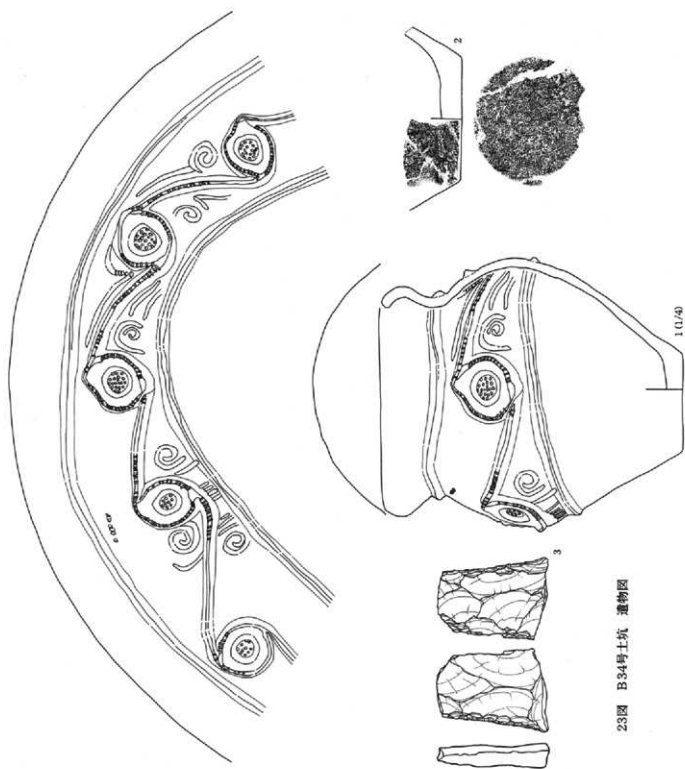
- B33号土坑
1 黒褐色土 Ⅱ(黄褐色土)ブロックを10%含む。

- B34号土坑
1 黒褐色土 Ⅱ(黄褐色土)ブロックを5%含む。

22図 B31号土坑、B32号土坑、B33号土坑、
B34号土坑 遺構図

B34号土坑

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型 特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	埋没土中 一部欠損	口径 23.8 底径 11.3 器高 35.4 胴径 32.0	粗砂粒/良好 にぶい橙	胴部と胴部中位を隆線で区画、内部を隆線と沈線 で文様を構成。	勝坂式
2	縄文土器 深鉢	埋没土中 底部	底径 11.0	粗砂粒/良好 明黄褐色	胴部は縦方向のへら削り。	加曾利E 式
	種類 器形	出土位置/残存率	計測値	胎土 石材	計測値	
1	石器 打製石斧	埋没土中/上半部		黒色頁岩	長(6.4) 幅(4.9) 厚(1.5) 重(50.6)	PL35



23圖 B34号土坑 遺物図

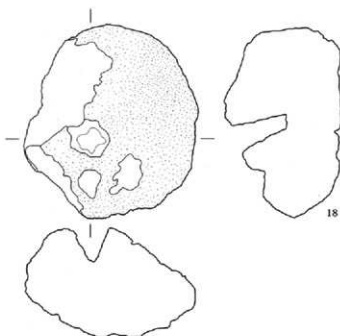
Ⅲ 検出した遺構と遺物

(3) 遺構外出土遺物

縄文時代の遺物の大部分はB区からの出土である。その他のA区、C区、D区からの出土もB区に近い地点から出土し、東西の低地からの出土はほとんどみられなかった。出土した遺物は土器、石器などがあるが、出土量は遺物収納用箱に1箱ほどであった。出土した土器は胴板式、焼町式、加曾利E式など中期中葉に集中し、その多くは加曾利E式のものである。石器は石錘、石匙、剥片石器が出土している。この他、D1号井戸の井戸枠に多孔石が使用されていた。この多孔石は縄文時代の遺物ではあるがD1号井戸の項目で記載した。



24図 遺構外出土遺物 遺物図(1)



25図 遺構外出土遺物 遺物図(2)

NO.	種 類	出土位置	計 測 値	胎 土 / 焼 成 色 調	成 形 特 徴	備 考
1	縄文土器 深鉢	B-4区遺層 胴部小片		細砂粒/良好 赤	隆線と沈線の間にヘラによる削みが施されている。	勝取式
2	縄文土器 深鉢	B-4区遺層 口縁部小片		細砂粒/良好 にぶい褐	隆線と沈線による施文とボタン状の突起が貼付。	焼町式
3	縄文土器 深鉢	B-3区遺層 胴部小片		細砂粒/良好 灰褐	隆線と沈線によって施文	焼町式
4	縄文土器 深鉢	B-4区遺層 胴部小片		細砂粒/良好 明赤褐	隆線と沈線による区画と押型文が施文。	中期中葉
5	縄文土器 深鉢	B-1区 口縁部片		細砂粒/良好 にぶい褐	平行する隆線とその間に波状の隆線により施文。	加曾利E 式古
6	縄文土器 深鉢	B-4区遺層 胴部小片		粗砂粒/良好 にぶい黄橙	隆線による区画、区画内にR.L縦位施文。	加曾利E 式
7	縄文土器 深鉢	A1区遺層 胴部小片		粗砂粒/良好 にぶい黄橙	隆線による区画、区画内にR.L縦位施文。	加曾利E 式
8	縄文土器 深鉢	B-3区遺層 口縁部片		粗砂粒/良好 にぶい黄橙	口唇部下に幅1cmの沈線が走り、その下位はL.R縦位施文。	加曾利E 式
9	縄文土器 深鉢	B-7区 胴部片		粗砂粒/良好 明赤褐	隆線による渦巻き文とR.L縦位施文。	加曾利E 式
10	縄文土器 深鉢	B-3区遺層 口縁部片		粗砂粒/良好 橙	口唇部下に3本の沈線が走り、その下位はL.R縦位施文。	加曾利E 式
11	縄文土器 深鉢	B-8区 胴部片		粗砂粒/良好 褐	熟赤文による施文。	加曾利E 式
12	縄文土器 深鉢	B-5区遺層 胴部片		粗砂粒/良好 明赤褐	熟赤文による施文。	加曾利E 式
13	縄文土器 深鉢	B-3区遺層 底部片		粗砂粒/良好 橙	胴部下位は削め方向のヘラ削り。	加曾利E 式
	種 類	器 形	出土位置/残存率	石 材	計 測 値	
14	石器	石鏃	B-6区/端部欠損	黒色頁岩	長(4.0) 幅 2.4 厚 0.6 重 4.3	PL37
15	石器	石鏃	B-8区遺層/完形	黒色頁岩	長 6.0 幅 3.9 厚 0.7 重 14.9	PL37
16	石器	使用痕跡片	A-1区/一部欠損	黒色頁岩	長(7.5) 幅 8.8 厚 1.5 重(83.5)	PL37
17	石器	剥片	B-7区/完形	珪質頁岩	長 3.3 幅 1.9 厚 0.7 重 4.7	PL37
18	石製品	西石	A-1区/一部欠損	粗粒輝石安山岩	長 15.3 幅(13.9) 厚 9.3 重(1230)	PL37

2. 古墳時代～奈良・平安時代

(1) 住居

A1号住居

本住居はA-1区西寄り、X=41883・41884、Y=-73851に位置する。この地点は区画整備などにより上部を掘削されたために遺構の残存状態は非常に悪く、調査区北側の断面で僅かに遺構の存在が確認されただけで平面での確認はできなかった。

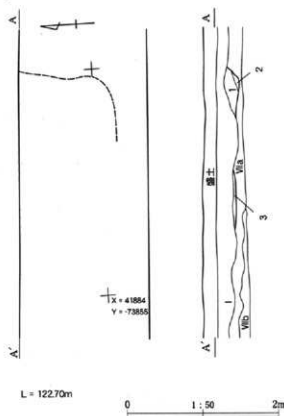
住居範囲は南側断面で確認できないことから調査区内に住居南辺が位置すると推定されるが、平面形態、規模などについては不明である。

北側の断面では掘り方の一部とカマドの一部と推定される箇所が観察された。

遺物の出土は見られなかった。

A1号住居

- 1 黒褐色土 Ⅶブロック、焼土ブロックを30%含む。(カマドか)
- 2 黒褐色土 焼土・ブロックを10%含む。(カマドか)
- 3 黒色土 黄褐色粘土の小ブロックを20%含む。(床または掘り方)



26図 A1号住居 遺構図

A2号住居

本住居はA-1区西端、X=41884~41886、Y=-73876~73879に位置する。調査した範囲は住居北西の一部で大部分は現道下と南側民有地に位置する。遺構の確認面は陣馬泥流丘土であるⅦ層であった。残存状態は上部を土地区画整備によって掘削されているためあまり良い状態ではない。他遺構との重複は調査区内では確認されず、単独で占有していた。

平面形態は住居の一部しか調査できなかったため詳細は不明であるがほぼ方形または長方形を呈するとみられる。規模は東西3.60m+ α 、南北1.90m+ α 、各辺長は北辺2.30m+ α 、東辺1.0m+ α を測る。壁高は10cm前後である。主軸方位はほぼ東を指す。

調査範囲内では貯蔵穴、柱穴、周溝は確認されなかった。床面は踏み固めてはいるがはっきりとした硬化面は構成されていなかった。

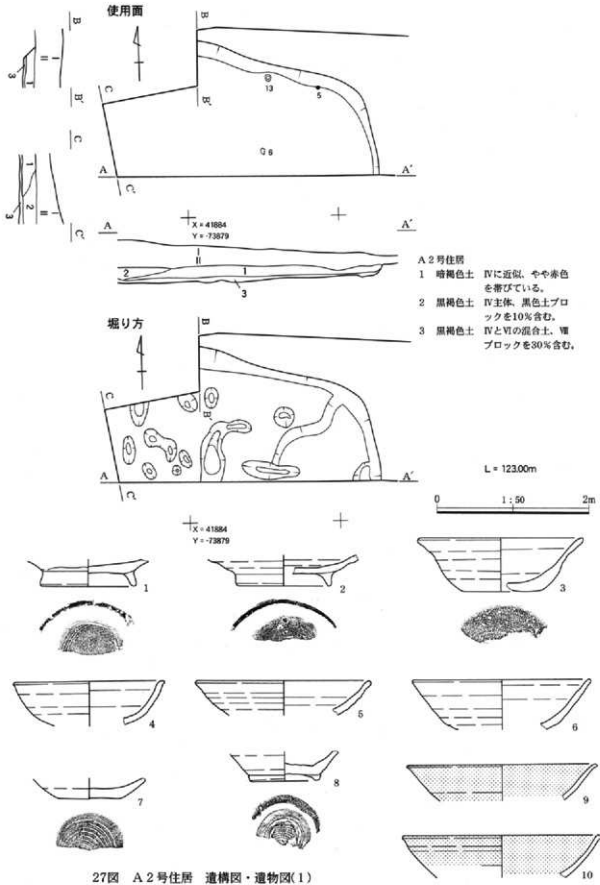
調査範囲ではカマドは確認されなかった。

掘り方は東側が僅かに低い状態であるが施設などは確認されなかった。掘り方図に見られる小規模な落ち込み痕は住居掘削の際の工具痕とみられる。床面までの土はⅣ層とⅥ層などの掘削した土を混合したものを再度埋めて床面としている。

埋没状態は土層断面の観察から自然埋没であるとみられる。

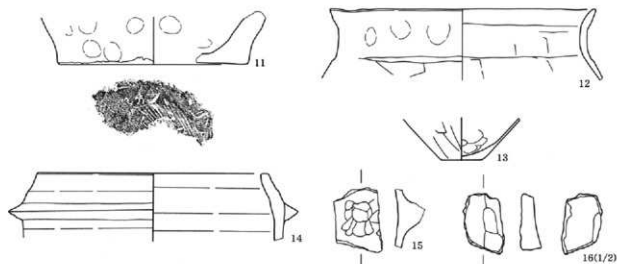
遺物は土師器甕、須恵器椀、甕、羽釜などが出土している。

本住居の年代は出土物から10世紀第1四半期に比定される。



27図 A 2号住居 遺構図・遺物図(1)

III 検出した遺構と遺物



28図 A 2号住居 遺物図(2)

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成整形の特徴	摘要
1	須忠器 皿	埋没土中 底部片	底径 7.8 台径 7.4	細砂粒/還元焙 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 貼付。	
2	須忠器 皿	埋没土中 1/5	底径 7.8 台径 7.2	粗砂粒/還元焙 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。	
3	須忠器 椀	埋没土中 1/4	口径 12.8 底径 6.6 器高 4.2	粗砂粒/還元焙 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
4	須忠器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 11.6 底径 5.6	粗砂粒/酸化焙 にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回りか。	
5	須忠器 椀	+6 口縁部片	口径 13.6	粗砂粒/還元焙 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	
6	須忠器 椀	+10 口縁部片	口径 13.6 底径 7.0	粗砂粒/還元焙 灰	ロクロ整形、回転右回りか。口縁部下位に高台貼 付時のナデ。	
7	須忠器 椀	埋没土中 底部片	底径 5.0	粗砂粒/還元焙 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
8	須忠器 椀	埋没土中 底部片	底径 5.6 台径 4.6	粗砂粒/還元焙 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。高 台は貼付。	
9	灰輪陶器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 14.6	微砂粒/還元焙 灰赤	ロクロ整形、回転方向不明。方法は刷毛塗りか。	光ヶ丘 1 号室式期
10	灰輪陶器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 15.4	微砂粒/還元焙 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。方法は漬け掛け。	大塚 2号 室式期
11	須忠器 甕	掘り方 底部片	底径 15.0	粗砂粒/還元焙 灰	胴部下位に底部との接合時の指痕圧痕が残る。底 部はヘケ削り。	
12	土師器 甕	確認時 口縁部片	口径 20.8	細砂粒/良好 にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、頸部はナデ、胴部上位は横方向 のヘケ削り。胴部に指痕圧痕。内面胴部ヘラナデ。	
13	土師器 甕	+6 底へ胴下位	底径 3.3	粗砂粒/良好 灰赤褐	胴部下位は縦方向のヘケ削り。底部は不定方向の ヘケ削り。内面胴部はヘラナデ。	
14	須忠器 羽釜	確認時 口縁部片	口径 18.4 露径 23.0	粗砂粒/還元焙 橙	ロクロ整形、回転方向不明。霧は貼付。	
15	須忠器 甕	埋没土中 胴部把手片		粗砂粒/還元焙 黄灰	ロクロ整形。把手は貼付で側面はヘラナデ。	
	種類 器形	出土位置/残存率	石材	計測値		
16	石製品	砥石	埋没土中/小片	砥沢石	長 3.7 幅 2.0 厚 1.1 重 8.3	

3. 古墳時代～奈良・平安時代

B 2 号住居

本住居はB-2区の北寄り、X=41951～41955、Y=-73878～-73880に位置する。今回、住居全体が調査ができた唯一の住居である。確認面は陣馬泥流丘土のⅧ層であるため確認面から床面までの壁高が僅かなため残存状態は不良である。他遺構との重複関係は北辺で近代の土坑とB18号住居との重複が確認された。新旧関係は本住居の方がB18号住居より新しい。

平面形態は北辺が南辺より0.34m長いめやや歪んだ矩形を呈する。規模は東西2.68m、南北3.58m、辺長は北辺2.64m、東辺3.50m、南辺2.30m、西辺3.40m、床面積は7.66㎡を測る。壁高は後世の攪拌が激しいため各辺とも5cm前後しか確認できなかった。主軸方位はN-96°-Eを指す。

内部施設は柱穴、周溝は存在しなかったが、貯蔵穴は東南角隅に存在した。貯蔵穴は方形に近い形状で、規模は35×30cm、深度5cmである。床面は掘

りにⅥ層、Ⅶ層、Ⅷ層などの掘削した土を混入して再度入れて踏み固めて硬化面としている。

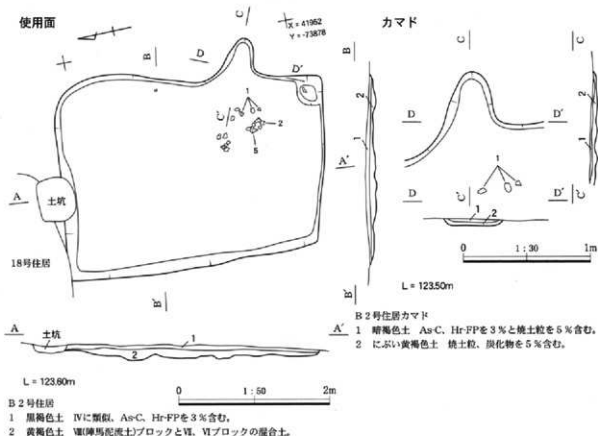
カマドは東辺の中程よりやや南に構築されている。残存状態は焼土が僅かに確認されるだけで非常に不良であった。袖や焚き口は不明で掘り方が僅かに確認された。規模は全長80cm、幅60cmで焚き口の一部と煙道は壁外に40cm程延びる。

掘り方はほぼ平坦であるが、北辺よりの中央付近と東より、住居ほぼ中央の3ヶ所で径0.5～0.8m程のごく浅い落ち込みが見られたが床下土坑のような施設は存在しない。

埋没状態は確認面から床面までが非常に浅いため明確ではないが土層断面の観察から自然埋没であるとみられる。

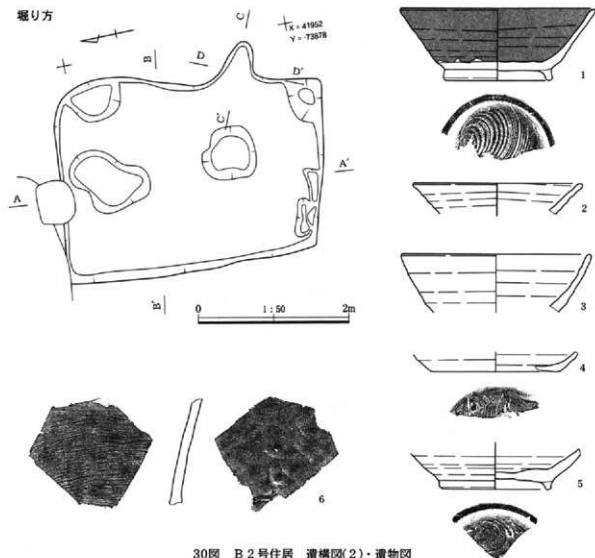
遺物は須恵器杯、椀、甕などの破片が出土しており、4の須恵器椀は貯蔵穴からの出土である。

本住居の年代は出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。



29図 B 2号住居 遺構図(1)

Ⅲ 検出した遺構と遺物



NO. P.L	種別 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型整形の特徴	摘要
1 PL38	黒色土器 椀	+3 1/2	口径 15.5 底径 8.4 器高 5.7 台径 8.0	粗砂粒/酸化焙 焼	内面黒色処理、外面の一部にも吸炭。ロクロ整形、 回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
2 PL38	須恵器 椀	+8 口縁部片	口径 13.2	細砂粒/還元焙 焼にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回りか。	
3	須恵器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 14.8	細砂粒/還元焙 焼	ロクロ整形、回転右回りか。	
4	須恵器 椀	貯蔵穴 底部片	底径 9.8	細砂粒/還元焙 焼	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
5 PL38	須恵器 椀	埋没土中 底部片	底径 9.2 台径 8.4	細砂粒/酸化焙 焼	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。	
6	須恵器 壺	埋没土中 胴部上位片		粗砂粒/還元焙 焼	外面は平行印き、内面のアケ具痕はナメのため消 えている。	

B 3号住居

本住居はB-4区の南端、X=41930、Y=-73890に位置する。今回、調査した範囲は重複する遺構や調査区範囲から床面の一部だけである。他遺構との重複関係は北側でB4号溝との重複が確認された。新旧関係は本住居の方が古い。

平面形態、規模内部施設、カマドなどは調査範囲内で確認されなかった。

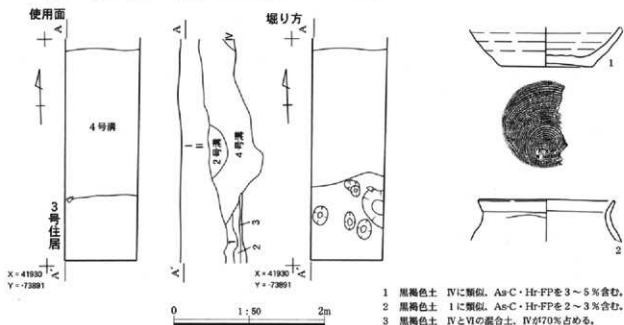
床面はIV層とVI層などの掘削した土を再度入れて

踏み固め硬化面としている。

掘り方はほぼ平坦であるが、深度5cm前後の浅い窪みが多少存在した。

埋没状態は土層断面の観察から自然埋没であるとみられる。

遺物は須恵器、土師器などが少量出土している。本住居の年代は出土した遺物から9世紀第2四半期に比定される。



31図 B 3号住居 遺構図・遺物図

NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成色調	成形の特徴	摘要
1	須恵器	埋没土中	直径 7.2	細砂粒/還元焼成	ロクゴ型、回転右回り。底部回転糸切り。	
PL39	輪	底～口縁片				
2	土師器	埋没土中	口径 10.6	細砂粒/良好赤褐	口縁部横ナデ、胴部横方向へラ削り。内面胴部へラナデ。	
	甕	口縁部片				

B 4号住居

本住居はB-4区中程、X=41937~41942、Y=-73889~-73890に位置する。今回、調査した範囲は住居の中程1/3ほどであった。他遺構との重複関係は北側でB7号住居、B2号井戸、B10号土坑との重複が確認された。新旧関係は本住居の方が重複が確認された全ての遺構より古い。

平面形態は明確ではないが矩形を呈するとみられる。規模は南北5.58mを測る。壁高は北辺が8cm、

南辺が6cmである。主軸方位はN-90°-EまたはWを指すとみられる。

内部施設は北辺で周溝が確認されたが、南辺では見られなかった。周溝は壁下に位置し、規模は幅35cm前後、深度4~9cmである。その他の柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。床面はVII層にVIII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

カマドやカマドの痕跡は調査区内では見られなか

Ⅲ 検出した遺構と遺物

った。

掘り方は周辺部が幅1m前後で深度7~10cmほど掘り込まれているが中心部、周辺部もほぼ平坦である。

埋没状態は土層断面の観察ではほぼ水平な堆積が確認できることから自然埋没であるとみられる。

遺物は土師器甕、須恵器杯、椀、皿などが出土している。そのうち5の須恵器杯は床面からの出土である。

本住居は出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。

B 7号住居

本住居はB-4区中程、X=41940~41944、Y=-73890に位置する。今回、調査した範囲は住居の東辺側1/6ほどであった。他遺構との重複関係は南側でB 4号住居との重複が確認された。新旧関係は本住居の方が新しい。

平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。規模は南北3.15mを測る。壁高は確認面から25cm前後、土層観察断面で40cmほどである。主軸方位はカマドが北辺または北辺に構築されていれば北またはN-90°-Wを指す。

柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層、VII層にVII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

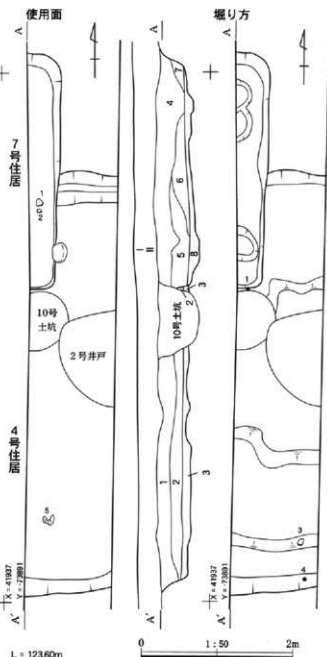
本住居はカマドは確認されなかった。

掘り方は調査区境で径0.50m前後、深度5cmほどの浅い落ち込みは確認されたが床下土坑のような施設ではない。

埋没状態は土層断面観察位置が住居の端部のため明確ではないが自然埋没であるとみられる。

遺物は須恵器杯、椀などが僅かに出土しただけである。

本住居の年代は出土遺物や重複するB 4号住居から9世紀後半に比定される。



B 4号住居

- 1 黒褐色土 IVに類似、AsC、Hr-FPを5%含む。
- 2 黒褐色土 Iに類似、AsC、Hr-FPを3%と焼土を2%含む。
- 3 黒褐色土 VII、VIIブロックを30%含む。(住居掘り方)

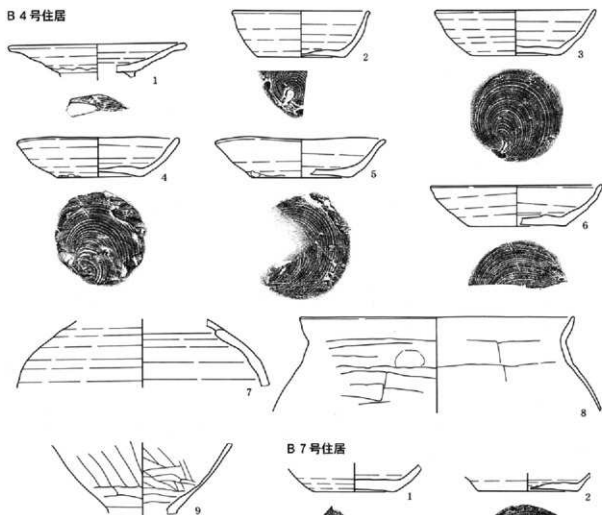
B 7号住居

- 4 黒褐色土 IVに類似、AsC、Hr-FPを5%、焼土を5%含む。
- 5 暗褐色土 4に類似、焼土は見られない。
- 6 暗褐色土 4に類似、AsC、Hr-FPを3%含む。
- 7 黒褐色土 IVに類似、VIIブロックを10%含む。
- 8 黒褐色土 IV、VI、VIIの混合土、VIIブロックを10%含む。(住居掘り方)

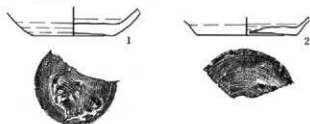
32図 B 4号住居・B 7号住居 遺構図

3. 古墳時代～奈良・平安時代

B 4 号住居



B 7 号住居



33図 B 4 号住居・B 7 号住居 遺物図

B 4 号住居

NO. P.L	種 類	出上位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成 色 調	底 盤 形 の 特 徴	備 考
1	須志器 皿	掘り方 1/6	口径 13.8 底径 6.0	細砂粒/還元焼 灰	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
2	須志器 杯	埋没土中	口径 10.4 底径 6.8 器高 3.6	細砂粒/還元焼 灰オリーブ	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3 PL39	須志器 杯	掘り方 1/2	口径 12.6 底径 6.8 器高 3.6	細砂粒/酸化焼 残灰	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
4 PL39	須志器 杯	掘り方 ほぼ完形	口径 12.6 底径 6.8 器高 3.1	細砂粒/還元焼 灰白	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
5	須志器 杯	+2 ほぼ完形	口径 13.4 底径 7.6 器高 3.2	細砂粒/還元焼 焼/灰白	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
6 PL39	須志器 杯	埋没土中 1/2	口径 13.4 底径 7.6 器高 3.3	細砂粒/酸化焼 にぶい煙	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
7	須志器 長頸壺	埋没土中 胴部上位片		細砂粒/還元焼 灰	コクロ整形、回転方向不明。頸部接合は三段。	
8 PL39	土師器 甕	埋没土中 口~胴部片	口径 21.4	細砂粒/良好 煙	口縁部横ナズ、胴部は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナズ。	
9	土師器 台付甕	埋没土中 底部付近片	底径 5.4	細砂粒/良好 赤褐色	胴部下位は縦方向、底部付近は横方向のヘラ削り。胴部との接合部は横ナズ、内面胴部はヘラナズ。	

Ⅲ 検出した遺構と遺物

B7号住居

NO. P.L	種類 形状	出土位置 残存率	計測値	土質/焼成 色調	成整形の特徴	摘要
1 PL41	須恵器 碗	+19 底部片	底径 6.5	細砂粒/還元焙 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
2	須恵器 碗	+14 底部片	底径 7.7	細砂粒/還元焙 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	

B5号住居

本住居はB-4区北寄り、X=41947~41950、Y=-73889・-73890に位置する。今回、調査した範囲は重複する遺構や調査区範囲から住居中程の一部である。残存状態は重複関係にある溝や土坑によって南辺付近や北辺の一部を欠く。他遺構との重複関係はB6号住居、B1号溝、B7号土坑、B8号土坑と重複する。新旧関係は本住居の方がB6号住居より新しいが、B1号溝、B7号土坑、B8号土坑より古い。

平面形態は北辺しか確認されていないため不明であるが矩形を呈すると想定される。規模は南北4m+ α を測る。壁高は確認面から7cm前後、土層観察断面で20cm程である。主軸方位はカマドが東辺に構築されていたればN-65°前後-Eを指す。

柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層、VII層など掘削した土を混合して再度入れて踏み固めて硬化面としている。

カマドは調査区内では確認されなかった。

掘り方は北辺きわを連続する土坑状に掘り込んであるほか内側でも工具痕のような小規模な凹凸が確認できた。また、住居中央付近とみられる箇所楕円形を呈する径0.90m+ α 、深度0.40mの床下土坑が存在したが、内部からは遺物などの出土は見られなかった。

埋没状態は、土層断面の観察から自然埋没であるとみられる。遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦片、鉄器などが多量に床面の広範囲に廃棄された状態で出土している。

本住居の年代は出土遺物などから10世紀第2四半期に比定される。

B6号住居

本住居はB-4区北寄り、X=41950~41953、Y=-73889・-73890に位置する。今回、調査した範囲は重複する遺構や調査区範囲から住居中程の北辺よりの一部である。残存状態は重複関係にある竪穴住居や土坑によって南側の大半を欠く。他遺構との重複関係はB5号住居、B8号土坑と重複する。新旧関係は本住居の方がB5号住居、B1号溝、B7号土坑、B8号土坑より古い。

平面形態は北辺しか確認されていないため不明であるが矩形を呈するとみられる。規模は南北3.5m+ α を測る。壁高は確認面から20cm前後、土層観察断面で30cm程である。主軸方位は東辺にカマドが構築されていたればN-110°前後-Eを指す。

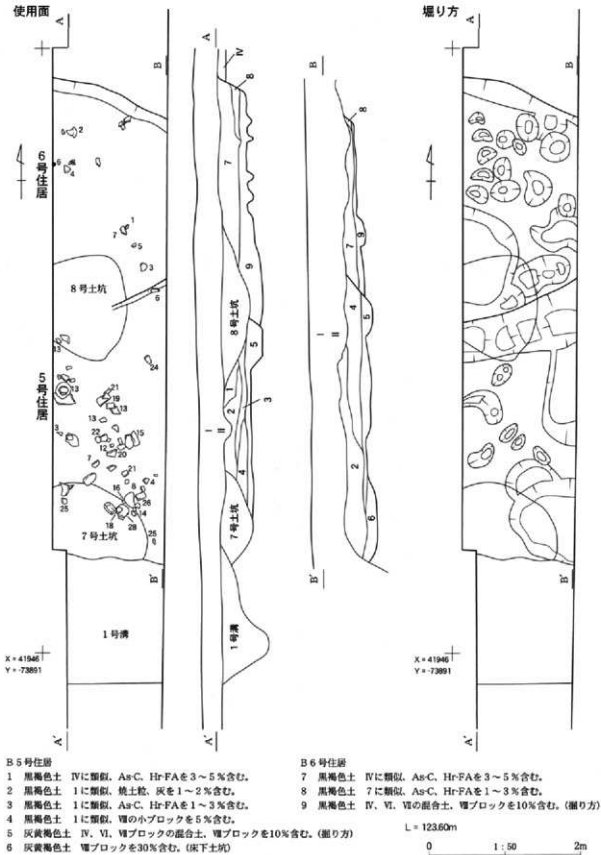
柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層、VII層など掘削した土を混合して再度入れて踏み固めて硬化面としている。カマドは調査区内では確認されなかった。

掘り方は住居掘削時の凹凸は全面で見られたが床下土坑のような施設は確認できなかった。

埋没状態は土層断面の観察から自然埋没であるとみられる。

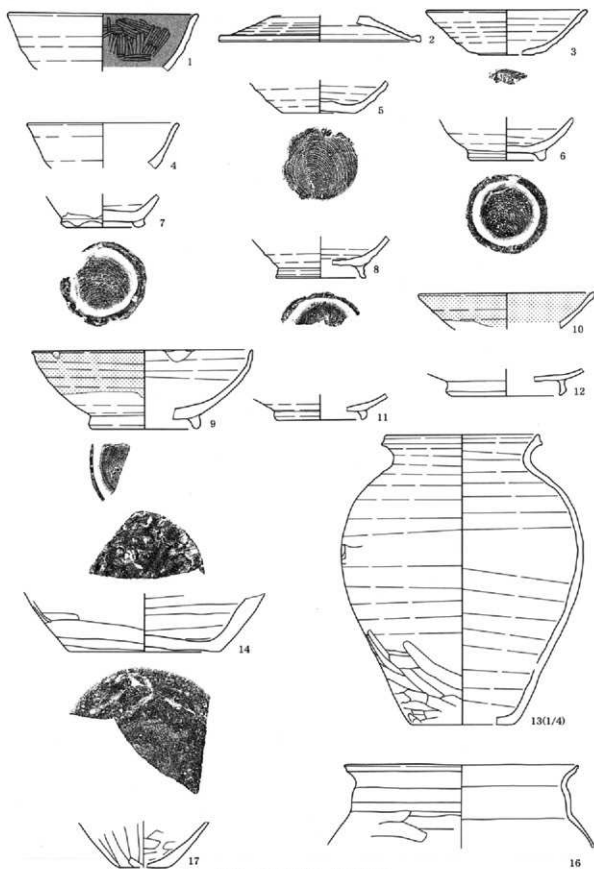
遺物は須恵器筒、甕などの破片が床面上から出土している。

本住居の年代は出土遺物などから9世紀第3四半期に比定される。

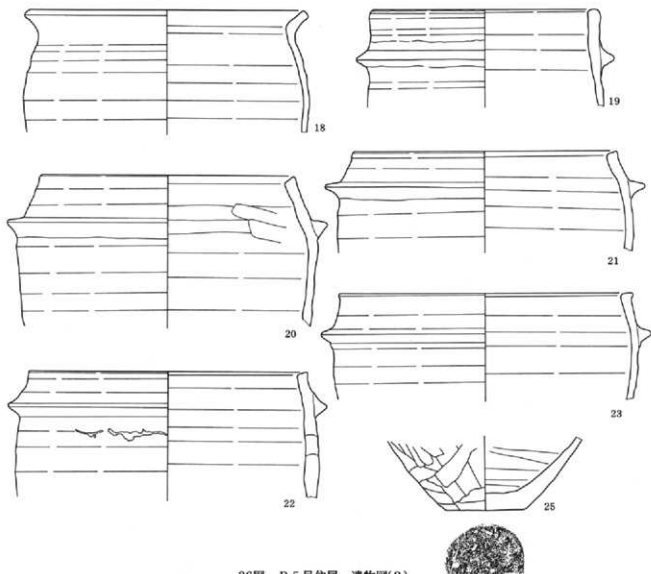
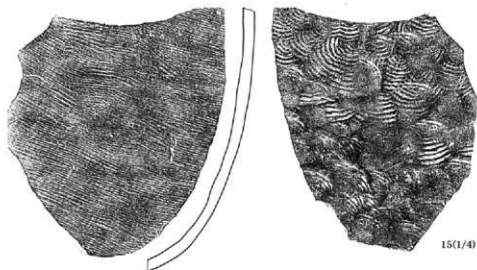


34図 B 5号住居・B 6号住居 遺構図

Ⅲ 検出した遺構と遺物

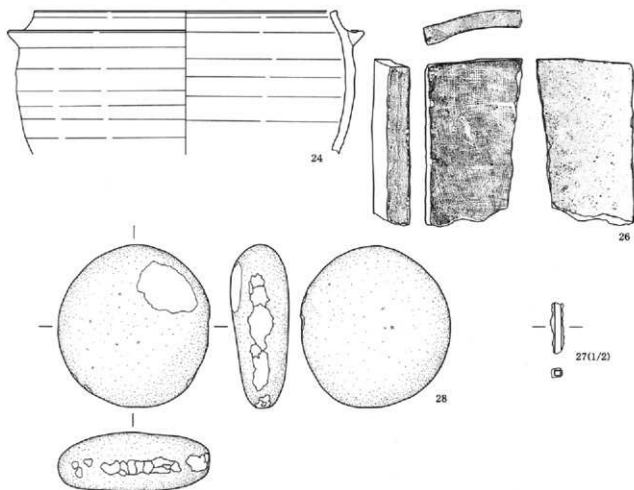


35図 B 5号住居 遺物図(1)

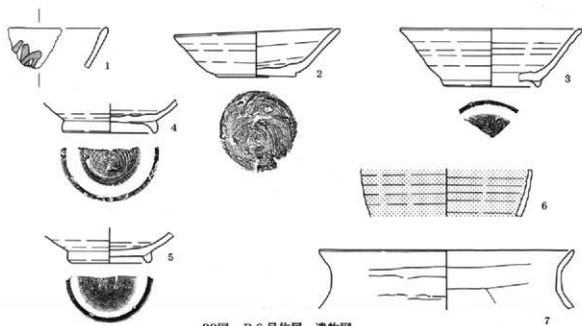


36図 B 5号住居 遺物図(2)

Ⅲ 検出した遺構と遺物



37図 B5号住居 遺物図(3)



38図 B6号住居 遺物図

3. 古墳時代～奈良・平安時代

B5号住居

NO. P.L	種 類 器 形	出土位置 残存率	計 測 値	胎 土/焼 成 色 調	成 型 形 の 特 徴	摘 要
1	黒色土器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 14.8	細砂粒/酸化焙 過	内面黒色処理。口口整形、回転方向不明。内面 はヘラ削き。	
2	須志器 輪蓋	埋没土中 口縁部片	口径 15.6 器高 2.0	粗砂粒/還元焙 オリーブ	口口整形、回転方向不明。天井部回転糸切り。 肩部折り曲げ。	
3	須志器 椀	+20 1/6	口径 12.6 底径 4.4 器高 3.5	細砂粒/還元焙 灰オリーブ	口口整形、回転方向不明。底部回転糸切り。	
4	須志器 椀	+17 口縁部片	口径 11.6	粗砂粒/酸化焙 黄褐色	口口整形、回転方向不明。	
5 PL39	須志器 椀	埋没土中 底~口縁片	底径 5.9	細砂粒/還元焙 灰	口口整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
6 PL39	須志器 椀	+6 底~口縁片	底径 6.2 台径 5.6	細砂粒/酸化焙 にふい黄褐色	口口整形、回転右回りか。底部切離技法は高台 貼付時のナデにより不明。	
7 PL40	須志器 椀	+6 底~口縁片	底径 6.5 台径 5.4	細砂粒/酸化焙 浅黄	口口整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。	
8	須志器 椀	+16 底~口縁片	底径 7.0 台径 6.4	細砂粒/酸化焙 明褐色	口口整形、回転右回りか。底部はナデ。高台は 貼付。	
9 PL40	灰輪陶器 輪花輪	+18 1/3	口径 17.4 底径 8.6 器高 6.1 台径 8.1	細砂粒/還元焙 灰白	口口整形、回転右回り。底部はナデ。高台は貼 付。施輪方法は漬け掛。	大塚2号 壺式期
10	灰輪陶器 椀	掘り方 口縁部片	口径 13.8	細砂粒/還元焙 灰白	口口整形、回転方向不明。施輪方法は漬け掛。	大塚2号 壺式期
11	灰輪陶器 椀	埋没土中 底部片	底径 7.2 台径 6.6	微砂粒/還元焙 灰黄	口口整形、回転方向不明。底部はナデ。高台は 貼付。	大塚2号 壺式期
12	灰輪陶器 椀	+15 底部片	底径 9.2 台径 8.4	微砂粒/還元焙 灰黄	口口整形、回転方向不明。底部はナデ。高台は 貼付。	光ヶ丘1 号壺式期
13 PL40	須志器 広口壺	+15~20 1/2	口径 16.0 底径 10.4 器高 30.6 胴径 25.6	細砂粒/還元焙 灰オリーブ	口口整形、回転右回り。底部ヘラ削りか。胴部 下位はヘラ削り。	
14 PL40	須志器 瓶	+3 底部片	底径 12.0	細砂粒/還元焙 灰	口口整形、底部はナデ、胴部はヘラ削り。内面 胴部はナデ。	
15	須志器 壺	+15~20 胴部片		粗砂粒/還元焙 灰	外面は平行円錐。内面は同心円状アナ痕が残る。	
16 PL40	土師器 壺	+6 口縁~胴片	口径 18.4	細砂粒/良好 赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部はナデ、胴部上位は横方 向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
17	土師器 壺	埋没土中 底~胴片	底径 4.0	細砂粒/良好 黄褐色	底部・胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
18	土師器 壺	床面直上 口縁~胴片	口径 21.6 胴径 22.6	粗砂粒/良好 明赤褐色	口口整形、回転方向不明。	北條系土 師器壺
19	須志器 羽釜	+18 口縁~胴片	口径 16.6 口径 20.4	粗砂粒/酸化焙 明赤褐色	口口整形、回転方向不明。罫は貼付。	
20 PL40	須志器 羽釜	+20 口縁~胴片	口径 20.0 口径 25.3	粗砂粒/酸化焙 灰黄褐色	口口整形、回転方向不明。罫は貼付。内面胴部 はヘラナデ。	
21 PL40	須志器 羽釜	+20 口縁~胴片	口径 20.6 口径 25.4	粗砂粒/酸化焙 にふい黄褐色	口口整形、回転方向不明。罫は貼付。	
22	須志器 羽釜	+16 口縁~胴片	口径 22.0 口径 25.2	粗砂粒/酸化焙 明赤褐色	口口整形、回転方向不明。罫は貼付。胴部に輪 積み痕が残る。	
23	須志器 羽釜	+28 口縁~胴片	口径 22.3 口径 26.0	粗砂粒/酸化焙 にふい黄褐色	口口整形、回転方向不明。罫は貼付。	
24	須志器 羽釜	+14 口縁~胴片	口径 23.7 口径 28.2	粗砂粒/酸化焙 橙	口口整形、回転方向不明。罫は貼付。	
25 PL40	須志器 羽釜	+3 底~胴下位	底径 6.2	粗砂粒/酸化焙 にふい黄褐色	口口整形、回転右回り。底部はナデ、胴部はヘ ラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
26 PL41	土製品 平瓦	+15 上左部片		粗砂粒/酸化焙 にふい赤褐色	上面は布目痕が残る。下面はヘラナデ。側面はヘ ラ削り。	
	種 類 器 形	出 土 位 置	残 存 率	計 測 値		
27	鉄製品 鏡	埋没土中	系片	長 (2.7) 幅 (0.6) 厚 (0.55) 重 (1.4)		PLA1
28	石器 磨石	出土位置/残存率	石 材	計 測 値		
		+10/完形	粗粒輝石安山岩	長 (12.8) 幅 (12.0) 厚 (4.6) 重 (1100)		PLA1

Ⅲ 検出した遺構と遺物

B 6号住居

NO. P/L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型整形の特徴	概要
1 PL41	黒色土器 椀	+8 口縁部小片		微砂粒/酸化 色調	内面黒色処理。口クロ整形。内面ヘラ磨き。外面に墨書、文字押設は不能。	
2 PL41	須恵器 杯	+4 口縁一部欠	口径 12.8 底径 6.4 器高 3.8	粗砂粒/還元 灰白	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3 PL41	須恵器 椀	床面直上 1/5	口径 14.0 底径 7.8 器高 4.5 台径 7.0	細砂粒/還元 灰	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
4 PL41	須恵器 椀	+10 底部片	口径 7.2 台径 6.6	細砂粒/還元 灰白	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
5 PL41	須恵器 椀	+10 底~口縁片	底径 6.6 台径 6.0	微砂粒/還元 灰白	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。施輪方法は遺け掛けか。	大塚2号 常式期
6	灰輪陶器 甗	+5 胴部片		微砂粒/還元 灰白	口クロ整形、回転右回りか。胴部下半は回転ヘラ削り。施輪方法は遺け掛けか。	大塚2号 常式期
7	土師器 甗	床面直上 口縁部片	口径 20.0	細砂粒/良好 橙	外面に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、胴部ナデ、胴部ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

B 8号住居

本住居はB-5区南端、X=41958~41962、Y=-73889・-73890に位置する。今回、調査した範囲は住居の東側1/4ほどであった。他遺構との重複関係はB9号住居、B16号住居と重複が確認された。新旧関係は本住居の方が重複する2軒の住居より新しい。

平面形態は方形または長方形を呈する。規模は南北3.85m、東西1.04m+ α 、東辺3.60mを測る。壁高は確認面から10~18cm、土層観察断面では30cmほどである。主軸方位はカマドが北辺または北辺に構築されていた北またはN-90°-Wを指す。

柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層、VII層にVII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

本住居はカマドは確認されなかった。

掘り方はほぼ平坦であるが、調査範囲の中程に径20~30cm、深度10cmほどのビット状の落ち込みが確認された。

埋没状態は土層断面の観察で南辺付近が三角堆積、中程はほぼ水平な堆積であることから自然埋没であるとみられる。

遺物は土師器、須恵器、灰輪陶器が出土している。このうち2の須恵器椀と7の土師器甗が床面上から出土している。

B 9号住居

本住居はB-5区南端、X=41960~41965、Y=-73889・-73890に位置する。今回、調査した範囲は住居の西側1/4ほどであった。他遺構との重複関係はB8号住居と重複が確認された。新旧関係は本住居の方が古い。

平面形態は調査区東端が北東角、南西角付近になるとみられることから長方形を呈するとみられる。規模は南北3.7m、東西1.3mほどであると想定される。壁高は確認面から5~7cm、土層観察断面でも10cmほどである。主軸方位はN-60°前後-Eを指す。

柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層、VII層にVII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

本住居はカマドは確認されなかったが、調査区内で焼土、灰、粘土ブロックなどが確認されなかったことから東辺に構築された想定される。

掘り方は若干の凹凸のみみられるがほぼ平坦である。

埋没状態は土層断面の観察では単一層しか確認されなかったが、自然埋没であるとみられる。

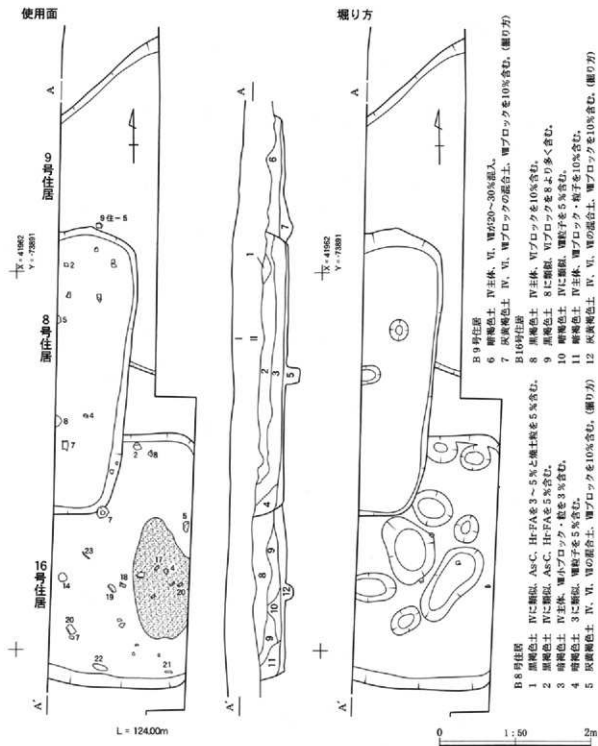
遺物は土師器、須恵器、灰輪陶器、鉄器などが多少出土している。

B8号住居、B9号住居、B16号住居では後世

3. 古墳時代～奈良・平安時代

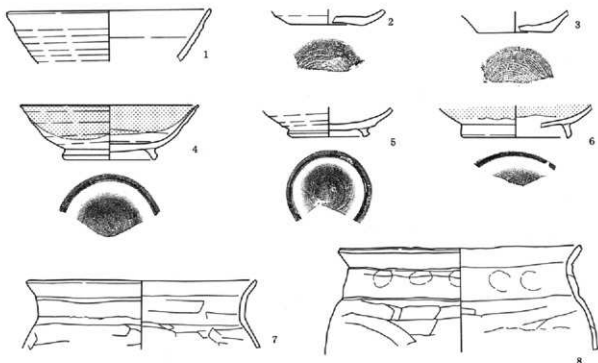
の攪拌で9世紀第3四半期から10世紀第2四半期にかけての遺物が混在して出土しており、各住居に共存する遺物を同定するのは困難な点があった。そのため掲載にあたっては出土した住居に遺物を所属

させた。年代については重複関係を考慮してB8号住居が10世紀第2四半期、B9号住居とB16号住居が10世紀第1四半期に比定される。



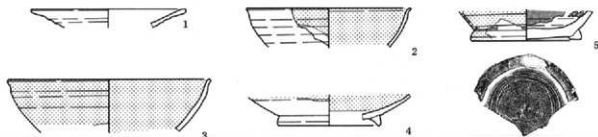
39図 B8号住居・B9号住居・B16号住居 遺構図

Ⅲ 検出した遺構と遺物

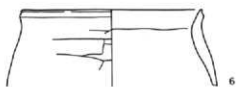


40図 B 8号住居 遺物図

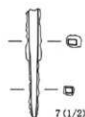
NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型・形の特徴	換要
1	須恵器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 16.0	細砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	
2	須恵器 椀	+6 底部片	底径 6.0	細砂粒/還元焼 焼/灰オリーブ	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3	須恵器 椀	埋没土中 底部片	底径 6.0	細砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
4 PL42	灰輪陶器 椀	+4 1/4	口径 14.0 底径 7.2 器高 4.3 台径 7.0	微砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部ナデ。高台は貼付。 施釉方法は漬け掛け。	大塚2号 室式期
5 PL42	灰輪陶器 椀	+30 底部片	底径 6.2 台径 5.7	微砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部ナデ。高台は貼付。	光ヶ丘1 号室式期
6	灰輪陶器 椀	埋没土中 底部片	底径 8.6 台径 8.2	微砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部ナデ。高台は貼付。 施釉方法は漬け掛け。	大塚2号 室式期
7 PL42	土師器 甕	+28 口~胴上片	口径 18.0	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、頸部はナデ、胴部は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
8 PL42	土師器 甕	+17 口~胴上片	口径 19.0	細砂粒/良好 にぶい雫	内外面に輪積み痕が残る。口縁~頸部は横ナデ。 胴部は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	



41図 B 9号住居 遺物図(1)



42図 B 9号住居 遺物図(2)



NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	底整形の特徴	備考
1	須恵器 皿	掘り方 口縁部片	口径 12.0	凝砂粒/酸化焰 にぶい黄褐色	ロクロ整形。回転方向不明。	
2	灰輪陶器 碗	埋没土中 口縁部片	口径 12.8	凝砂粒/還元焰 にぶい黄褐色	ロクロ整形。回転方向不明。施釉方法は漬け掛け。 破片は欠け口を微細に打ち欠いている。	大原2号 壺式期
3	灰輪陶器 碗	埋没土中 口縁部片	口径 15.7	凝砂粒/還元焰 灰オリーブ	ロクロ整形。回転方向不明。施釉方法は漬け掛け か。	大原2号 壺式期
4	灰輪陶器 碗	埋没土中 底～口縁片	底径 8.2 台径 8.0	凝砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形。回転方向不明。高台は黏付。施釉方法 は漬け掛けか。	大原2号 壺式期
5	灰輪陶器 長宗造	床面直上 底～胴部片	底径 7.2 台径 8.6	凝砂粒/還元焰 褐色	ロクロ整形。回転右回り。底部はナデ、高台は黏 付。施釉方法は漬け掛けか。内外面に漆付着。	大原2号 壺式期
6	土師器 甕	掘り方 口～胴上片	口径 14.0 胴径 16.6	粗砂粒・褐色粒 良好/赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
7	種類 鉄器	器形 竊	出土位置 埋没土中	残存率 葉片	計測値 長(5.8) 幅(0.85) 厚(0.65) 重(5.09)	PL42

B16号住居

本住居はB-5区南端、X=41956~41959、Y=-73889・-73890に位置する。今回、調査した範囲は住居の東側1/3ほどであった。他遺構との重複関係はB8号住居と重複が確認された。新旧関係は本住居の方が古い。

平面形態は方形または長方形を呈する。規模は南北3.38m、東西1.95m+α、東辺3.34mを測る。壁高は確認面から5~15cm、土層観察断面では30cmほどである。主軸方位は調査区内の東側で焼土、灰の広がり確認されることから東辺にカマドが構築されたこととみられることからN-90°-Eを指す。

柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されな

かった。床面はIV層、VI層、VII層にVIII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

本住居はカマドは確認されなかった。

掘り方は中心部を中心に楕円形の深度5~10cmほどの落ち込みが確認されたが床下土坑のような施設は存在しなかった。

埋没状態は土層断面の観察でレンズ状に近い堆積が確認されたことから自然埋没であるとみられる。

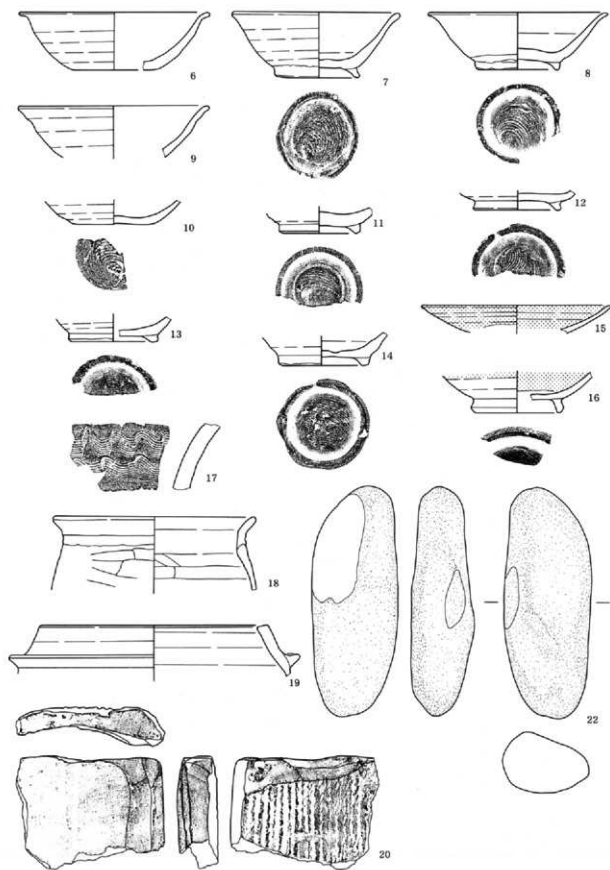
遺物は須恵器、土師器、灰輪陶器、鉄器、石製品などが出土している。

本住居の年代は出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。



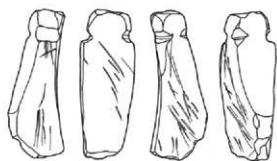
43図 B16号住居 遺物図(1)

Ⅲ 検出した遺構と遺物



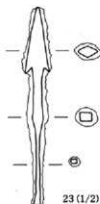
44図 B16号住居 遺物図(2)

3. 古墳時代～奈良・平安時代



21 (1/2)

45図 B16号住居 遺物図(3)



23 (1/2)

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の特徴	摘要
1	土師器 杯	+11 口縁部片	口径 11.8	細砂粒/良好 明赤褐色	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位はヘラ削り。	
2	須恵器 碗	+1 完形	口径 12.3 底径 5.1 器高 3.9	細砂粒/還元焙 焼/暗灰	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3	須恵器 碗	埋没土中 口～底部片	口径 12.8 底径 5.8 器高 3.6	細砂粒/酸化焙 焼	コクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。	
4	須恵器 碗	+11 口～底部片	口径 12.8 底径 5.8 器高 4.8	細砂粒/還元焙 焼	コクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。	
5	須恵器 碗	+6 L/5	口径 13.4 底径 6.0 器高 3.9	細砂粒/酸化焙 焼	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
6	須恵器 碗	埋没土中 L/6	口径 14.8 底径 6.5 器高 4.6	細砂粒/酸化焙 焼	コクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。	
7	須恵器 碗	+1 口縁一部欠	口径 12.8 底径 6.5 器高 5.2 台径 6.3	粗砂粒/還元焙 焼	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
8	須恵器 碗	+6 L/2	口径 14.0 底径 6.8 器高 4.5 台径 6.2	細砂粒/還元焙 焼/オリーブ黒	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
9	須恵器 碗	埋没土中 口縁部片	口径 14.8	細砂粒/酸化焙 焼	コクロ整形、回転方向不明。	
10	須恵器 碗	覆り方 底部片	底径 5.6	細砂粒/酸化焙 焼	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
11	須恵器 碗	+5 底部片	底径 6.4 台径 6.4	細砂粒/還元焙 焼	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
12	須恵器 碗	埋没土中 底部片	底径 6.8 台径 6.0	細砂粒/還元焙 焼/灰白	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
13	須恵器 碗	覆り方 底部片	底径 7.0 台径 6.0	細砂粒/酸化焙 焼	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
14	須恵器 碗	+32 底部片	底径 7.3 台径 6.4	細砂粒/酸化焙 焼	コクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
15	灰輪陶器 皿	+7 口縁部片	口径 14.6	微砂粒/還元焙 焼	コクロ整形、回転方向不明。施釉方法は不明。	大原2号 壺式期?
16	灰輪陶器 碗	埋没土中 底～口縁片	底径 7.0 台径 6.4	微砂粒/還元焙 焼	コクロ整形、回転方向不明。底部回転ナデ。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗りか。	光ヶ丘1 号壺式期
17	須恵器 甕	埋没土中 口縁部小片		細砂粒/還元焙 焼	コクロ整形。口縁部は三段以上の波状文(単位9条か)	
18	土師器 甕	床面直上 口～胴小片	口径 15.6	細砂粒/良好 明赤褐色	頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
19	須恵器 羽釜	+18 口縁部片	口径 18.0 口径 23.0	細砂粒/還元焙 焼	コクロ整形、回転方向不明。背は貼付。	
20	土製品 平瓦	+19 左上部分片		粗砂粒/還元焙 焼	上面は布目肌、下面は平行引き肌。縁部はヘラ削り。	
	種類 器形	出土位置/残存率	計測値	石材	計測値	
21	石製品 砥石	+8/ほぼ完形		砥沢石	長 7.3 幅 2.95 厚 2.6 重 64.4	PL45
22	石製品 磨盤石	+13/完形		輝石安山岩	長 18.3 幅 6.9 厚 5.0 重 800	PL45
23	鉄器 鏝	+4		基部端部欠損	長 (10.45) 幅 1.95 厚 1.0 重 (18.0)	PL46

Ⅲ 検出した遺構と遺物

B10号住居

本住居はB-2区東南隅、X=41968~41971、Y=-73877・-73878に位置する。今回、調査した範囲は住居の北西部分1/4ほどであった。他遺構との重複関係はB11号住居と西辺で重複が確認された。新旧関係は本住居の方が新しい。

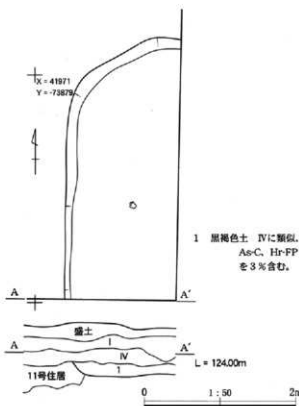
平面形態は北西角がやや丸みをもつが方形か長方形を呈するとみられる。規模は南北3.5m+α、東西1.5m+αを測る。壁高は確認面から5~7cm、土層観察断面で20cmほどである。主軸方位は北または東を指すとみられる。

柱穴、貯蔵穴、周溝、カマドなどの内部施設は確認されなかった。床面は地山をそのまま使用しているが、顕著な硬化面を構成していない。

埋没状態は土層断面の観察では単一層しか確認されなかったが自然埋没であるとみられる。

遺物は土師器、須恵器などが出土している。

本住居の年代は出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



46図 B10号住居 遺構図・遺物図

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の特徴	摘要
1	黒色土器 椀	埋没土中 底部片	底径 7.2 台径 7.8	細砂粒多い/酸化 磁質/明赤地	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。底部ナ ズ。内面はヘラ磨き。	
2	須恵器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 9.4	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部は大きく外反。	
3	須恵器 椀	埋没土中 底部片	底径 6.4 台径 5.2	細砂粒/還元焰 軟質/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。高 台は貼付。高台部分を砥石として再利用している。	
4	須恵器 椀	埋没土中 底部片	底径 8.4 台径 8.0	細砂粒/酸化磁 質	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。高 台は貼付。	
5	須恵器 甕	埋没土中 胴部片		粗砂粒/還元焰 灰	外面は平行叩き、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
6 PL42	土師器 甕	埋没土中 口~胴上片	口径 20.8 胴径 22.4	細砂粒/良好 灰褐	口縁部横ナデ、胴部に指頭圧痕が残る。胴部上位 は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

3. 古墳時代～奈良・平安時代

B11号住居

本住居はB-2区南西隅、X=41968、Y=-73878～-73881に位置する。今回、調査した範囲は住居の北東部分1/6ほどであった。他遺構との重複関係は近代の土坑とB10号住居と東辺で重複が確認された。新旧関係は本住居の方が古い。

平面形態は方形か長方形を呈するとみられる。規模は南北0.75m+ α 、東西2.55m+ α を測る。壁高は確認面から5～7cm、土層観察断面で20cmほどである。主軸方位は東または西を指すとみられる。

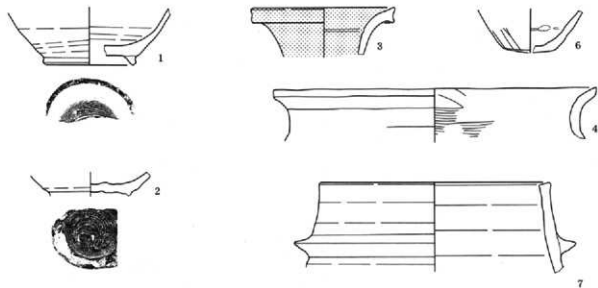
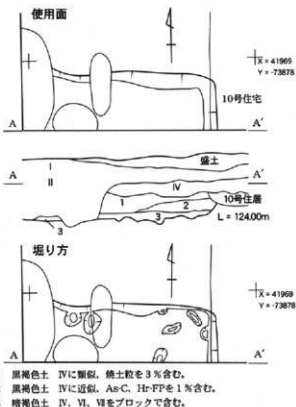
柱穴、貯蔵穴、周溝、カマドなどの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層、VII層にVIII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

掘り方は径30cm、深度5cm前後の浅い落ち込みが確認されたが床下土坑のような施設は確認されなかった。

埋没状態は土層断面の観察で壁際に三角状の堆積が確認されることから自然埋没であるとみられる。

遺物は土師器、須恵器、灰軸陶器などが出土している。

本住居の年代は出土遺物から10世紀第2四半期に比定される。



47図 B11号住居 遺構図・遺物図

Ⅲ 検出した遺構と遺物

NO.	種別	出土位置	計測値	胎土/焼成色	成型形の特徴	概要
1	須忠器	掘り方	底径 7.3 台径 6.8	細砂粒/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
PL43	椀	底-口縁部		灰青		
2	須忠器	掘り方	底径 6.4	細砂粒/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
	椀	底部片		浅黄		
3	灰軸陶器	埋没土中	口径 11.2	微砂粒/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は漬け掛け。大原2号	
PL43	長頸壺	口縁部片		灰白		壺式期
4	土師器	埋没土中	口径 25.4	細砂粒/良好	口縁部横ナズ、内面割部は硝毛目。	
	壺	口縁部片		赤褐		
5	土師器	掘り方	口径 14.0	細砂粒/良好	口縁部横ナズ、腹部に指面圧痕が残る。割部はヘラ削り。内面割部はヘラナデ。	
	壺	口縁部片		明赤褐		
6	土師器	掘り方	底径 4.2	細砂粒/良好	胴部・底部はヘラ削り。内面割部はヘラナデ。	
	壺	底部片		褐		
7	須忠器	掘り方	口径 18.0 筒径 22.2	細砂粒/還元焰	ロクロ整形、回転方向不明。筒は貼付。	
	羽釜	口縁部片		浅黄		

B12号住居

本住居はB-2区北西隅、X=41975~41978、Y=-73877~-73879に位置する。今回、調査した範囲は住居の南西部分1/4ほどであったが、調査区の北側は機乱によって欠損している。他遺構との重複関係は近代の土坑と重複が確認された。新旧関係は本住居の方が古い。

平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。規模は南北3.12m+α、東西2.24m+αを測る。壁高は確認面から5~7cmほどである。主軸方位は調査区東側の土層断面でカマドの一部とみられる土が確認できることからN-90°-Eを指すとみられる。

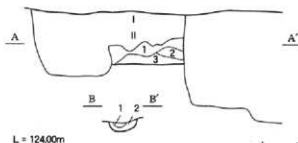
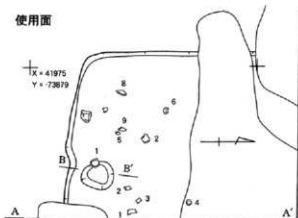
内部施設は東南部分で貯蔵穴が確認された。貯蔵穴は楕円形を呈し、規模は径41×37cm、深度15cmである。柱穴、周溝などは確認されなかった。床面はIV層、VI層、VII層にVIII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

カマドは調査区内では明確にすることはできなかったが、調査区東側の土層断面で袖、焚き口とみられる土層を確認した。

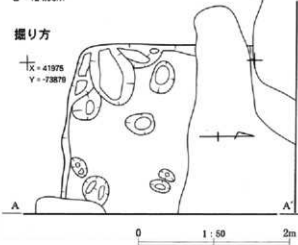
B12号住居

- 1 黒褐色土 IV、VIの層合土、焼土ブロック・粒を3~5%含む。
 2 暗褐色土 焼土ブロックを10%含む。
 3 黒褐色土 焼土ブロック、炭化物を5~10%含む。
- 貯蔵穴
 1 黒褐色土 VIに類似。
 2 褐色土 IVに類似、環の小ブロックを20%含む。

使用面



掘り方



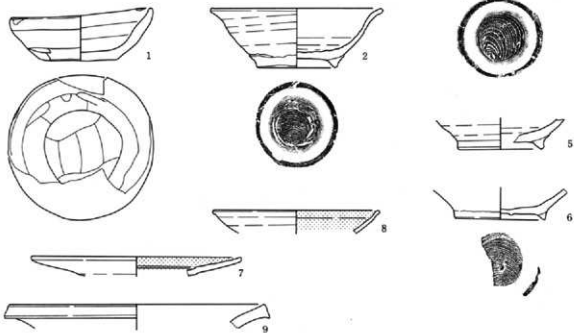
48図 B12号住居 遺構図

3. 古墳時代～奈良・平安時代

掘り方は径80cm前後の浅い落ち込みが確認されたが床下土坑のような施設は確認されなかった。

遺物は土師器、須恵器、灰軸陶器などが出土している。

本住居の年代は出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。



49図 B12号住居 遺物図

NO. P.L	種 類 器 形	出土位置 残存率	計 測 値	胎 土 / 焼 成 色 調	成 型 形 の 特 徴	備 考
1	土師器 杯	+2 3/4	口径 10.9 底径 6.0 器高 4.2	粗砂粒/良好 赤胎	口縁部上位は横ナデ、中位はナデ、下位は横方向のヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。	口縁部に煤付着
2	須恵器 椀	+1 2/3	口径 13.2 底径 7.4 器高 4.7 台径 6.0	細砂粒/酸化塩 にふい黄澄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
3	須恵器 椀	床面直上 1/5	口径 13.0 底径 6.9 器高 6.0 台径 6.4	細砂粒/還元塩 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。底部ナデ。高台は貼付。	
4	須恵器 椀	埋没土中 底～口下片	口径 6.2 台径 5.6	細砂粒/酸化塩 浅黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
5	須恵器 椀	+2 底～口下片	底径 6.8 台径 6.4	細砂粒/還元塩 灰オリーブ	ロクロ整形、回転方向不明。底部ナデ。高台は貼付。	
6	須恵器 椀	+5 底～口下片	底径 7.2 台径 6.8	細砂粒/酸化塩 澄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
7	灰軸陶器 段皿	埋没土中 口縁部片	口径 16.4	微砂粒/還元塩 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は不明。	大塚2号 室式期
8	灰軸陶器 椀	+7 口縁部片	口径 12.8	微砂粒/還元塩 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は不明。	大塚2号 室式期
9	須恵器 出口壺	+2 口縁部小片	口径 20.0	細砂粒/還元塩 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。	

III 検出した遺構と遺物

B 13号住居

本住居はB-5区中程、X=41967~41970、Y=-73889・-73890に位置する。今回、調査した範囲は住居の中程1/3ほどだけであった。他遺構との重複関係は近代の土坑とB14号住居との重複が確認された。新旧関係はB14号住居より本住居の方が新しい。

平面形態は角にあたる部分が調査区内に存在しないため明確ではないが矩形を呈するとみられる。規模は南北3.16m、東西1.3m+αを測る。壁高は確認面から7cm前後、土層観察断面では20cmほどである。

主軸方位はカマドが東辺に構築されているばN-70°-Eを指す。

柱穴、貯蔵穴、周溝、カマドなどの内部施設は確認されなかった。床面は大部分が地山を踏み固めて硬化面としているが、一部ではIV層、VI層、VII層にVIII層ブロックを混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

掘り方は床面が地山をそのまま使用しているため確認できないが、調査区西側で径50cm、深度10~25cmほどの土坑状の落ち込みが確認された。この落ち込みの性格については遺物などの出土が見られなかったため明確にすることはできなかった。

埋没状態は土層断面の観察で壁際に三角状の堆積が確認できることから自然埋没とみられる。

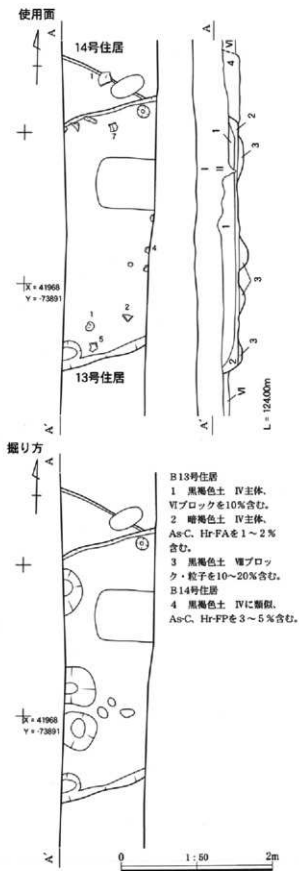
遺物は須恵器碗、甕、羽釜などが出土している。

本住居の年代は出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。

B 14号住居

本住居はB-5区中程、X=41970、Y=-73889・-73890に位置する。今回、調査した範囲は住居の北辺の僅かな箇所であった。他遺構との重複関係は近代の土坑とB13号住居との重複が確認された。新旧関係はB13号住居より本住居の方が古い。

平面形態、規模は調査した範囲が僅かなため不明である。壁高は確認面から5cm前後、土層観察断面



50図 B13号住居・B14号住居 遺構図

3. 古墳時代～奈良・平安時代

では20cmほどである。

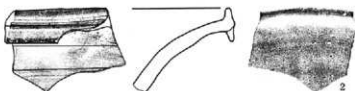
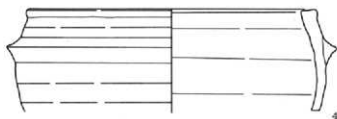
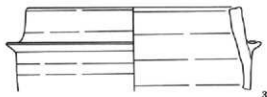
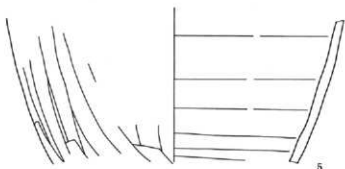
調査した範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝、カマドなどは確認されなかった。床面は地山をそのまま踏み固めて硬化面として使用している。

埋没状態は土層断面の観察では単一層しか確認されなかったため不明である。

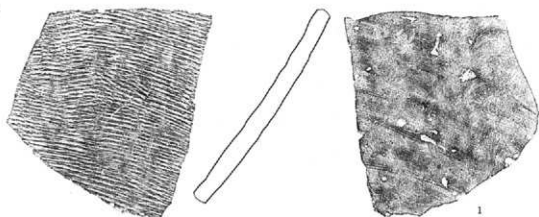
遺物は土師器、須恵器が僅かに出土したが、図化できたのは須恵器甕の胴部片1点だけであった。

本住居の年代は出土遺物と重複するB13号住居から9世紀代に比定される。

B13号住居



B14号住居



51図 B13号住居・B14号住居 遺物図

B13号住居

No.	種 類 器 形	出土位置 残存率	計 測 値	胎 土/焼 成 色 調	成 型 方 法 の 特 徴	備 考
1	灰釉陶器 椀	+4 1/2	口径 13.2 底径 7.0 器高 4.5 台径 6.2	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラナデ。高台は貼付。施釉方法は遣け掛け。	大原2号 室式期
2	須恵器 甕	+8 口縁部小片		細砂粒/還元焰 灰	ロクロ整形、回転方向不明。	
3	須恵器 羽釜	+15 口縁部片	口径 16.6 器径 20.1	細砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。器は貼付。	
4	須恵器 羽釜	+10 口縁部片	口径 22.6 器径 26.0	細砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。器は貼付。	
5	土師器 甕	+10 胴部中位片		粗砂粒/良好 暗赤灰	胴部下半は縦方向のヘラ割り。	

Ⅲ 検出した遺構と遺物

B14号住居

NO. P.L	種 類 形 式	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成 型 形 状 の 特 徴	備 考
1 PL44	須臾器 甕	+8 割断片		粗砂粒/還元焰 灰白	外面は平行厚き、内面のアテ具痕はナデのため不明。	

B15号住居

本住居はB-2区・B-6区、X=41966～41971、Y=-73879～-73880に位置する。今回、調査した範囲は東側1/3ほどであったが、近代の土坑や擾乱によって中央付近は欠損していた。他遺構との重複関係はB11号住居、B19号住居との重複が確認された。新旧関係は重複する2軒の住居より本住居の方が古い。

平面形態は方形または長方形を呈する。規模は南北5.06m、東西1.60m+α、東辺4.70mを測る。壁高は確認面から10～15cm、土層観察断面で埋没土の状態から見ると40cm前後あったとみられる。主軸方位はN-89°-Eを指す。

調査範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層とVIII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

カマドは東辺のほぼ中央に構築されているが、重使用面

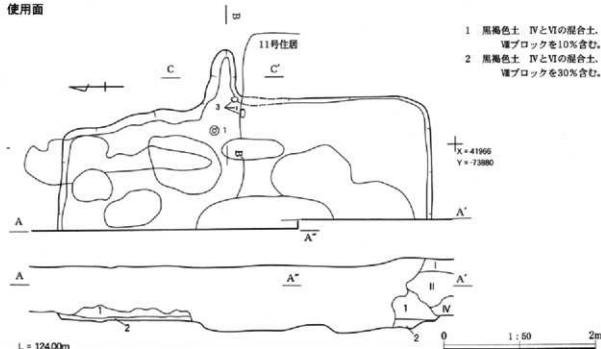
複するB11号住居によって右袖側の一部を欠き、天井部、袖部の残存状態は悪い状態であった。規模は全長92cm、幅60cmで焚き口の一部と煙道部分は壁外に60cm延びる。焚き口での焼土は部分的にカマドを廃棄するときに上部だけでなく下部まで破壊された様子がうかがえた。

掘り方は南側で5～7cmの浅い落ち込みや掘削時の凹凸が若干確認されただけであった。

埋没状態は後世の土坑や擾乱によって埋没土の大半を欠くため不明である。

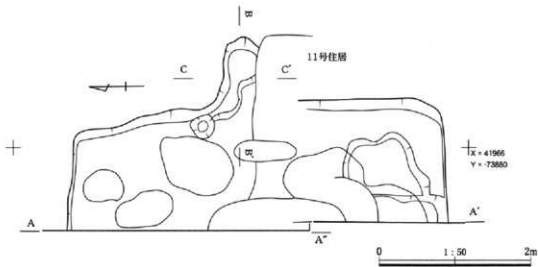
遺物は土師器杯、甕などが若干出土しているだけであった。図化した1、3の土師器杯はカマドとカマド前の床面からの出土である。

本住居の年代は出土遺物から8世紀第1四半期に比定される。

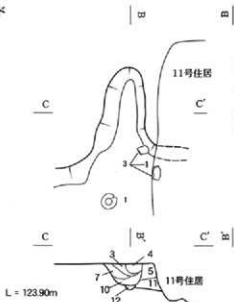


52図 B15号住居 遺構図(1)

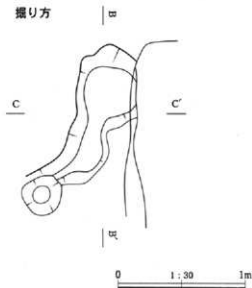
掘り方



カマド

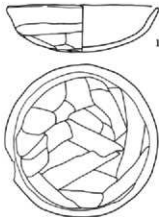


掘り方



B15号住居カマド

- 1 黒褐色土 粘質土、黄褐色粘土ブロックを30%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 粘質土、焼土粒を5%含む。天井部の崩落土
- 3 黒褐色土 炭化物、焼土粒を10%含む。
- 4 黒褐色土 焼土粒を3%含む。
- 5 黒褐色土 焼土粒を1～2%含む。右袖
- 6 褐色土 焼土を20%含む。
- 7 褐色土 VIに近似した砂質土、焼土粒を3%含む。
- 8 黒褐色土 4に類似、焼土粒、ブロックを30%含む。
- 9 黒褐色土 焼土粒、2のブロックを10%含む。
- 10 黒褐色土 焼土粒を5%含む。
- 11 黒褐色土 焼土粒を2%含む。
- 12 褐色土 VI、VIIの崩落土。



53図 B15号住居 遺構図(2)・遺物図

Ⅲ 検出した遺構と遺物

B15号住居

NO. P.L	種類 P.L	形状 P.L	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成整形の特徴	摘要
1 PL44	土師器 杯	カマド 定形		口径 11.7 口径 10.4 器高 3.7	細砂粒/良好 明赤陶	口縁部は横ナデ、横はナデだけの箇所が残る。底部は不定方向のヘラ削り。	
2 PL44	土師器 杯	埋没土中 1/4		口径 13.6 口径 9.4 器高(3.7)	細砂粒/軟質 明赤陶	口縁部上半は横ナデ、下半と底部はヘラ削りであるが器面摩耗のため単位不明。	
3 PL44	土師器 杯	床面直上 1/4		口径 18.8 口径 16.0 器高 3.6	粗砂粒/良好 橙	口縁部は横ナデ、底部は不定方向のヘラ削り。	

B17号住居

本住居はB-6区中程、X=41958~41961、Y=-73879~-73881に位置する。今回、調査した範囲は東側1/4ほどであった。他遺構との重複関係はB18号住居との重複が確認された。新旧関係は本住居の方が新しい。

平面形態は方形または長方形を呈する。規模は南北3.08m、東西1.12m+ α 、東辺3.00mを測る。壁高は確認面から7~10cm、土層観察断面で埋没土の状態から見ると30cm前後あったとみられる。主軸方位はN-90°-Eを指す。

調査範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層とVII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

カマドは東辺のほぼ中央に構築されている。残存状態は焼土や粘土ブロックが確認される程度の悪い状態であった。規模は全長67cm、幅90cmで煙道部分は壁外に23cm延びる。

掘り方は掘削時の凹凸が多少見られるがほぼ平坦である。南辺の調査区際に円形で径72cm、深度10cmの浅い土坑状の落ち込みが確認されたが埋没土の状態などから床下土坑などの施設とは断定されなかった。

埋没状態は土層断面の観察では南側より土砂が流入した様子がうかがえ、自然埋没であるとみられる。

遺物は土師器、須恵器などとともにも埴の破片が出土している。

本住居の年代は出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

B18号住居

本住居はB-6区南端、X=41955~41958、Y=-73879~-73881に位置する。今回、調査した範囲は東側1/2ほどであった。他遺構との重複関係はB17号住居との重複が確認された。新旧関係は本住居の方が古い。

平面形態は方形または長方形を呈する。規模は南北3.64m、東西2.0m+ α 、東辺3.35mを測る。壁高は確認面から3~5cm、土層観察断面で埋没土の状態から見ると20cm前後あったとみられる。主軸方位はN-95°-Eを指す。

調査範囲では東南角より貯蔵穴が確認された。その他の柱穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。貯蔵穴は楕円形を呈し、規模は径70×50cm、深度15cmである。内部からは2と3・5の須恵器杯、碗が3点出土している。床面はVII層ブロックを主体にIV層、VI層など掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

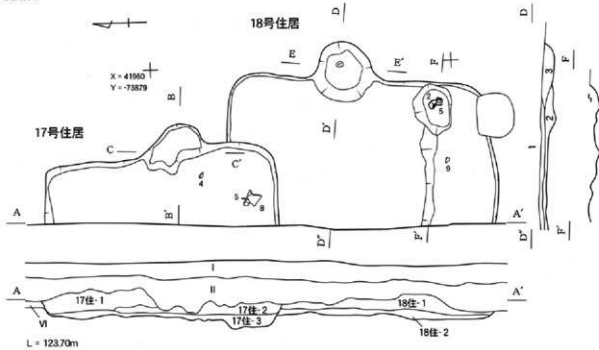
カマドは東辺のほぼ中央寄りに構築されている。残存状態は焚き口が確認されただけで袖や天井部については確認されなかった。規模は全長80cm、幅100cmで焚き口部分は壁外に50cmほど延びる。

掘り方は掘削時の凹凸が多少見られるがほぼ平坦であるが、南辺際では浅い土坑状の落ち込みの連続が確認された。この落ち込みは埋没土の状態などから床下土坑などの施設とは断定されなかった。

遺物は須恵器碗、甕、羽釜などが出土しているが大部分は確認面での出土で本住居に共存するとみられるものは貯蔵穴から出土した2と3・5である。

本住居の年代は出土遺物から10世紀第2四半期に比定される。

使用面



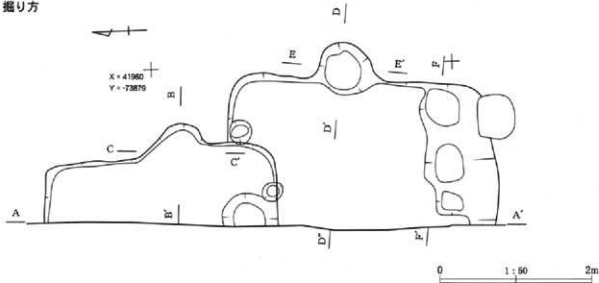
B17号住居

- 1 黒褐色土 IVに類似, As-C, Hr-FAを3~5%含む。
- 2 黒褐色土 IVに類似, As-C, Hr-FAを5%含む。
- 3 灰黄褐色土 IV, VI, VIIの混合土, 雉ブロックを10%含む。
(掘り方)

B18号住居

- 1 黒褐色土 IVに類似, As-C, Hr-FAを5%含む。
- 2 灰黄褐色土 IV, VI, VIIの混合土, 雉ブロックを10%含む。(掘り方)
- 3 黒褐色土 IVに類似, 雉ブロック、粒を10%含む。(カマド)

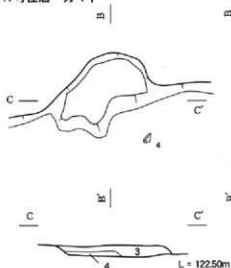
掘り方



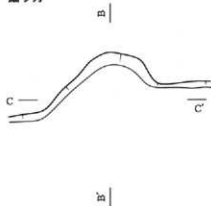
54図 B17号住居・B18号住居 遺構図(1)

Ⅲ 検出した遺構と遺物

B17号住居 カマド



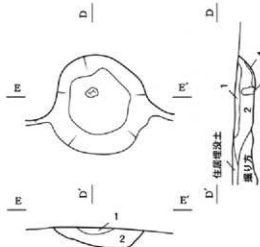
掘り方



B17号住居カマド

- 1 黒褐色土 焼土粒を3%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 粘土質
- 3 黒褐色土 焼土粒・ブロックを5%含む。
- 4 暗褐色土 3に類似、焼土の他にⅤブロックを20%含む。

B18号住居 カマド

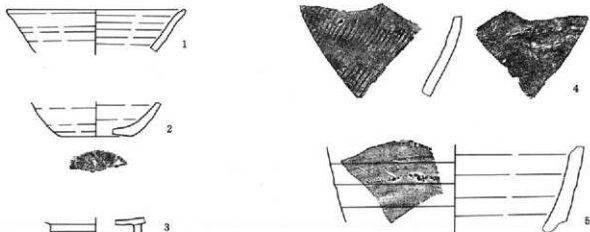


B18号住居カマド

- 1 黒褐色土 焼土粒、ブロックを10%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 Ⅴブロック主体、黒色土を20%と焼土粒を3%含む。
- 3 焼土と炭のブロック。
- 4 にぶい黄褐色土 Ⅴの崩落土。

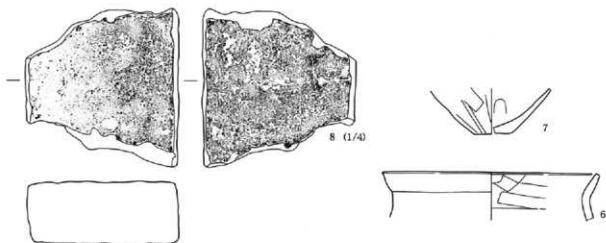
0 1:30 1m

55図 B17号住居・B18号住居 遺構図(2)



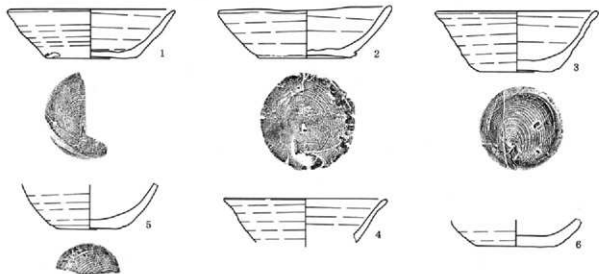
56図 B17号住居 遺物図(1)

3. 古墳時代～奈良・平安時代



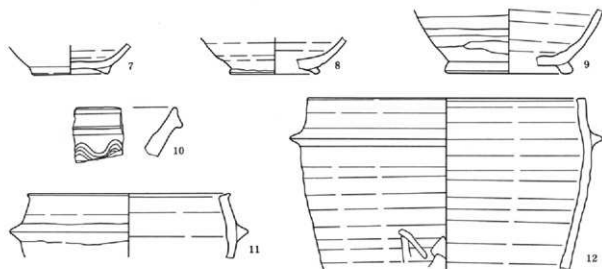
57図 B17号住居 遺物図(2)

NO. P.L	種 類 形	出土位置 残存率	計 測 値	胎 土/焼 成 色 調	成 型 形 の 特 徴	備 考
1	須恵器 碗	埋没土中 口縁部片	口径 14.0	細砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。	
2	須恵器 碗	埋没土中 底～口縁片	底径 5.6	細砂粒/還元焰 灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3	灰軸陶器 碗	埋没土中 底部片	底径 7.2 台径 6.2	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。底部回転ヘラナデ。	光ヶ丘1 号窯式期
4	須恵器 甕	埋没土中 胴部片		細砂粒/還元焰 灰	外面は平行叩き痕が残る。内面のアナ具痕はナデのため不明。	
5	須恵器 甕	埋没土中 胴部下位片		細砂粒/還元焰 灰	ロクロ整形、回転方向不明。胴部下位は回転ヘラ削り。	
6	土師器 甕	床面直上 口縁部片	口径 16.4	細砂粒/良好 橙	口縁部は横ナデ、内面口縁部は横ナデと一部ヘラナデ。	
7	土師器 甕	床面直上 底～胴部片	底径 3.0	細砂粒/良好 橙	胴部は縦方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。	
8 PL46	土製品 埴	床面直上 中央部片	幅 16.2 厚 6.7	粗砂粒/還元焰 にぶい島	表面はヘラ削り後ヘラナデか。	



58図 B18号住居 遺物図(1)

Ⅲ 検出した遺構と遺物



59図 B18号住居 遺物図(2)

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の特徴	概要
1	須忠器 杯	カマド L/2	口径 13.1 底径 7.0 器高 3.9	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
2	須忠器 杯	貯蔵穴 空形	口径 13.2 底径 7.4 器高 4.2	細砂粒/還元焰 明赤褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3	須忠器 杯	貯蔵穴 L/2	口径 12.4 底径 5.8 器高 4.8	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
4	須忠器 椀	埋没上中 口縁部片	口径 12.8	細砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。	
5	須忠器 椀	貯蔵穴 底~口縁片	底径 4.8	細砂粒/還元焰 明赤褐	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。	
6	須忠器 椀	埋没上中 底~口縁片	底径 6.0	細砂粒/還元焰 にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
7	須忠器 椀	確認面 底~口縁片	底径 6.5 台径 5.8	細砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。高台はナダ。高台は貼付。	
8	須忠器 椀	確認面 底~口縁片	底径 7.0 台径 6.4	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。高台は貼付。	
9	灰釉陶器 長頸壺	掘り方 底~胴片	口径 9.4 台径 9.4	細砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラナダ。胴部下位は回転ヘラ掘り。施釉方法は漬け掛けか。	大原2号 窯式期?
10	須忠器 壺	確認面 口縁部小片		細砂粒/還元焰 灰黄	ロクロ整形。口縁部には飯杖文が施文。	
11	須忠器 羽釜	確認面 口縁部片	口径 15.8 口径 18.8	細砂粒/還元焰 にぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。器は貼付。	
12	須忠器 羽釜	埋没上中 口~胴片	口径 21.8 口径 24.8	細砂粒/還元焰 にぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。器は貼付。胴部下半は縦方向のヘラ掘り。	

B19号住居

本住居はB-6区北寄り、X=41963~41966、Y=-73877~-73881に位置する。今回、調査した範囲は東側2/3ほどであった。他遺構との重複関係はB15住居、B21号土坑との重複が確認された。新旧関係はB21号土坑より古い、B15号住居との重複する箇所の擾乱によって明確ではないが

出土した遺物から本住居の方が新しい。

平面形態は方形または長方形を呈する。規模は南北3.52m、東西2.94m+αを測る。壁高は確認面から5cm前後、土層観察断面で埋没土の状態から見ると15cm以上あったとみられる。主軸方位はN-89°-Eを指す。

調査範囲では東辺際のカマド南側で貯蔵穴が確認

3. 古墳時代～奈良・平安時代

された。その他の柱穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。貯蔵穴は楕円形を呈し、規模は径75×50cm、深度23cmである。内部からは1～3と7の須恵器椀が4点がまとまった状態で出土している。床面はIV層、VI層、VII層とVII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

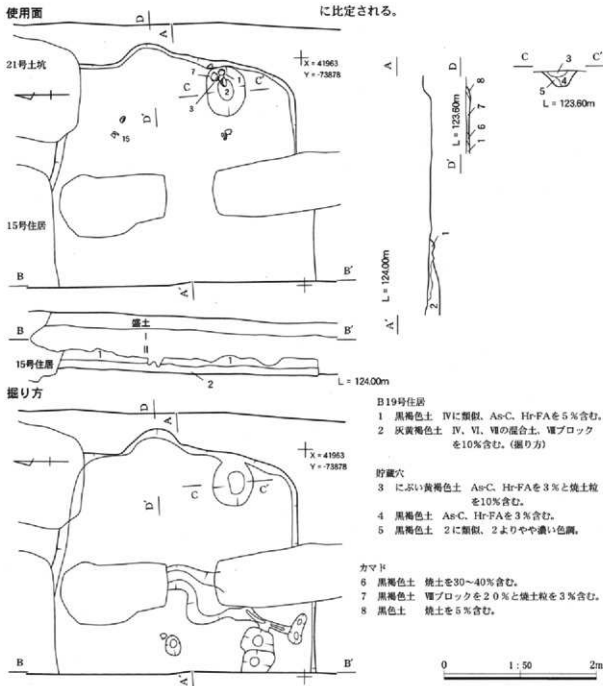
カマドは東辺のほぼ中央よりに構築されている。

残存状態は掘り方が確認されただけで詳細は不明である。

掘り方は掘削時の凹凸が多少見られるがほぼ平坦であるが、南西部分では浅い土坑状や溝状の落ち込みが確認された。この落ち込みは埋没土の状態などから床下土坑などの施設とは断定されなかった。

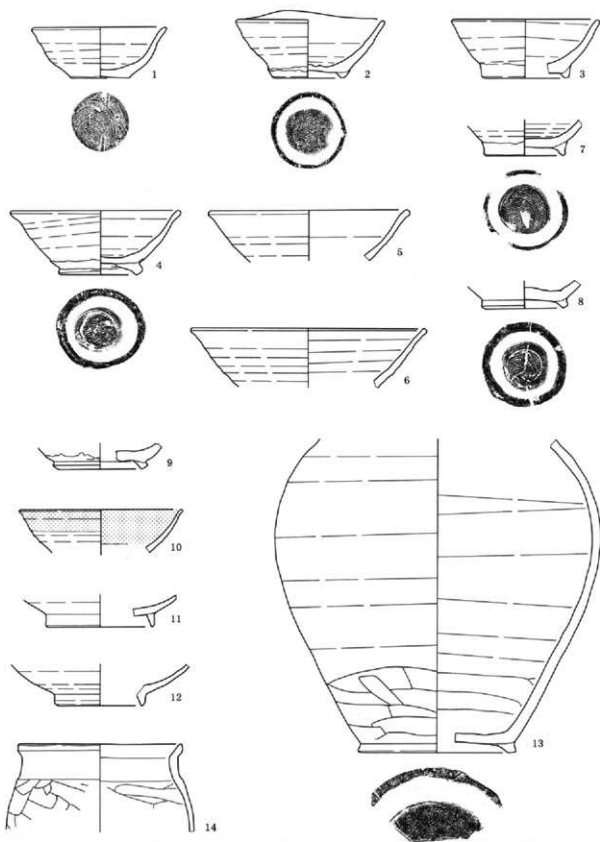
遺物は須恵器椀、甕、羽釜などが出土している。

本住居の年代は出土遺物から10世紀第2四半期に比定される。



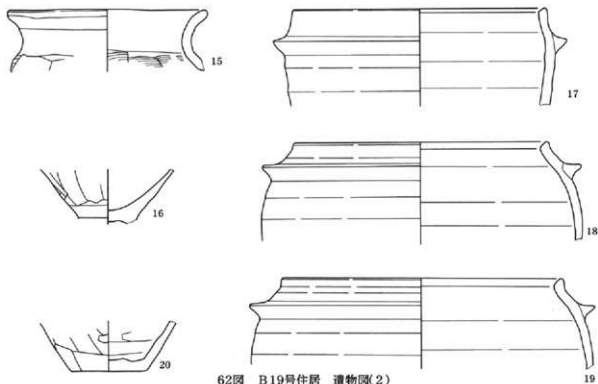
60図 B19号住居 遺構図

Ⅲ 検出した遺構と遺物



61図 B19号住居 遺物図(1)

3. 古墳時代～奈良・平安時代



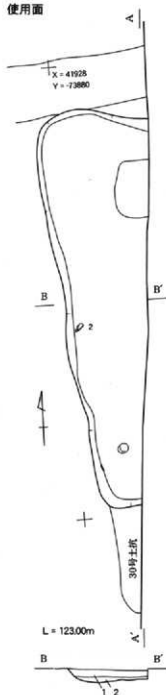
62図 B19号住居 遺物図(2)

NO. P.L	種 類	出土位置 残存率	計 測 値	胎 土 / 焼 成 色 調	成 型 形 式 の 特 徴	備 考
1 PL47	須恵器 碗	貯蔵穴 完形	口径 10.3 底径 4.6 器高 4.0	細砂粒 / 酸化焙 浅黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
2 PL47	須恵器 碗	貯蔵穴 完形	口径 11.4 底径 6.4 器高 5.3 台径 5.4	細砂粒 / 還元焙 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
3 PL47	須恵器 碗	貯蔵穴 1/2	口径 11.4 底径 6.4 器高 4.6 台径 6.5	細砂粒 / 還元焙 灰黄褐	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切りか。高台は貼付。	
4 PL47	須恵器 碗	確認面 口径2/3欠	口径 13.2 底径 6.4 器高 5.1 台径 6.0	細砂粒 / 酸化焙 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
5	須恵器 碗	埋没土中 口縁部片	口径 15.2	細砂粒 / 還元焙 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。	
6	須恵器 碗	確認面 口縁部片	口径 18.2	細砂粒 / 酸化焙 にぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。	
7	須恵器 碗	貯蔵穴 底部	底径 6.6 台径 6.0	細砂粒 / 還元焙 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
8	須恵器 碗	確認面 底部	底径 6.6 台径 6.0	細砂粒 / 還元焙 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
9	須恵器 碗	確認面 底部片	底径 7.4 台径 6.4	細砂粒 / 還元焙 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
10	灰軸陶器 碗	確認面 口縁部片	口径 12.6	微砂粒 / 還元焙 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は刷毛塗りか。	寛ヶ丘1号室式期
11	灰軸陶器 碗	確認面 底～口縁片	底径 8.6 台径 8.0	微砂粒 / 還元焙 黄灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部はナデ。高台は貼付。施軸方法は不明。	大原2号室式期
12	灰軸陶器 碗	確認面 高台～口片	底径 7.2 台径 6.4	微砂粒 / 還元焙 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。施軸方法は漬け掛け。	大原2号室式期
13 PL47	須恵器 碗	確認面 胴部1/2	底径 12.0 台径 11.4 胴部最大径 25.7	細砂粒 / 還元焙 灰	ロクロ整形、回転方向右回りか。底部はナデ。高台は貼付。胴部下位は横方向のヘラ削り。	
14 PL47	土師器 甕	確認面 口縁～胴片	口径 12.8 胴径 14.9	細砂粒 / 良好 にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部は横方向のヘラ削り。内面胴部横ナデ。	
15 PL47	土師器 甕	床面直上 口縁～胴片	口径 15.5	細砂粒 / 良好 赤褐	口縁部は横ナデ、胴部は横方向のヘラ削り。内面胴部横ナデ。	

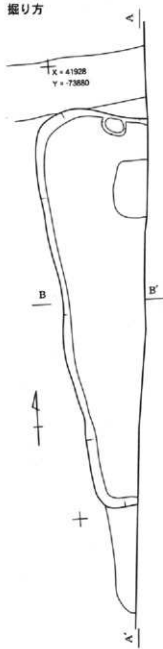
III 検出した遺構と遺物

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の特徴	摘要
16 PL48	土師器 台付壺	埋没土中 胴部下位	底径 4.6	細砂粒/良好 にふい赤褐色	胴部下位は縦方向のヘラ削り。接合部は横ナデ。 内面胴部はナデ。	
17 PL48	須恵器 羽釜	貯蔵穴 口縁~胴片	口径 19.8 口径 23.2	細砂粒/還元焼 暗灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。罫は貼付。	
18 PL48	須恵器 羽釜	確認面 口縁~胴片	口径 20.0 口径 25.0	細砂粒/酸化焼 にふい赤褐色	ロクロ整形、回転方向不明。罫は貼付。	
19 PL48	須恵器 羽釜	確認面 口縁~胴片	口径 22.0 口径 27.6	細砂粒/還元焼 にふい橙	ロクロ整形、回転方向不明。罫は貼付。	
20 PL48	須恵器 羽釜	床面直上 底~胴片	底径 6.0	細砂粒/酸化焼 にふい黄褐色	ロクロ整形、回転右回りか。底部・胴部ヘラ削り。 内面胴部ヘラナデ。	

使用面



掘り方



- 1 黒褐色土 IVとVの混合土
ブロックを5%含む。
- 2 暗褐色土 Vブロックを20%
含む。
- 3 黒褐色土 Vブロックを20%
~30%含む。(掘り方)
- ① 褐色土 II主体、IVブロッ
クを20%含む。中世の耕作土
- ② 暗褐色土 II主体、IVブロッ
クを20~30%含む。

63図 B21号住居 遺構図

3. 古墳時代～奈良・平安時代

B21号住居

本住居はB-7区中程の東端、X=41922~41927、Y=-73878・73879に位置する。今回、調査した範囲は西辺よりの1/5ほどであった。他遺構との重複関係はB30号土坑との重複が確認された。新旧関係は本住居の方が新しい。

平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。規模は南北5.36m、東西1.5m+ α 、西辺5.20mを測る。壁高は確認面から5~15cm、土層観察断面では20cmほどが確認できる。主軸方位はN-85°-Eを指す。

調査範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設



64図 B21号住居 遺物図

NO. P.L.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型 特徴	備考
1	土師器 杯	埋没土中 口縁部片	口径 12.2	細砂粒/良好 にぶい焼	口縁部上位は横ナデ、中位・下位はナデ。	
2	須恵器 椀	+5 底~口縁片	底径 7.6 台径 6.6	細砂粒/還元焰 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。高台は貼付。	
PL48	緑釉陶器 皿	確認面 底~口縁片	底径 8.2 台径 7.0	水風/還元焰軟 質/淡黄	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。口縁部下位は回転へう張り。内面は全面へう磨き。	遺物14号 室式期

B22号住居

本住居はB-8区中程、X=41903~41906、Y=-73879~-73882に位置する。今回、調査した範囲は重複する遺構などによって欠く部分が多く東南部分の1/4ほどであった。他遺構との重複関係はB23号住居、B24号住居、B3号井戸と重複が確認された。新旧関係はB24号住居より本住居の方が新しいが、他の遺構よりは本住居の方が古い。

平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。規模は南北2.0m+ α 、東西1.7m+ α を測る。壁高は確認面から5cmほどである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

調査範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はIV層、VI層とVII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め

は確認されなかった。床面はIV層、VI層とVII層ブロックなど掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

カマドは調査区内では確認されなかった。

掘り方は掘削時の凹凸が多少見られたがほぼ平坦である。

埋没状態は土層断面の観察から自然埋没であるとみられる。

遺物は須恵器椀、甕と緑釉陶器皿が出土している。本住居の年代は出土遺物から9世紀後半代に比定される。

硬化面としている。

カマドは調査区内では確認されなかった。

掘り方は掘削時の凹凸が多少見られたがほぼ平坦である。

遺物は土師器、須恵器などの小片が僅かに出土しているだけで図化可能なものはみられなかった。

本住居の年代は重複する遺構から9世紀前半代に比定される。

B23号住居

本住居はB-8区中程、X=41905~41909、Y=-73880~-73882に位置する。今回、調査した範囲は東南部分の1/3ほどであった。他遺構との重複関係はB22号住居、B24号住居、B3号井戸、B27号土坑と重複が確認された。新旧関係は2軒の住居より本住居の方が新しいが、他の遺構

Ⅲ 検出した遺構と遺物

よりは本住居の方が古い。

平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。規模は南北3.0m+α、東西3.1m+αを測る。壁高は確認面から2～10cmほどである。主軸方位はN-57°-Eを指す。

調査範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面はⅣ層、Ⅵ層とⅧ層ブロックなどの掘削した土を混合して再度入れて踏み固め硬化面としている。

カマドは東辺に構築されている。残存状態は今回調査した住居のカマドの中で最も良好な状態であった。規模は全長145cm、幅80cmを測る。カマドの方位は住居の主軸方位よりさらに45°南を向いている。袖は残存高は低いが明確に確認され左袖内部には粗粒輝石安山岩を角状に加工したものの(PL 51-25・26)を心材として使用していた。焚き口から煙道にかけては焼土と灰がやや厚く堆積していた。煙道部には土師器甕が口縁部を下にして据えられており排気口の役割を持たせていたとみられる。

掘り方はカマド全部に深度5cmほどの落ち込みがみられるが内部、周辺部とも掘削時の凹凸が多少見られるがほぼ平坦である。

埋没状態は土層断面の観察でレンズ状の堆積が確認されることから自然埋没であるとみられる。

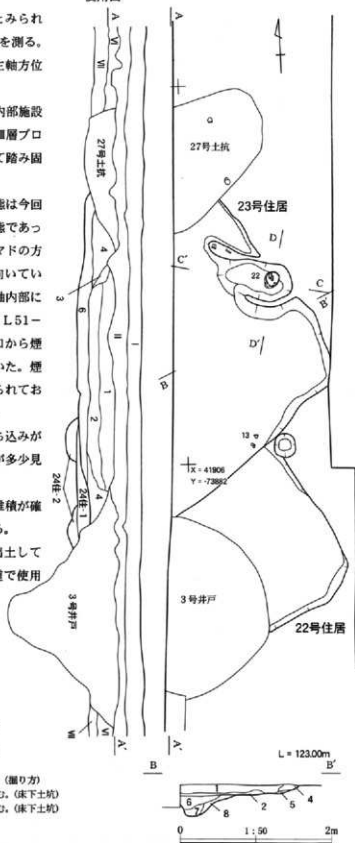
遺物は土師器、須恵器、鉄器、埴などが出土している。そのうち22の土師器甕はカマド煙道で使用されていたものである。

本住居の年代は出土した遺物から9世紀第3四半期に比定される。

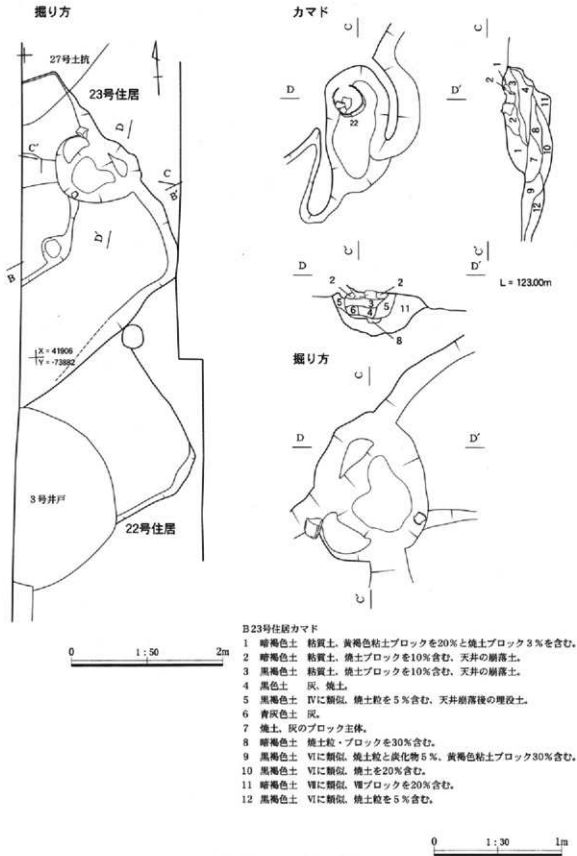
B23号住居

- 1 黒褐色土 Ⅳに類似、As-C、Hr-FPを5%含む。
- 2 黒褐色土 Ⅰに類似、ⅠよりAs-C、Hr-FPが少ない。
- 3 黒褐色土 Ⅰに類似、As-C、Hr-FPを10%含む。
- 4 黒褐色土 ⅣとⅥの混合土、Ⅷブロックを10%含む。
- 5 黒褐色土 Ⅳに類似、Ⅷブロックを30%含む。
- 6 黒褐色土 Ⅳ、Ⅵの混合土、Ⅷブロックを30%含む。(掘り方)
- 7 にぶい黄褐色土 Ⅷ主体、Ⅳ、Ⅵブロックを30%含む。(床下土坑)
- 8 にぶい黄褐色土 Ⅷ主体、Ⅳ、Ⅵブロックを10%含む。(床下土坑)

使用面

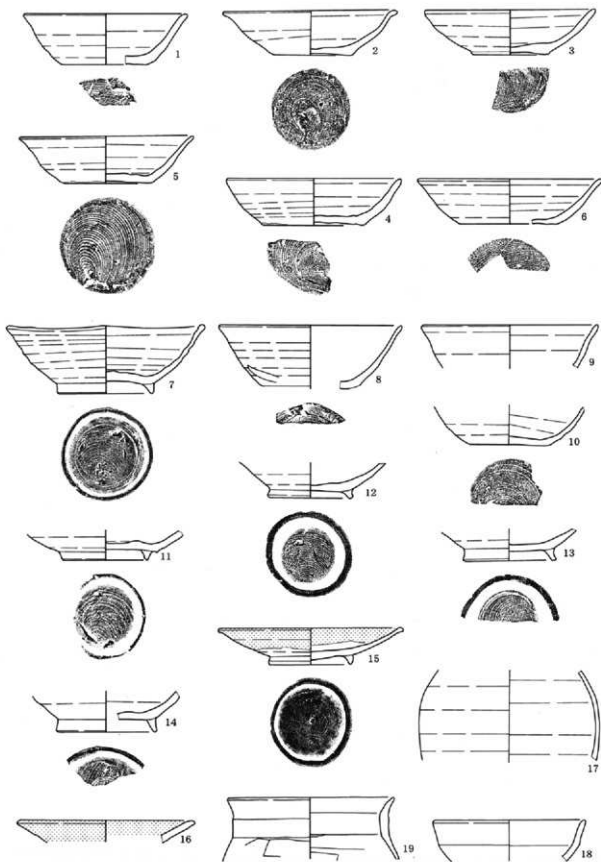


65図 B22号住居・B23号住居 遺構図(1)



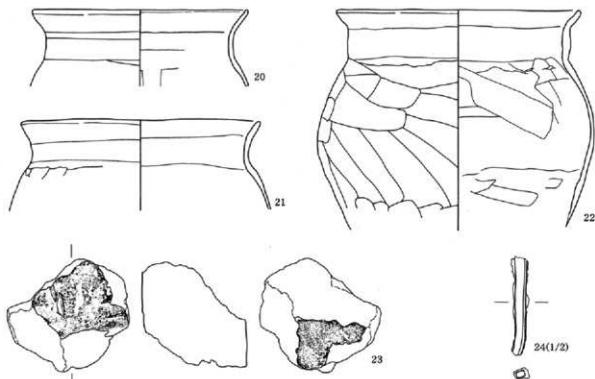
66図 B22号住居・B23号住居 遺構図(2)

Ⅲ 検出した遺構と遺物



67図 B23号住居 遺物図(1)

3. 古墳時代～奈良・平安時代



68図 B23号住居 遺物図(2)

NO. P.L.	種 類 器 形	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成 色 調	成 整 形 の 特 徴	備 考
1 PL49	須恵器 杯	埋没土中 1/4	口径 12.6 底径 6.8 器高 4.0	細砂粒/還元焰 灰	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
2 PL49	須恵器 杯	埋没土中 完形	口径 13.2 底径 6.2 器高 3.6	細砂粒/還元焰 灰白	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3 PL49	須恵器 杯	埋没土中 1/4	口径 13.2 底径 6.0 器高 3.6	細砂粒/還元焰 灰	ワクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。	
4 PL49	須恵器 杯	埋没土中 1/6	口径 13.6 底径 8.0 器高 3.7	細砂粒/還元焰 灰白	ワクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。	
5 PL49	須恵器 杯	埋没土中 3/4	口径 13.6 底径 7.4 器高 3.8	細砂粒/還元焰 灰	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
6 PL49	須恵器 杯	カマド 1/4	口径 14.3 底径 7.8 器高 3.6	細砂粒/還元焰 灰	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
7 PL49	須恵器 碗	床面直上 1/2	口径 15.2 底径 7.8 器高 5.4 台径 7.2	細砂粒/還元焰 灰	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
8 PL49	須恵器 碗	埋没土中 1/6	口径 14.2 底径 7.6	細砂粒/還元焰 にぶい黄緑	ワクロ整形、回転方向不明。底部回転糸切り。高台は貼付であるが、剥落。	
9	須恵器 碗	掘り方 口縁部片	口径 13.8	細砂粒/還元焰 灰黄	ワクロ整形、回転方向不明。	
10 PL50	須恵器 碗	掘り方 底～口縁片	底径 6.4	細砂粒/還元焰 灰白	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
11 PL50	須恵器 碗	埋没土中 底～口縁片	底径 7.4 台径 6.6	細砂粒/還元焰 灰	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
12 PL50	須恵器 碗	確認面 底～口縁片	底径 6.6 台径 6.4	細砂粒/還元焰 灰白	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
13 PL50	須恵器 碗	確認面 底～口縁片	底径 7.1 台径 6.6	細砂粒/還元焰 灰	ワクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
14 PL50	須恵器 碗	確認面 底～口縁片	底径 7.7 台径 7.6	細砂粒/還元焰 灰	ワクロ整形、回転方向不明。底部回転糸切り。高台は貼付。	
15 PL50	灰釉陶器 皿	床面直上 3/4	口径 14.0 底径 6.6 器高 2.9 台径 6.2	微砂粒/還元焰 灰白	ワクロ整形、回転右回り。底部回転ナテ。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘1 号室式副

Ⅲ 検出した遺構と遺物

16	灰釉陶器 段皿	確認面 口縁部片	口径 13.4	隈砂粒/還元炭 灰質	ロクロ整形、回転方向不明。表面全面に釉施。	
17	灰釉陶器 皿	確認面 胴部片	胴部最大径 14.2	隈砂粒/還元炭 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。釉薬は剥離のため施 輪方法不明。	
18	緑釉陶器 種杓	確認面 口縁部片	口径 11.8	隈砂粒/還元炭 軟質/浅黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。	京都産か
19	土師器 壺	埋没土中 口縁~胴片	口径 13.0	細砂粒/良好 にぶい雫	口縁部横ナデ、胴部横方向のヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
20	土師器 壺	確認面 口縁~胴片	口径 16.8	細砂粒/良好 にぶい雫	口縁部横ナデ、頸部ナデ。胴部横方向のヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
21	土師器 壺	確認面 口縁~胴片	口径 18.6	細砂粒/良好 にぶい赤雫	口縁部横ナデ、頸部ナデ。胴部横方向のヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
22	土師器 壺	カマド 口縁~胴部	口径 19.0 胴径 21.6	細砂粒/良好 橙	口縁部横ナデ、頸部ナデ。胴部横方向のヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
23	土製品 埴	確認面 一部片		隈砂粒/酸化炭 軟質/橙	表面はヘラナデ。	
PL51	埴					
	種類	器形	出土位置	残存率	計	測
24	鉄器	鏝	確認面	葉片	長(5.2) 幅(0.9) 厚(0.55) 重(5.4)	PL51
	種類	器形	出土位置/残存率	石材	計	測
25	石	輪塗材	カマド/完形	隈砂輝石安山岩	長 16.3 幅 9.6 厚 9.9 重 2500	PL51
26	石	輪塗材	カマド/完形	隈砂輝石安山岩	長 21.3 幅 12.3 厚 13.1 重 3750	PL51

B24号住居

本住居はB-8区中程、B22号住居、B23号住居の下層で確認された。今回、調査した範囲は東南部分の1/4ほどであった。残存状態は上部を重複する竪穴住居などで削られており非常に悪い状態であった。他遺構との重複関係はB22号住居、B23号住居、B3号井戸と重複が確認された。新旧関係は本住居が最も古い。

平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。規模は南北2.7m+α、東西1.5m+αを測る。主軸方位はN-ほぼ90°-Eを指す。

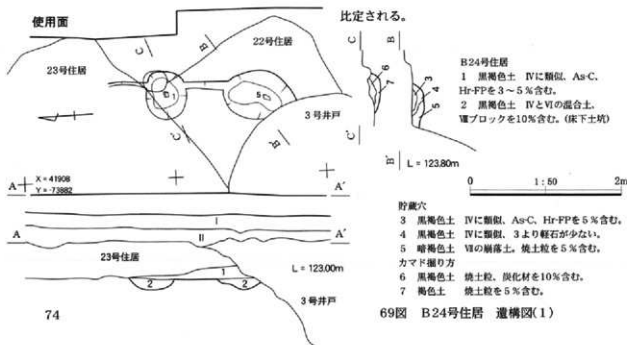
内部施設は東南角隅で貯蔵穴を確認したが、柱穴、

周溝は確認されなかった。貯蔵穴は楕円形を呈し、規模は径80×55cm、深度15cmである。床面はVI層、VII層とVIII層を混合した土砂を再度入れて踏み固めて硬化面とした箇所と地山をそのまま踏み固めて硬化面としている箇所がみられた。

カマドは東辺に構築されている。残存状態は上部に存在する住居のため焚き口部分が土坑状に残存するだけであった。規模は全長65cm、幅53cmである。掘り方は周辺部を中心部に比べて深さ15cmほど掘り窪めてある。

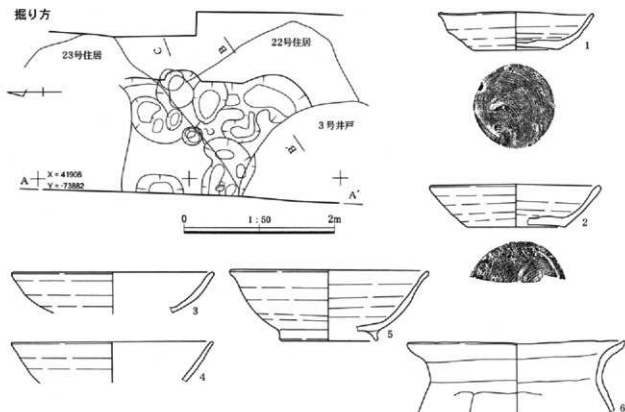
遺物は須恵器、土師器などが出土している。

本住居の年代は出土遺物から9世紀第2-4半期に比定される。



69図 B24号住居 遺構図(1)

3. 古墳時代～奈良・平安時代



70図 B24号住居 遺構図(2)・遺物図

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計 測 値	胎 土/焼 成 色 調	底 盤 形 の 特 徴	摘 要
1 PL51	須恵器 杯	カマド側方 完形	口径 12.0 底径 6.7 器高 3.0	細砂粒/還元焼 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
2 PL51	須恵器 杯	掘り方 1/3	口径 13.2、底径 7.8 器高 3.4	細砂粒/還元焼 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3	須恵器 杯	掘り方 口縁部片	口径 15.6	細砂粒/還元焼 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。	
4	須恵器 杯	掘り方 口縁部片	口径 15.8	細砂粒/還元焼 灰	ロクロ整形、回転方向不明。	
5 PL51	須恵器 碗	貯蔵穴 1/4	口径 15.6 底径 8.0 器高 5.6 台径 7.6	細砂粒/還元焼 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部はナデ。高台は貼付。	
6 PL51	土師器 甕	掘り方 口縁部片	口径 16.8	細砂粒/良好 にぶい焼	口縁部は横ナデ、肩部はナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

C1号住居

本住居はC-5区の北東部分、X=41980～41984、Y=-73888～-73891に位置する。C-5区はB-1区に引き続き表土を掘削したところB-1区で遺構確認面としたⅦ層が北へ傾斜していたためⅦ層の上層にあたるⅦ層、Ⅵ層の堆積が比較的厚いため住居を重機で掘削してしまい調査区端部の断面で検出する結果となってしまったため詳細については不明である。このため調査区と用地の間

に残しておいた部分で住居の検出を行った。

平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。規模は推定で南北3.0m+α、東西3.5m+αとみられる。主軸方位はN-110°-Eを指すとみられる。

調査した範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝、カマドなどの内部施設は確認されなかった。床面は地山をそのまま踏み固めて使用している。

埋没状態は土層断面の観察で壁際に三角堆積が確

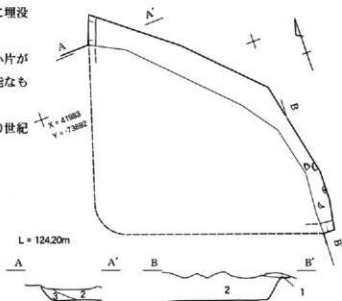
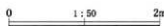
Ⅲ 検出した遺構と遺物

認められ、IV層に類似した土砂で比較的短期間に埋没していることから自然埋没であるとみられる。

遺物は須恵器椀、羽釜、灰軸陶器椀などの小片が僅かにと自然石が出土しているだけで図化可能なものはなかった。

本住居の年代は出土した僅かな遺物から10世紀代に比定される。

- 1 灰黒褐色土 IVに類似、As-C、Hr-FPを5%含む。
- 2 黒褐色土 IVに類似、As-C、Hr-FPを3~5%含む。
- 3 黒褐色土 VIに類似、VIの崩落土か。



71図 C1号住居 遺構図

D1号住居

本住居はD-6区の西端、X=42000、Y=-73870に位置する。今回、調査した範囲は東辺のごく一部である。残存状態は北側を擾乱。上部を後世の耕作や掘削で欠くため確認した部分は住居掘り方であるとみられる。

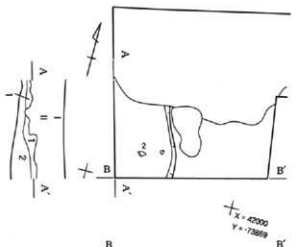
平面形態・規模については不明である。

調査範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝などの内部施設は確認されなかった。床面の状態は後世の掘削などで削られているため不明であるがVI層、VII層を再度入れて床面としている。

掘り方は掘削時の凹凸は見られるがほぼ平坦である。

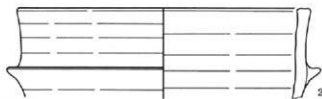
遺物は須恵器椀や羽釜が若干出土している。

本住居の年代は出土遺物から10世紀第2四半期に比定される。



- 1 黒褐色土 IVとVIの混合土。
- 2 黒褐色土 1に類似、礫小ブロックを10%と焼土粒を3%含む。

L=124.00m



72図 D1号住居 遺構図・遺物図

3. 古墳時代～奈良・平安時代

NO. P.L.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形状の特徴	摘要
1	須恵器 埴	掘り方 1/4	口径 16.4 底径 8.8	細砂粒/酸化鉛 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部ナデ。高台は貼付。	
2	須恵器 須蓋	掘り方 口縁～胴片	口径 21.6 跨径 24.8	細砂粒/酸化鉛 灰	ロクロ整形、回転右回りか。跨は貼付。	

D2号住居

本住居はD-6区の東端、X=42004・42005、Y=-73852～-73856に位置する。今回、調査した範囲は西辺の一部である。残存状態は北側を擁乱、上部を後世の耕作や掘削で欠くため確認した部分は住居掘り方であるとみられる。

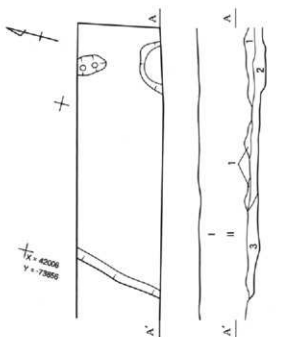
平面形態は不明である。規模は東西3.5m+αを測る他については不明である。

調査範囲では柱穴、貯蔵穴、周溝、カマドなどの内部施設は確認されなかった。床面の状態は後世の掘削などで削られているため不明であるがIV層、VI層など掘削した土を再度入れて床面としている。

掘り方は調査区東端で径70cm、深度5cmほどの浅い落ち込みが確認された。その他は掘削時の凹凸は見られるがほぼ平坦である。

遺物は須恵器埴などが若干出土している。

本住居の年代は出土遺物から10世紀第2四半期に比定される。



- 1 暗褐色土 IVに類似、焼土粒を5%含む。
- 2 黒褐色土 IVに類似、As-C、Hr-FPを3～5%と焼土粒を1%含む。
- 3 黒褐色土 IVとVIの混合土、Ⅷブロックを10%含む。

L = 124.30m

0 1:50 2m



73図 D2号住居 遺構図・遺物図

NO. P.L.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形状の特徴	摘要
1	須恵器 埴	掘り方 口縁部片	口径 12.2	細砂粒/還元鉛 灰	ロクロ整形、回転右回りか。	

Ⅲ 検出した遺構と遺物

(2)井戸

B1号井戸

本井戸はB-1区南より、X=41935~41937、Y=-73879~-73881に位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。

平面形態はほぼ円形を呈する。断面形態は確認面から50cmまでが大きく開く逆円錐状、その下部から1.5mは円筒状で底部付近は湧水による崩落が確認された。この湧水による崩落は径1~2cmの円礫を含む黄褐色砂層である。

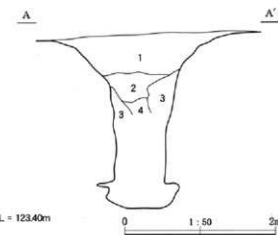
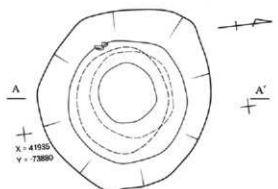
規模は確認面で径2.40×2.30m、円筒状部分が径0.70m前後、深度2.32mを測る。

井戸は井戸枠などの設備を設けた痕跡は確認されなかったことから素掘りのまま使用していたようである。

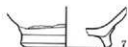
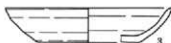
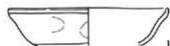
埋没状態は土層断面による観察が上半しかできなかったが、円筒部分は人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。

遺物は須恵器類、甕、羽釜などが出土している。これらの出土位置は大部分が上部からであったことから井戸を廃棄するとき不要となった土器も一緒に廃棄したと見られる。

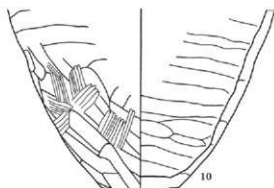
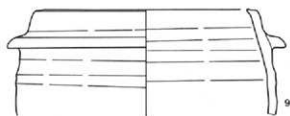
本井戸の廃棄年代は出土物から10世紀後半代に比定される。



- 1 黒褐色土、IV、VI、VIIの混じり合った土、
甕(馬鹿流土)ブロックを10%含む。
- 2 黒褐色土 1に類似、甕ブロックを20%含む。
- 3 黄褐色土 甕の崩落土、黒褐色土ブロックを20%含む。
- 4 黒褐色土 1に類似、甕ブロックを30%含む。



74図 B1号井戸 遺構図・遺物図(1)



75図 B1号井戸 遺物図(2)

NO. P L	種 類 器 形	出土位置 残存率	計 画 値	胎 土 / 焼 成 色 調	成 型 形 の 特 徴	備 考
1	土師器 杯	埋設土中 口縁部片	口径 12.4 底径 8.8	細砂粒 / 良好 橙	口縁部は横ナデ、口縁部にはナデで指掘り痕が残る。 底部はヘラ削り。	
2	黒色土器 碗	埋設土中 口縁部片	口径 11.8 底径 8.6	細砂粒 / 酸化焙 にぶい黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、高台が貼付か。口縁 部下位はヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
3	須志器 杯	埋設土中 L/5	口径 13.8 底径 8.6 器高 2.9	細砂粒 / 還元焙 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
4 FL52	須志器 碗	埋設土中 L/5	口径 10.8 底径 6.0 器高 3.3	細砂粒 / 酸化焙 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
5 FL52	須志器 碗	埋設土中 L/2	口径 11.8 底径 4.6	細砂粒 / 酸化焙 にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部切り離し技法はナ デにより不明。高台は貼付。	
6	須志器 杯	埋設土中 底部	底径 7.2	細砂粒 / 還元焙 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
7	須志器 碗	埋設土中 底～口縁片	底径 7.5 台径 6.4	細砂粒 / 酸化焙 にぶい赤褐	ロクロ整形、回転方向不明。底部切り離し技法は ナデにより不明。高台は貼付。	
8 FL52	須志器 甕	埋設土中 口縁～頸片	頸径 40.6	細砂粒 / 還元焙 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。口縁部には2条以上 の波状文が施文。	
9 FL52	須志器 羽釜	埋設土中 口～側部片	口径 16.0 口径 22.0	細砂粒 / 酸化焙 にぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。甕は貼付。	
10 FL52	須志器 羽釜	埋設土中 胴部下半片	底径 6.0	粗砂粒 / 酸化焙 にぶい黄	ロクロ整形、回転方向不明。胴部下半は縦方向の ヘラ削り。内面胴部はナデ。	

B3号井戸

本井戸はB-8区南寄り、X=41902～41905、Y=-73881・-73882に位置する。今回、調査した範囲は調査区を可能なだけ拡張したが東半分だけであった。他遺構との重複関係はB22号住居、B23号住居、B24号住居との重複が確認された。新旧関係は本井戸の方が新しい。

平面形態はほぼ円形を呈する。断面形態は逆台形状を呈し、確認面から0.8mは湧水による崩落が確

認された。湧水が確認された層位は径1～2cmの円礫を含む黄褐色砂層である。

規模は確認面で径2.42、底径0.70×0.62m、深度1.52mを測る。

井戸は井戸枠などの設備を設けた痕跡は確認されなかったことから素掘りのまま使用していたようである。

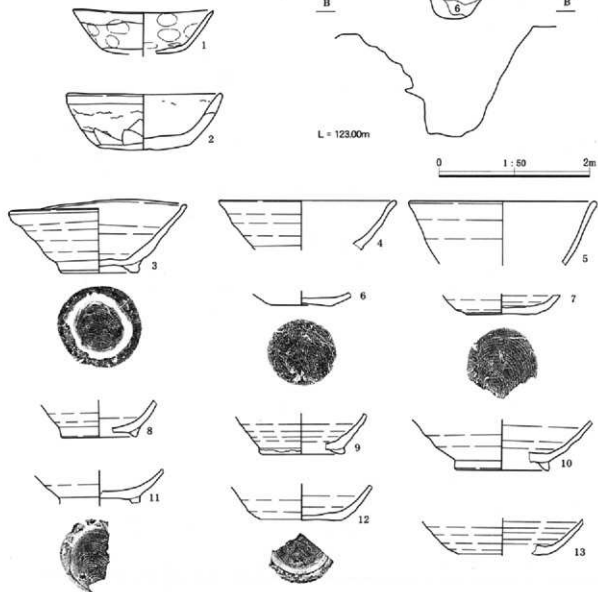
埋没状態は土層断面の観察では人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。

Ⅲ 検出した遺構と遺物

遺物は多量の土師器杯、甕、須恵器椀、甕、瓦、鉄器などが出土している。これらの出土位置は大部分が上部からであったことから井戸を廃棄するとき不要となった土器も一緒に廃棄したと見られる。

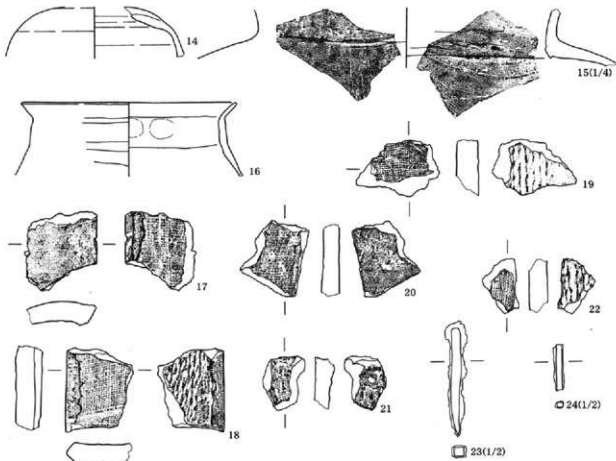
本井戸の廃棄年代は出土遺物から11世紀代に比定される。

- 1 灰黒褐色土 IVに類似、VI、VIIのブロックを10%含む。
- 2 黒褐色土 IVに類似、VIIブロックを20%と焼土粒を5%含む。
- 3 黒褐色土 2に類似、焼土粒は見られない。
- 4 黒色土 VIIブロックを10%含む。
- 5 黒褐色土 2に類似、VIIブロックを5%含む。
- 6 暗褐色土 VI、VIIの混合土。
- 7 にぶい黄褐色土 VII主体、黒褐色土ブロックを20%含む。



76図 B3号井戸 遺構図・遺物図(1)

3. 古墳時代～奈良・平安時代



77図 B3号井戸 遺物図(2)

NO. P L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	底整形の特徴	備考
1	土師器 杯	埋没土中位 1/6	口径 11.0 底径 6.6 器高 3.5	細砂粒/良好 明赤褐	口縁部上半横ナデ、下半ナデで指頭圧痕が残る。 底部はヘラ削り。	
2	土師器 杯	埋没土中位 3/4	口径 12.1 底径 7.4 器高 4.5	細砂粒/良好 赤褐	口縁部に輪痕み痕が残る。口縁部上位は横ナデ、 中位はナデ、下位はヘラ削り。底部はヘラ削り。	
3 PL52	須恵器 椀	底部付近 口縁一部欠	口径 13.6 底径 6.8 器高 5.8 台径 5.6	細砂粒/酸化焙 にぶい黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。口唇部肥厚。	内面口唇 部彫付着
4	須恵器 椀	埋没土中位 口縁部片	口径 14.6	細砂粒/還元焙 焼/灰黄褐	ロクロ整形、回転方向不明。	
5	須恵器 椀	埋没土中位 口縁部片	口径 14.6	細砂粒/還元焙 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。	
6	須恵器 椀	埋没土中位 底部	底径 4.9	粗砂粒/還元焙 焼/黒	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
7	須恵器 椀	埋没土上位 底部	底径 6.0	粗砂粒/還元焙 焼/黒	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
8	須恵器 椀	上位・底面 底部片	底径 6.4 台径 5.8	細砂粒/酸化焙 焼	ロクロ整形、回転方向不明。底部ナデ。高台は貼 付。	
9	須恵器 椀	埋没土上位 底部片	底径 6.8 台径 6.2	細砂粒/酸化焙 にぶい黄	ロクロ整形、回転方向不明。底部ナデ。高台は貼 付。	
10	須恵器 椀	埋没土中位 底～口縁片	底径 7.4 台径 7.2	細砂粒/還元焙 黄灰	ロクロ整形、回転方向不明。底部ナデ。高台は貼 付。	
11	須恵器 椀	埋没土上位 底～口縁片	底径 6.4	細砂粒/還元焙 黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。	

Ⅲ 検出した遺構と遺物

NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成色	成型形状の特徴	備考
12 PL53	須恵器 椀	底面付近 底部片	底径 6.6	細砂粒/酸化焙 土に灰層	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
13	須恵器 椀	埋没上位 底~口縁片	底径 7.0	細砂粒/酸化焙 土に灰層	ロクロ整形、回転方向不明。底部ナデ。高台は貼付。	
14	須恵器 長頸壺	埋没上位 胴部片		細砂粒/還元焙 土に灰白	ロクロ整形、回転方向不明。	
15 PL53	須恵器 甕	埋没上位 胴部~頸部片	頸径 32.0	粗砂粒/還元焙 土に灰	胴部と頸部は接合、内外面とも接合のためのナデ。	
16	土師器 甕	埋没中位 口縁部片	口径 16.8	細砂粒/良好 明赤褐色	口縁部横ナデ、頸部ナデ、胴部へう割り。	
17 PL53	土製品 丸瓦	底面付近 一部片		粗砂粒/酸化焙 土に灰	表面はへうナデ、裏面はへう割り。裏面は布目痕が残る。	
18 PL53	土製品 平瓦	埋没上位 一部片		粗砂粒/酸化焙 土に灰	表面は布目痕が残る。裏面はへうナデ。裏面は叩き痕。	
19 PL53	土製品 平瓦	埋没上位 一部片		粗砂粒/酸化焙 土に灰	表面は布目痕が残る。裏面は叩き痕。	
20 PL53	土製品 平瓦	埋没上位 一部片		粗砂粒/還元焙 土に灰	表面は布目痕が残る。裏面はへうナデ。	
21	土製品 平瓦	埋没上位 一部片		粗砂粒/酸化焙 土に灰	表面は布目痕が残る。裏面はへうナデ。	
22	土製品 平瓦	埋没上位 一部片		粗砂粒/酸化焙 土に灰白	表面は布目痕が残る。裏面は叩き痕。	
	種類	器形	出土位置	残存率	計測値	
23	鉄器	釘	埋没上位	端部片	長(6.1) 幅(1.1) 厚(0.6) 重(9.4)	PL53
24	鉄器	釘	埋没上位	中位片	長(2.5) 幅(0.5) 厚(0.4) 重(1.0)	PL53

B 4号井戸

本井戸はB-8区北寄り、X=41914~41916、Y=-73881・-73882に位置する。今回、調査した範囲は調査区を可能なまで拡張したが東半分だけであった。他遺構との重複関係は確認されなかった。

平面形態は確認面で隅丸長方形、底面が楕円形を呈する。断面形態は確認面から50cmまでが大きく開く逆円錐状、その下部は円筒状を呈す。

規模は確認面で南北2.14m×東西1.30m+α、底径0.88×0.76m、深度1.32mを測る。

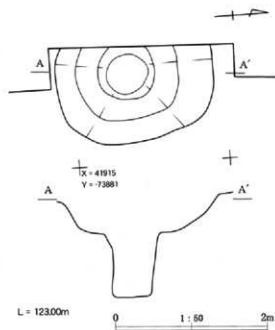
井戸は井戸枠などの設備を設けた痕跡は確認されなかったことから素掘りのまま使用していたようである。

埋没状態は土層断面の観察が底面より東側であったため断定はできないが人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。

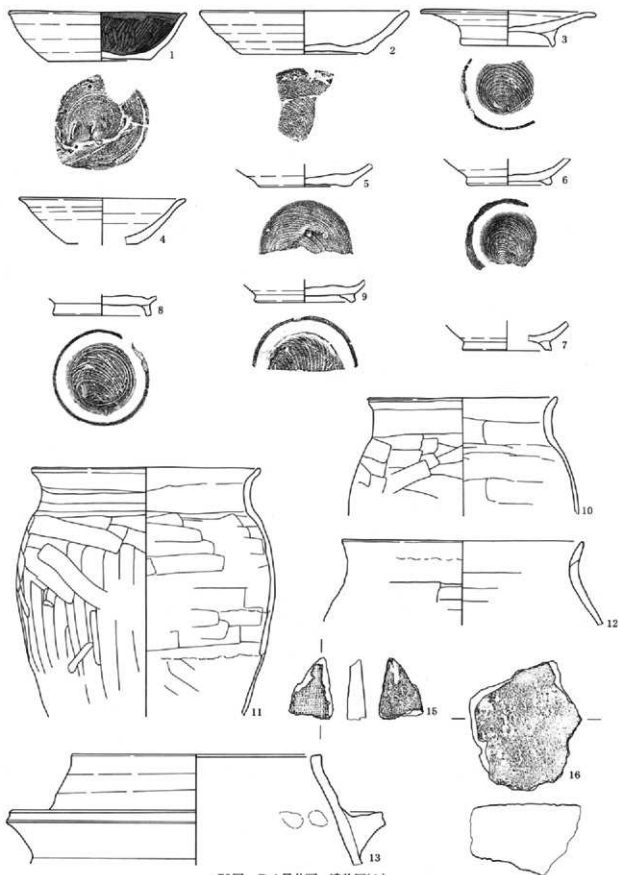
遺物は多量の土師器杯、甕、須恵器椀、甕、瓦、埴、鉄器、石製品などが出土している。これらの出土位置は大部分が上部からであったことから井戸を廃棄するとき不要となった土器と一緒に廃棄し

たとえられる。

本井戸の廃棄年代は出土遺物から11世紀代に比定される。

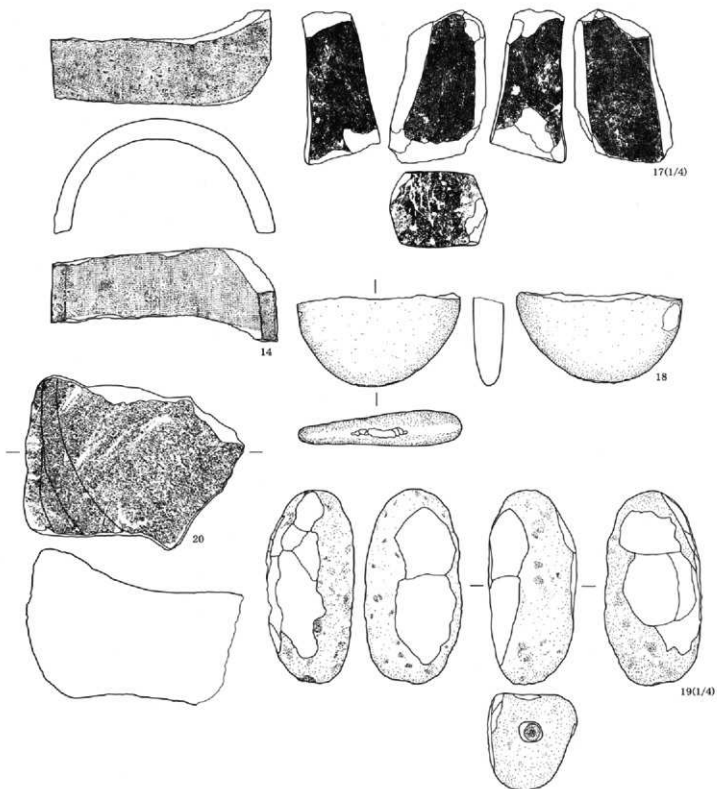


78図 B 4号井戸 遺構図



79図 B4号井戸 遺物図(1)

Ⅲ 検出した遺構と遺物



80図 B4号井戸 遺物図(2)

3. 古墳時代～奈良・平安時代

NO.	種 類	器 形	出土位置 残存率	計 測 値	胎 土/焼 成 色 調	成 整 形 の 特 徴	摘 要
1 PL53	黒色土器 杯	埋没土中位 4/5	口径 13.8 底径 8.2 器高 4.0	細砂粒/酸化焙 にぶい橙	内面黒色処理。口クロ整形、回転右回り。底部回 転糸切り。内面はヘラつき。		
2 PL54	須恵器 杯	埋没土中 1/4	口径 16.2 底径 10.0 器高 3.4	細砂粒/還元焙 灰	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。		
3 PL54	須恵器 皿	埋没土中 1/3	口径 13.6 底径 8.0 器高 2.8 台径 7.2	細砂粒/還元焙 灰白	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。		
4 PL54	須恵器 椀	埋没土中位 1/4	口径 12.8 底径 5.8 器高 3.6	細砂粒/還元焙 灰	口クロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。		
5	須恵器 底部分	埋没土中 底部分	底径 7.5	細砂粒/還元焙 灰白	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。		
6 PL54	須恵器 椀	埋没土中 底部分	底径 6.6 台径 6.2	細砂粒/酸化焙 ぎみ/黄褐	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。		
7 PL54	須恵器 椀	埋没土中位 底-口縁片	底径 6.8 台径 6.8	細砂粒/還元焙 灰黄	口クロ整形、回転方向不明。底部ナデ。高台は貼 付。		
8 PL54	須恵器 椀	埋没土中位 底部分	底径 7.6 台径 7.4	細砂粒/還元焙 灰黄	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。		
9	須恵器 椀	埋没土中 底部分	底径 7.9 台径 7.5	細砂粒/還元焙 灰黄	口クロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。		
10 PL54	土師器 甕	埋没土上位 口-胴部片	口径 14.6	細砂粒/良好 にぶい褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。		
11 PL54	土師器 甕	埋没土上位 口-胴部片	口径 17.8 胴径 20.5	細砂粒/良好 赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上位が縦方向、 中位が縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
12 PL54	土師器 甕	埋没土上位 口-胴部片	口径 18.8	細砂粒/良好 にぶい赤褐	口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナ デ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
13 PL55	須恵器 羽釜	埋没土中 口-踵片	口径 19.6 踵径 30.0	細砂粒/酸化焙 にぶい橙	口クロ整形、踵は貼付。内面に踵を貼付したとき の指痕圧痕が残る。		
14 PL55	土製品 丸瓦	埋没土中 中位片	幅 17.5 高 9.2	細砂粒/還元焙 灰	表面はヘラナデ。表面は布目痕が残る。		
15	土製品 平瓦	埋没土中 一部片		細砂粒/酸化焙 黄褐	表面は布目痕が残る。表面はヘラナデ。		
16 PL55	土製品 埴	埋没土中 一部片		細砂粒/酸化焙 にぶい橙	表面はヘラナデ。		
	種 類	器 形	出土位置/残存率	石 材	計 測 値		
17	石製品	砥石	埋没土中/一部欠	粗粒輝石安山岩	長(16.0) 幅(10.4) 厚(7.9) 重(1330)	PL55	
18	石製品	磨石	埋没土中/1/2	石英閃緑岩	長(6.7) 幅 12.9 厚 2.75 重(370)	PL55	
19	石製品	用途不明	埋没土中位/完形	二ッ岳軽石	長 22.9 幅 11.2 厚 10.3 重 1550	PL55	
20	石製品	石胆	埋没土中/一部片	粗粒輝石安山岩	長(17.2) 幅(13.8) 厚 11.8 重(2090)	PL55	

D 1号井戸

本井戸はD-6区南寄り、X=42002~42004、Y=-73860~-73864に位置する。今回、調査した範囲は南北の両側を若干欠く部分があった。他遺構との重複関係は確認されなかった。

本井戸は約4m四方を深度10cmほど整穴状に掘削し、中心部に本体を掘削している。

平面形態は周辺部の形態は明確ではないが矩形、本体は楕円形、底面はほぼ円形を呈する。断面形態は上部がやや広いがほぼ円筒形状を呈し、確認面から1.2mのところは湧水による崩落が確認された。湧水が確認された層位は総社砂層と呼称される層位である。

規模は確認面周辺部が東西4.10m、深度0.10~0.20m、本体が東西2.20m、南北1.4m+α、底径

0.50m、深度1.35mを測る。

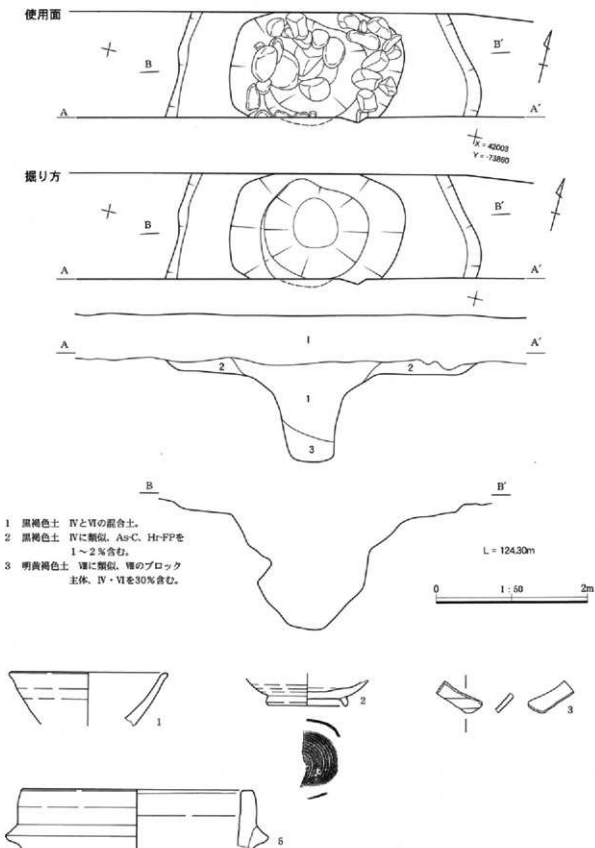
井戸は径30~50cm大の円錐を底面から地表面まで積み上げて井戸枠としている。確認面付近では積み上げた礫の崩落が見られた。井戸枠として使用した礫の中には6の多孔石などの周囲に存在したと見られる縄文時代の遺物の再利用品が見られた。

埋没状態は土層断面の観察では人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。

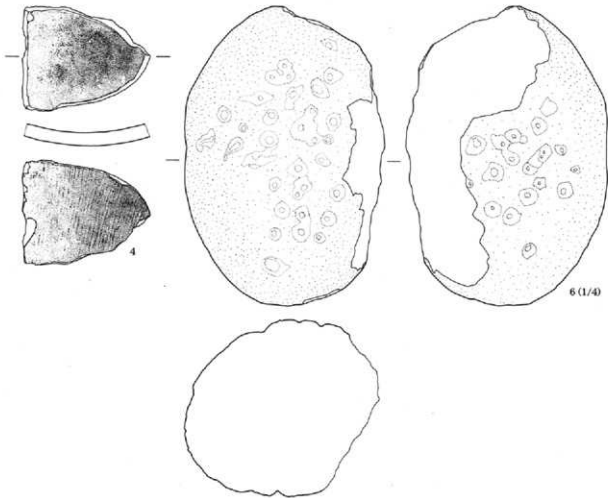
遺物は多量の須恵器椀、甕、灰輪陶器、緑釉陶器、瓦などが出土している。これらの出土位置は大部分が上部からであったことから井戸を廃棄するとき不要となった土器も一緒に廃棄したと見られる。

本井戸の廃棄年代は出土遺物から10世紀後半から11世紀代に比定される。

III 検出した遺構と遺物



81図 D1号井戸 遺構図・遺物図(1)



82図 D1号井戸 遺物図(2)

NO. PL	種 類 器 形	出土位置 残存率	計 測 値	胎 土 / 焼 成 色 調	底 盤 形 の 特 徴	備 考
1	須恵器 甕	埋設土中 口縁部片	口径 12.2	細砂粒 / 還元焙 焼 / 黒	ロクロ整形、回転方向不明。	
2 PL55	灰釉陶器 甕	埋設土中 底～口縁片	底径 6.4 台径 6.0	微砂粒 / 還元焙 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	大原2号 甕式別
3	緑釉陶器 甕	埋設土中 口縁小片		微砂粒 / 還元焙 灰	外面へう割り、内面へう磨き。	
4 PL56	須恵器 甕	埋設土中 胴部小片		細砂粒 / 還元焙 灰	縦に転用。内外面とも使用か。外面に朱塗が残る。	
5	須恵器 羽釜	埋設土中 口縁部片	口径 16.8 跨径 20.8	細砂粒・褐色粒 酸化焙 / 黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。跨は貼付。	
	種 類	器 形	出土位置 / 残存率	石 材	計 測 値	
6	石製品	多孔石	埋設土中 / 一部欠	重粒輝石安山岩	長 31.4 幅 (21.2) 厚 18.6 重(1420)	PL56

Ⅲ 検出した遺構と遺物

(3) 溝

古墳時代から奈良・平安時代に比定される溝はA区4条、B区7条、C区2条、D区9条の22条が確認された。このうち自然礫路とみられるものはA3号溝、A8号溝、D5号溝、D6号溝などである。このほかでも小規模なものは人工的なものかどうか不明である。

溝の年代は埋没土の状態からA8号溝、C1号溝、C2号溝、D9号溝、D10号溝はAs-Cが堆積しており古墳時代前期に比定される。D1号溝、D2号溝ではHr-F Aが堆積していることから古墳時代中期から後期初頭に比定される。このほかの溝は埋没土がIV層に類似していることから古墳時代後期から奈良・平安時代に比定される。

A1号溝

- 1 明黄褐色土 V G(r-FA)と同様。
- 2 黒褐色土 VIに類似、As-Cを3%含む。

A3号溝

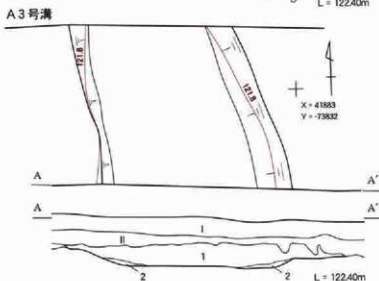
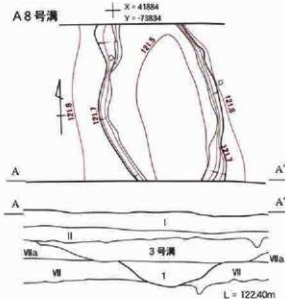
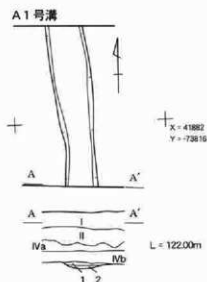
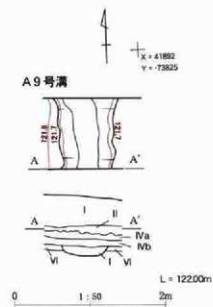
- 1 黒褐色土 IVに類似、As-C・Hr-FPを5%含む。
- 2 黒褐色土 Iに類似、1より軽石が少ない。

A8号溝

- 1 黒色土 VIIに類似、礫粒を3%含む。

A9号溝

- 1 黒褐色土 VIIに類似、下部にAs-Cを30%含む。



83図 A1号溝・A3号溝・A8号溝・A9号溝 遺構図

3. 古墳時代～奈良・平安時代

B1号溝

本溝はB-1区中程のX=41949、Y=-73877からB-4区の中程のX=41945、Y=-73890に位置する。B-1区とB-4区の間は約8mほどの間隔があるが、直線上に位置し、断面形態が同じであることから同一溝と断定した。遺構との重複関係はB-1区でB5号・6号土坑、B-4区でB5号住居、B7号土坑との重複が確認された。新旧関係はB5号土坑より本溝の方が古い、他の遺構よりは新しい。

平面形状はほぼ直線的で、断面形態はV字状を呈

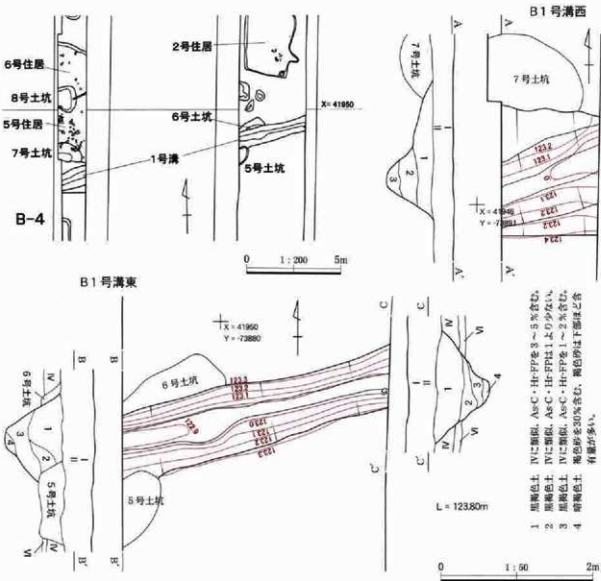
するが、B-4区では上部が崩落したのかやや広がりが見られる。

規模は全長13m以上、確認面での幅1.60～1.80m、底面0.20～0.25m、深度0.62～0.78mを測る。

埋没状態は土層断面の観察でほぼ水平な堆積状態であることから自然埋没であるとみられる。

遺物は土師器、須恵器などの小片が若干出土しているが図化可能なものは見られなかった。

本溝の年代は重複する遺構や埋没土層から古代末に比定される。



84図 B1号溝 遺構図

Ⅲ 検出した遺構と遺物

B3号溝

本溝はB-2区中程のX=41972、Y=-73877からB-5区の北寄りのX=41975、Y=-73892に位置する。B-2区とB-5区の間は約8mほどの間隔があるが、直線上に位置し、断面形態が同じであることから同一溝と断定した。他遺構との重複関係はB-2区で近代の土坑との重複が確認されたが、B-4区では他遺構との重複は確認されなかった。新旧関係は本溝の方が古い。

平面形状はほぼ直線的で、断面形態はU字状を呈

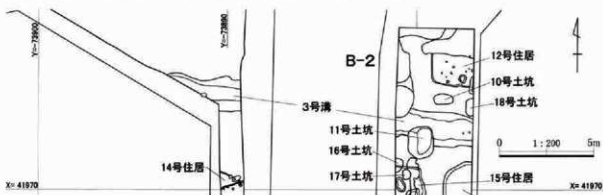
するが、B-4区では北側の崩落が見られる。

規模は全長13m以上、確認面での幅1.55～1.88m、底面0.63～1.05m、深度0.50～0.80mを測る。

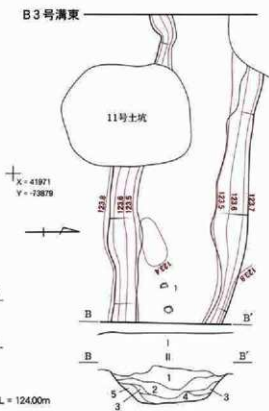
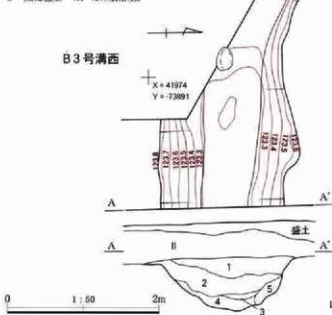
埋没状態は土層断面の観察でレンズ状の堆積状態であることから自然埋没であるとみられる。

遺物は土師器杯、須恵器椀、婁などが若干出土している。

本溝の年代は出土した遺物から10世紀後半以降に比定される。

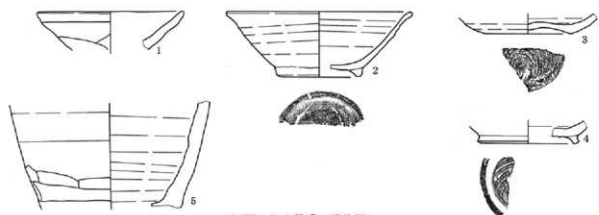


- 1 暗褐色土 IVに類似、IVよりAs-C、Hr-FPの含有量が少ない。
- 2 黒褐色土 Iに類似。
- 3 暗褐色土 Iに類似、VI、VIIブロックを10%含む。
- 4 黒褐色土 IVに類似、VI、VII、VIIIブロックを10%含む。
- 5 黒褐色土 VI、VIIの崩落土。



85図 B3号溝 遺構図

3. 古墳時代～奈良・平安時代



86図 B3号溝 遺物図

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	底盤形の特徴	概要
1	土師器 碗	+30 口縁部片	口径 11.4	粗砂粒・褐色粒 良好/明赤帯	口縁部横ナデ、口縁部は上半がナデ、下半がヘウ割り。高台が貼付か。	
2	須恵器 碗	埋没土中 1/4	口径 14.4 底径 7.0 器高 5.2 台径 6.0	粗砂粒/微化胎 にぶい黄帯	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
3	須恵器 杯	埋没土中 底部片	底径 6.8	細砂粒/還元胎 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
4	須恵器 碗	埋没土中 底部片	底径 7.7 台径 7.2	細砂粒/還元胎 黄灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。高台は貼付。	
5	須恵器 壺	埋没土中 胴部下位片		粗砂粒/還元胎 灰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部下位に回転ヘウ割り。	

B4号溝

本溝はB-7区中程のX=41929、Y=-73878からB-4区の南寄りのX=41930、Y=-73890に位置する。B-4区とB-7区の間は約8mほどの間隔があるが、直線上に位置し、断面形態が同じであることから同一溝と断定した。他遺構との重複関係はB-7区でB2号溝、土坑、B-4区ではB2号溝、B3号住居との重複が確認された。新旧関係はB2号溝より本溝の方が古いが、土坑、B3号住居よりは新しい。

平面形状はほぼ直線的で、断面形態は上半が逆台

形状下半がV字状を呈するが、B-4区では南側上半は後世の掘伸で一部欠く。

規模は全長13m以上、確認面での幅2.60～2.80m、底面0.15～0.28m、深度0.80～0.98mを測る。

埋没状態は土層断面の観察でレンズ状の堆積状態であることから自然埋没であるとみられる。

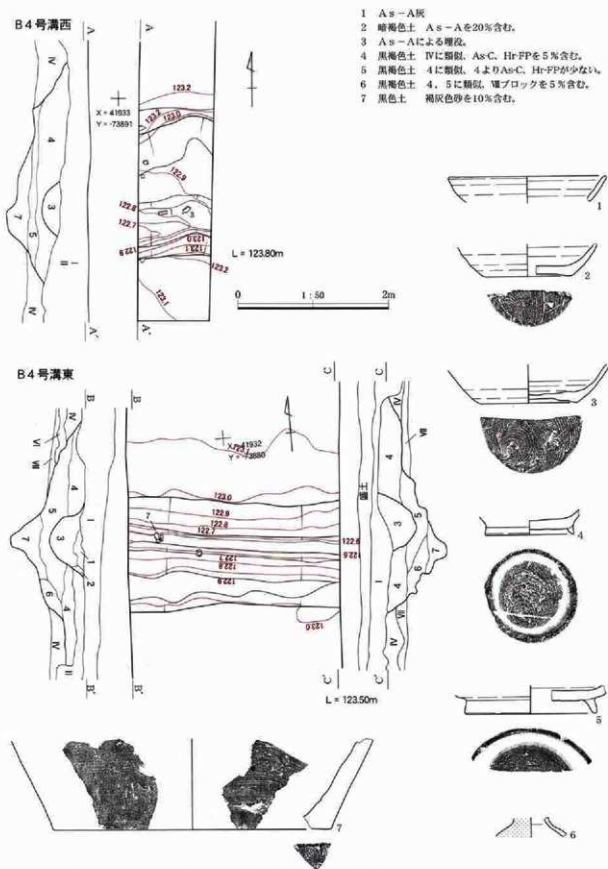
遺物は土師器杯、須恵器碗、甕、灰釉陶器などが若干出土している。

本溝の年代は出土した遺物から10世紀後半以降に比定される。

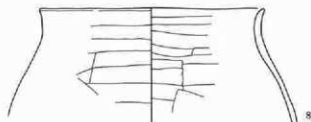


87図 B4号溝 遺構図(1)

Ⅲ 検出した遺構と遺物



88図 B4号溝 遺構図(2)・遺物図(1)



89図 B4号溝 遺物図(2)

NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成色	底盤形状の特徴	備考
1	須恵器 椀	+40 口縁部片	口径 12.2	細砂粒/還元焰 黄灰	クロコ整形、回転右回りか。	
2	須恵器 椀	埋没土中 底~口縁片	底径 6.6	細砂粒/還元焰 黄灰	クロコ整形、回転右回り。底部回転未切り。	
3	須恵器 杯	底面 底~口縁片	底径 7.6	細砂粒/還元焰 黄灰	クロコ整形、回転右回り。底部回転未切り。	
4 PL56	須恵器 椀	埋没土中 底面	底径 6.8 台径 6.8	細砂粒/還元焰 灰白	クロコ整形、回転右回り。底部回転未切り。高台は貼付。	
5	須恵器 椀	埋没土中 底面片	底径 10.2 台径 10.0	細砂粒/還元焰 灰白	クロコ整形、回転右回りか。底部切り難し技法はナデのため不明。高台は貼付。	
6	灰輪陶器 小瓶	埋没土中 胴部片		微砂粒/還元焰 にぶい黄	クロコ整形、回転方向不明。施釉方法不明。	
7	須恵器 甕	+25 胴部下位片	底径 21.8	粗砂粒/還元焰 黄灰	外面は回転ヘラ削り、内面はナデ。	
8	土師器 甕	埋没土中 口~胴部片	口径 17.6	細砂粒/良好 橙	口縁部から胴部は横ナデ、胴部上段は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

B5号溝

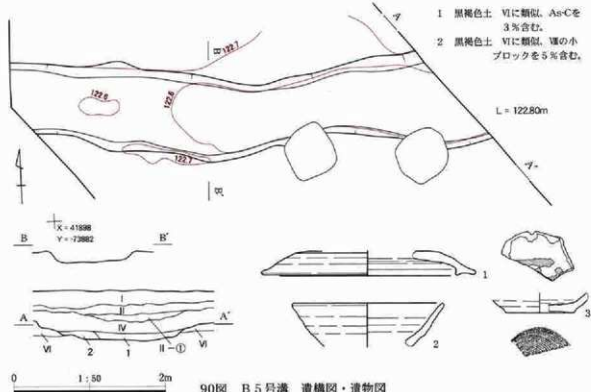
本溝はB-8区の南寄り、X=41898~41900、Y=-73875~73882に位置する。他遺構との重複関係は土坑と重複が確認された。新旧関係は本溝の方が古い。平面形状は若干屈曲するがほぼ直線形である。断面形態は傾斜の緩い逆台形状を呈する。

規模は全長6.5m以上、確認面での幅0.80~1.35m、底面幅0.65~1.06m、深度15cm前後を測る。

埋没状態は土層断面の観察で自然埋没である。

遺物は土師器、須恵器椀、甕などが出土している。

本溝の年代は出土した遺物から10世紀代以降に比定される。



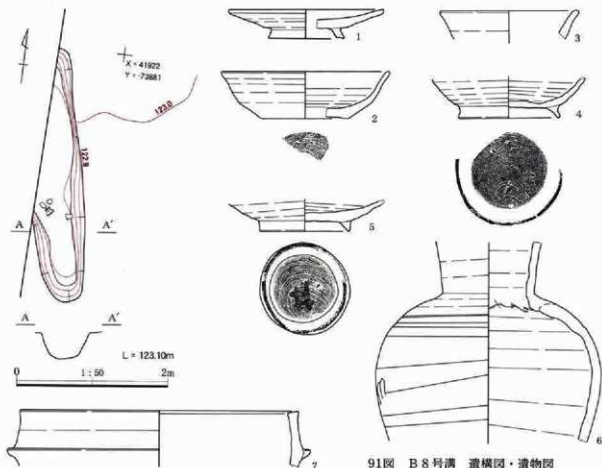
90図 B5号溝 遺構図・遺物図

Ⅲ 検出した遺構と遺物

B5号溝

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の 特徴	摘要
1	須志器 杯蓋	埋没土中 口縁部片	口径 16.6	細砂粒/還元焰 黄灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転ヘタ削り。内面カエリは引き出し。	
2	須志器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 11.8	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。	
3	須志器 椀	埋没土中 底部片	底径 5.3	細砂粒/還元焰 黄灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転赤切り。	内面に墨 痕あり。

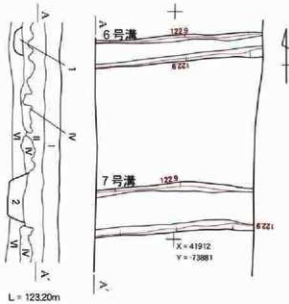
B8号溝



91図 B8号溝 遺構図・遺物図

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の 特徴	摘要
1 PL56	須志器 皿	埋没土中 1/3	口径 12.2 高径 5.6 器高 2.3 台径 6.0	細砂粒/還元焰 黄灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部切り難し技法はナデのため不明。高台は貼付。	
2 PL57	須志器 椀	埋没土中 1/2	口径 13.0 高径 7.0 器高 3.7	細砂粒/酸化焰 にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転赤切り。	
3 PL57	須志器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 10.6	細砂粒/酸化焰 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。	外面に漆 付着。
4 PL57	須志器 椀	埋没土中 1/3	底径 7.8 台径 7.6	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転赤切り。高台は貼付。	
5 PL57	須志器 椀	埋没土中 底部	底径 7.3 台径 7.0	細砂粒/酸化焰 にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転赤切り。高台は貼付。	底部に「井」 の墨書。
6 PL57	須志器 長胴壺	表面 胴~胴部片	頸径 7.2 胴径 18.0	細砂粒/還元焰 灰	ロクロ整形、回転右回りか。頸部と胴部は二段接合。胴部中位以下は回転ヘタ削り。	
7	須志器 羽釜	埋没土中 口縁部片	口径 22.0 胴径 24.0	粗砂粒/酸化焰 焼/黒	ロクロ整形、回転方向不明。器は貼付。	

B 6号溝・B 7号溝

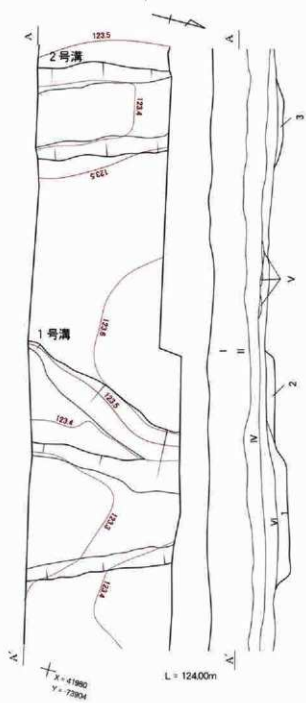


B 6号溝・B 7号溝
 1 IVに類似、As-C、Hr-FPを5%含む。
 2 IVに類似、As-C、Hr-FPを5%含む。

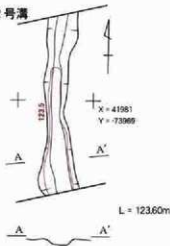
C 1号溝・C 2号溝

1 にぶい黄褐色土 ⅡとⅢの混合土。
 2 にぶい黄褐色土 Ⅱ主体、Ⅲが20～30%混入。
 3 黒褐色土 Ⅵに類似、下部はAs-Cが70～80%を占める。

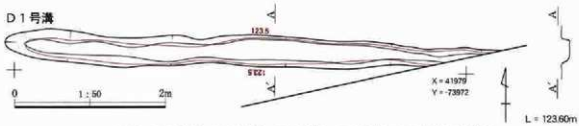
C 1号溝・C 2号溝



D 2号溝



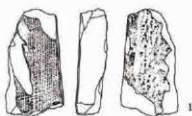
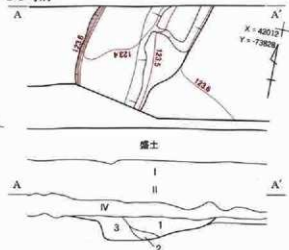
D 1号溝



92図 B 6号溝・B 7号溝・C 1号溝・C 2号溝・D 2号溝 遺構図

III 検出した遺構と遺物

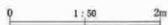
D5号溝



D5号溝

- 1 ぶい黄褐色土 IVに類似、Hr-PPを10%含む。
 2 暗褐色土 1に類似、VIのブロックを20%含む。
 3 ぶい黄褐色土 1に類似、Hr-PPを3%含む。

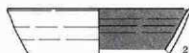
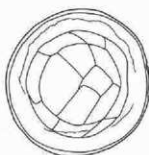
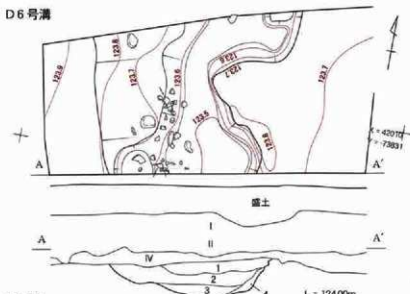
L = 12400m



93図 D5号溝 遺構図・遺物図

NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成	成型	成形の特徴	備考
1	土製品	埋没土中		色調			
PL57	平瓦	一部片		細砂粒/酸化磁		表面は布目肌、裏面は叩き肌。	

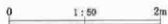
D6号溝



D6号溝

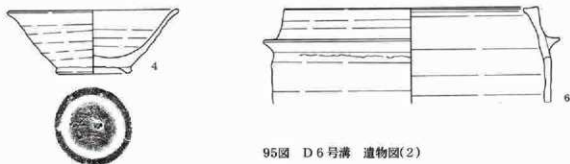
- 1 黒褐色土 IVに類似、VIが混入、φ2~5mmの、Hr-PP・As-Cを3%含む。
 2 黒褐色土 1に類似、1よりHr-PP・As-Cが少ない。
 3 黒褐色土 1に類似、VIのブロックを10%含む。
 4 黒色土 VIの崩落土。

L = 12400m



94図 D6号溝 遺構図・遺物図(1)

3. 古墳時代～奈良・平安時代



95図 D6号溝 遺物図(2)

NO. P.L.	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の特徴	備考
1 PL57	土師器 杯	埋没土上位 完形	口径 11.2 底径 6.4 器高 3.6	粗砂粒/良好 にぶい赤褐色	口縁部に輪轍み痕が残る。口縁部上位は横ナゲ、 中位はナゲ、下位と底部はヘラ削り。	
2	黒色土器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 14.3	細砂粒/酸化塩 褐色	内面黒色処理。口縁部整形、回転右回りか。	
3 PL58	須恵器 椀	埋没土中 1/4	口径 12.3 底径 6.5 器高 4.6 台径 6.2	細砂粒・三角礫 酸化塩/灰青	口縁部整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。	
4 PL58	須恵器 椀	+30 1/3	口径 13.2 底径 5.9 器高 5.0 台径 5.4	細砂粒/酸化塩 明黄褐色	口縁部整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台 は貼付。	
5 PL58	須恵器 羽釜	+20 口縁～胴片	口径 16.1 蹄径 21.4	粗砂粒/酸化塩 にぶい黄褐色	口縁部整形、回転方向不明。蹄は貼付。	
6 PL58	須恵器 羽釜	+30 口縁～胴片	口径 20.0 蹄径 23.4	粗砂粒/酸化塩 灰青	口縁部整形、回転方向不明。蹄は貼付。	

D4号溝



D4号溝

1 黒褐色土 IVに類似、VIブロックを20%含む。

D7号溝

1 褐色土 IIに類似。

D8号溝

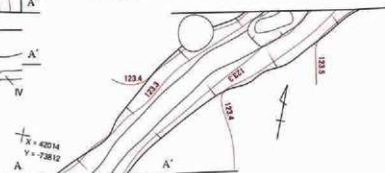
IVa 褐灰色土 IVと同様であるが約1~2mmの黒色砂粒を5%含む。

IVc 黄褐色土 黒色砂を含む、洪水堆積土か。

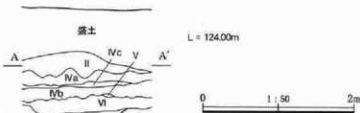
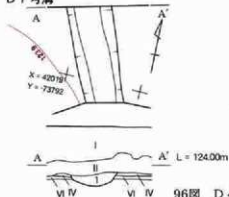
IVb 褐灰色土 IVと同様。

1 A=C主体、黒色土を30%含む。

D8号溝



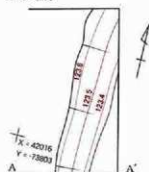
D7号溝



96図 D4号溝・D7号溝・D8号溝 遺構図

Ⅲ 検出した遺構と遺物

D 9号溝



- D 9号溝
- 1 黒褐色土 VIに類似、As-Cを10%含む。
 - 2 黒褐色土 Iに類似、As-Cを20%含む。
 - 3 As-C主体、黒色土を20%含む。

L=124.00m

D 10号溝



- D 10号溝
- 1 As-C主体、黒色土を30%含む。

0 1:50 2m

97図 D 9号溝・D10号溝 遺構図

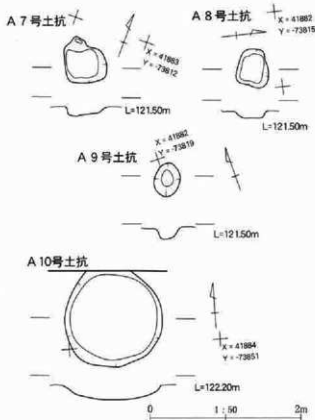
(4)土坑

古墳時代から奈良平安時代に相当する土坑はA区4基、B区17基、C区1基、D区3基である。

A区の土坑は確認面から底面までの深度が浅いためか遺物などがほとんど残存しておらず、性格や年代などについて明らかにすることはできなかった。

B区の土坑は比較的残存状態は良好であったが、遺物が出土しているものは少ない。その中でB22号土坑では土師器甕の上半が確認面より出土している。この土坑は土層断面の観察では柱穴の可能性もみられることから掘立柱建物の一部の可能性もある。同じくB30号土坑は重複するB21号住居で大部分を欠き、調査できた範囲が限られていたため土坑としたが底面全体が平坦であることなどから住居の可能性もみられる。

D区ではD10号土坑をVII層上面で確認した。この土坑は埋没土中にAs-Cを含んでいることから古墳時代前期に比定した。



98図 A 7号～A10号土坑 遺構図

3. 古墳時代～奈良・平安時代



B1号土坑

- 1 黒褐色土 VI主体、雫ブロックを10%含む。
2 黒褐色土 1に類似、雫ブロックを20%含む。

B2号土坑

- 1 黒褐色土 VI主体、雫ブロックを10%含む。
2 黄褐色土 VIと雫ブロックの混泥土。

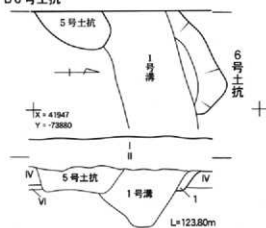


B3号土坑

- 1 暗褐色土 IVに類似、雫ブロックを20%含む。



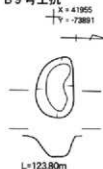
B6号土坑



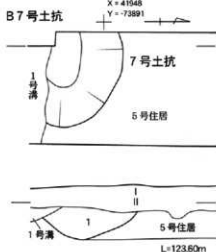
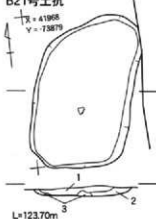
B6号土坑

- 1 黒褐色土 IVに類似、As-C、Hr-FPを5%含む。

B9号土坑



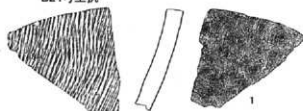
B21号土坑



B7号土坑

- 1 褐色土 IV主体、VIブロックを20%含む。

B21号土坑



B21号土坑

- 1 黒褐色土 VIに類似、炭化物を2～3%含む。
2 黒褐色土 1に類似、雫ブロックを5%含む。
3 にぶい黄褐色土 雫ブロック主体。



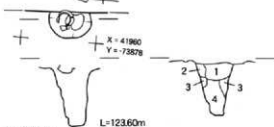
B21号土坑

NO.	種類	出土位置	計測値	土質/焼成色調	成型の特徴	摘要
1	須忠器 変 胴部片	埋没土中		細砂粒/還元焰 灰黄	外面は叩き痕、内面のアチ貝板はナデで脈跡が僅かに残る。	

99図 B1号～B4号・B6号・B7号・B9号・B21号土坑 遺構図・遺物図

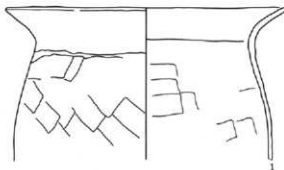
III 検出した遺構と遺物

B22号土坑



B22号土坑

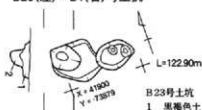
- 1 灰黄褐色土 VI主体、燻ブロックを30%含む。
- 2 におい黄褐色土 燻ブロック主体、黒色土を20%含む。
- 3 におい黄褐色土 燻ブロック主体、黒色土を10%含む。
- 4 暗褐色土 IV・VIの混合土、燻ブロックを10%含む。



B22号土坑

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形状の特徴	摘要
1 PL58	土師器 壺	埋没土上位 口~胴上半	口径 21.9 胴径 20.5	細砂粒/良好 明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部は横・斜めのヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

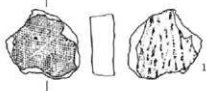
B23(左)・24(右)号土坑



B23号土坑

- 1 黒褐色土 VIに類似、As・C・Hr-FPを5%含む。
- 2 黒褐色土 1に類似、1より軽石が少ない。

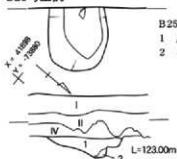
24号土坑



B24号土坑

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形状の特徴	摘要
1 PL58	土製品 平瓦	埋没土中 一部片		粗砂粒/還元焰 灰白	表面は布目痕、裏面は叩き痕が残る。	

B25号土坑



B25号土坑

- 1 黒褐色土 VIに類似、As・C・Hr-FPを5%含む。
- 2 におい黄褐色土 燻ブロック主体。



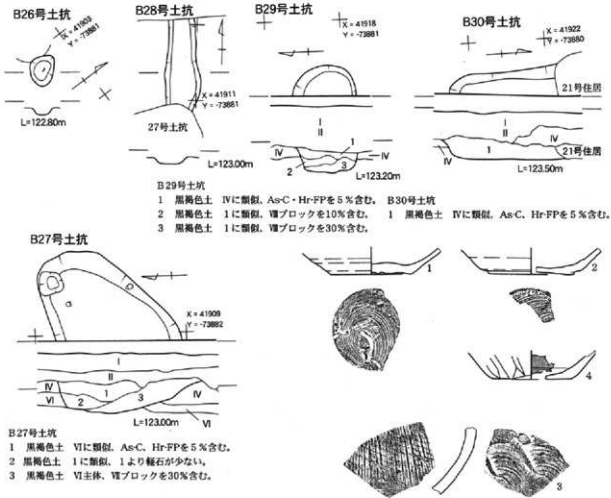
B25号土坑

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形状の特徴	摘要
1	須恵器 椀	埋没土中 口縁部片	口径 10.9	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。	
2	須恵器 壺	埋没土中 胴部片		細砂粒/還元焰 灰黄	外面は叩き痕、内面のアテ具痕はナデで痕跡不明。	

100図 B22号～B25号土坑遺構図・遺物図

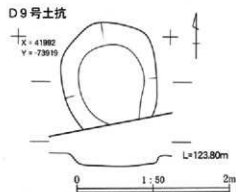
0 1:50 2m

3. 古墳時代～奈良・平安時代



B27号土坑

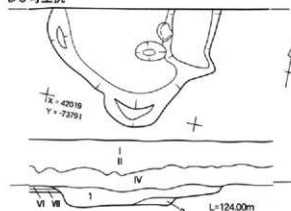
NO.	種別 P.L.	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形状の特徴	摘要
1	須恵器 甕	埋設土中 底～口縁片	底径 6.8	細砂粒/還元胎 灰白	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。	
2	須恵器 甕	埋設土中 底～口縁片	底径 6.4	細砂粒/還元胎 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3	須恵器 甕	埋設土中 胴部片		細砂粒/還元胎 灰	外面は明き痕、内面はアテ具痕が残る。	
4	土師器 甕	埋設土中 底部付近片	底径 6.0	細砂粒/良好 褐	外面はヘラ削り、内面はナデ。	内面に煤付着



101図 B26号～B30号土坑・C12号土坑・D9号土坑 遺構図・遺物図

III 検出した遺構と遺物

D8号土坑



D8号土坑

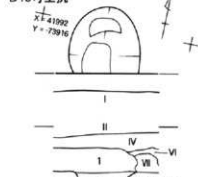
- 1 褐灰色土 IV主体、VIブロックを30%含む。
2 褐灰色土 Iに類似、VI小ブロックを10%含む。



D8号土坑

NO.	種別	出土位置	計面積	胎土/焼成色調	成型形の特徴	備考
1	須恵器 碗	埋没土中 口縁部片	口径 12.8	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。	
2	須恵器 碗	埋没土中 底~口縁片	底径 8.0 口径 7.6	粗砂粒/還元焰 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転車切り。高台は貼付。	
3	土師器 甕	埋没土中 底~胴部片	底径 3.5	細砂粒/良好 によい赤褐	外面はへつ割り、内面はナダ。	

D10号土坑



D10号土坑

- 1 黒褐色土 VIに類似、VIIが侵入。
2 黒褐色土 VIに類似、VIIブロックを10%含む。

0 1:50 2m



102図 D8号土坑・D10号土坑 遺構図・遺物図

1表 古墳時代~奈良・平安時代土坑一覧

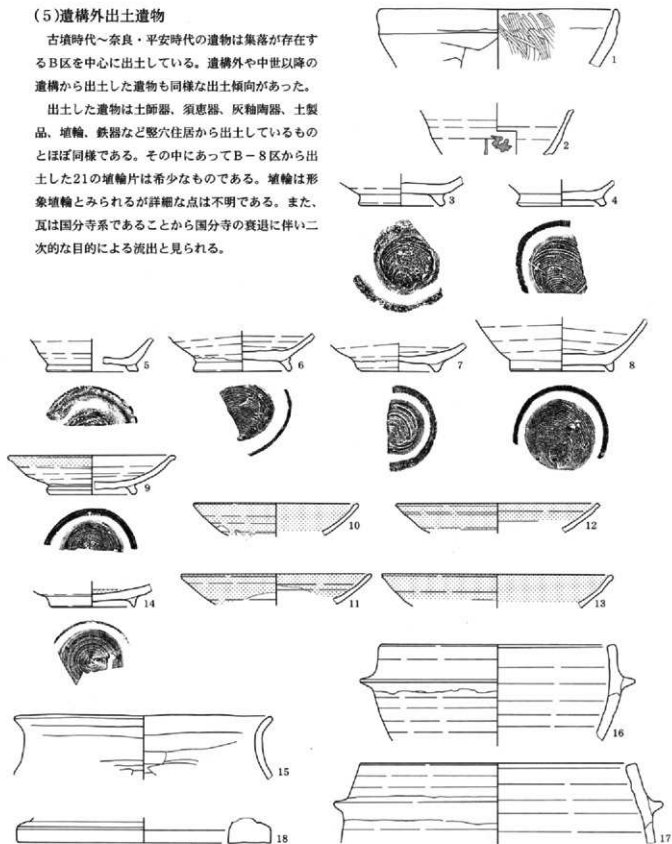
土坑NO.	位置		新しい遺構	古い遺構	形態	規模(単位cm)			備考
	X	Y				長径	短径	深度	
A7	41882	73812			矩形	63	53	15	
A8	41881	73814			矩形	48	43	10	
A9	41881	73818			楕円形	45	35	16	
A10	41883	73851			円形	138	132	17	
B1	41938	73879			円形	40	35	25	
B2	41940	73879			楕円形	75	48	30	
B3	41942	73879			矩形	65	38	22	
B4	41933	73879			楕円形	90	75	23	
B6	41948	73879	B1号溝		矩形	133	80	30	
B7	41947	73889	B1号溝	B5号住居	楕円形	(125)	(110)	42	
B9	41854	73888			円形	79	49	28	
B21	41965	73877			矩形	204	132	13	
B22	41960	73877			円形	56	(35)	77	確認面で土師器甕
B23	41900	73878	B24号土坑		楕円形	(57)	56	30	
B24	41900	73878		B23号土坑	楕円形	52	37	19	
B25	41897	73880			楕円形	86	73	25	
B26	41902	73880			楕円形	36	28	9	
B27	41909	73880		B23号住居・B28号土坑	楕円形	(188)	(142)	40	
B28	41910	73880	B7号溝・B27号土坑		溝状	114	48	8	
B29	41917	73881			円形	85	42	32	
B30	41920	73879	B21号住居		矩形	(142)	43	30	住居の可能性有り
C12	41978	73910			楕円形	177	162	22	
D8	42018	73788			楕円形	225	(169)	28	
D9	41990	73917		D10号溝	楕円形	(138)	128	19	
D10	41991	73914			楕円形	(88)	94	23	

規模値Yは全て負の値であるため「-」は省略してある。

(5) 遺構外出土遺物

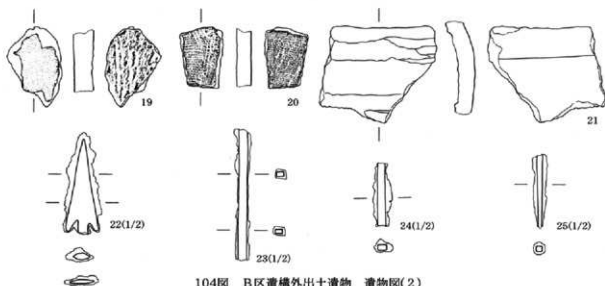
古墳時代～奈良・平安時代の遺物は集落が存在するB区を中心に出土している。遺構外や中世以降の遺構から出土した遺物も同様な出土傾向があった。

出土した遺物は土師器、須恵器、灰輪陶器、土製品、埴輪、鉄器など整穴住居から出土しているものとはほぼ同様である。その中においてB-8区から出土した21の埴輪片は希少なものである。埴輪は形象埴輪とみられるが詳細な点は不明である。また、瓦は国分寺系であることから国分寺の衰退に伴い二次的な目的による流出と見られる。



103図 B区遺構外出土遺物 遺物図(1)

Ⅲ 検出した遺構と遺物

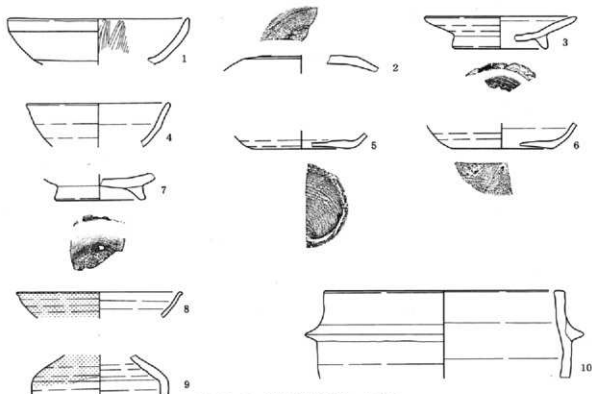


104図 B区遺構外出土遺物 遺物図(2)

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計 画 値	胎 土/焼 成 色 調	成 型 形 の 特 徴	備 考
1	黒色土器 鉢	B-4区 口縁部片	口径 18.6	粗砂粒/良好 褐色	内面黒色処理が二次焼成を受けている。口縁部上半は横ナデ、下半はヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
2	須恵器 碗	B-8区 口縁部片		細砂粒/還元焰 灰青	ロクロ整形、回転方向不明。	外面に墨書
3	須恵器 碗	B-5区 底~口縁片	底径 6.8 台径 6.7	粗砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
4	須恵器 碗	B-8区 底部片	底径 6.7 台径 6.0	粗砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
5	須恵器 碗	B-2区 底~口縁片	底径 6.9 台径 7.0	粗砂粒/酸化焰 性/灰青	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
6	須恵器 碗	B-4区 底~口縁片	底径 7.3 台径 7.2	細砂粒/還元焰 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
7	須恵器 碗	B-5区 底~口縁片	底径 7.2 台径 5.8	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
8	須恵器 碗	B-7区 底~口縁片	底径 8.0 台径 7.6	細砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
9	灰軸陶器 皿	B-2区 1/4	口径 12.6 底径 6.8 器高 3.1 台径 6.4	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ナデ。高台は貼付。施軸方法は刷毛塗り。	光ヶ丘1号窯式期
10	灰軸陶器 皿	B-4区 口縁部片	口径 12.8	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は漬け掛けか。	大原2号窯式期
11	灰軸陶器 皿	B-4区 口縁部片	口径 14.7	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は漬け掛けか。	大原2号窯式期
12	灰軸陶器 皿	B-2区 口縁部片	口径 15.6	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は漬け掛けか。	大原2号窯式期
13	灰軸陶器 碗	B-4区 口縁部片	口径 17.8	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は漬け掛けか。	大原2号窯式期
14	灰軸陶器 段皿	B-8区 底部	底径 7.4 台径 6.5	微砂粒/還元焰 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ナデ。高台は貼付。施軸方法は不明。	凡石2号窯式期
15	土師器 蓋	B-4区 口縁部片	口径 20.0	細砂粒/良好 に濃い橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
16	須恵器 羽釜	B-1区 口~胴片	口径 18.2 口径 21.6	細砂粒/酸化焰 灰青	ロクロ整形、回転方向不明。器は貼付。	
17	須恵器 羽釜	B-6区 口~胴片	口径 21.4 口径 25.8	細砂粒/酸化焰 に濃い黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。器は貼付。	
18	須恵器 飯	B-1区 底部片	底径 20.0	細砂粒/酸化焰 に濃い黄	ロクロ整形、回転方向不明。	
19	土製品 平瓦	B-5区 一部片		細砂粒/還元焰 浅黄	表面は布目痕、裏面は叩き痕が残る。	
20	土製品 平瓦	B-8区 一部片		細砂粒/酸化焰 灰青	表面は布目痕、裏面はヘラナデ。	

3. 古墳時代～奈良・平安時代

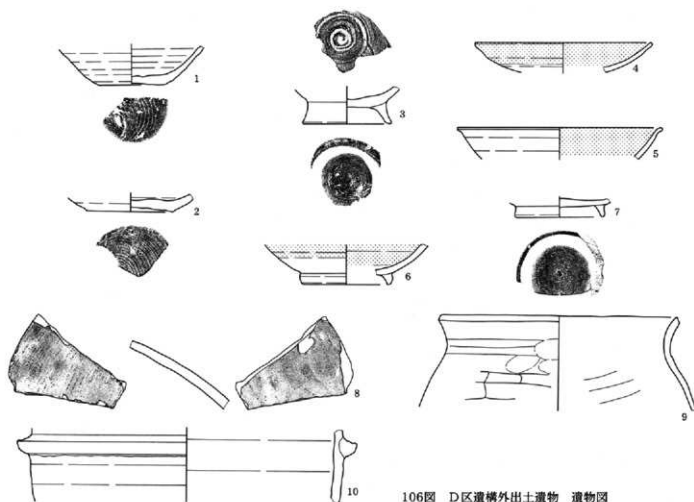
NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成	成型形の特徴	摘要
21	埴輪 形象	B-8区 一部片		細砂粒/良好 にぶい黄緑	詳細不明。	
	種類	器形	出土位置	残存率	計測値	
22	鉄器	鏝	B-4区		根部	長(5.4) 幅(2.05) 厚(0.7) 重(7.5) PL60
23	鉄器	鏝	B-4区		茎中位片	長(7.0) 幅(0.8) 厚(0.6) 重(6.0) PL60
24	鉄器	鏝	B-4区		茎中位片	長(3.4) 幅(1.0) 厚(0.7) 重(3.2) PL60
25	鉄器	鏝	B-4区		端部片	長(3.9) 幅(0.65) 厚(0.7) 重(2.0) PL60



105図 C区遺構外出土遺物 遺物図

NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成	成型形の特徴	摘要
1	土師器 杯	C-4区 口縁部片	口径 14.2 底径 10.2	細砂粒/軟質 明焼	口縁部は上半が横ナゲ、下半はヘラ削りであるが、摩耗のため単位不明。内面は放射状暗文が施文。	
2	須恵器 杯	C-2区 天井部片		細砂粒/還元縮 灰	ロクロ整形、回転右回りか。天井部は回転ヘラ削り。	
3	須恵器 皿	C-1区 1/5 口縁部片	口径 11.7 底径 7.3 器高 2.5 台径 7.1	細砂粒/還元縮 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。高台は貼付。	
4	須恵器 椀	C-2区 口縁部片	口径 11.0	細砂粒/酸化縮 焼/灰黄焼	ロクロ整形、回転方向不明。	
5	須恵器 杯	C-2区 底部片	底径 7.4	細砂粒/還元縮 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
6	須恵器 杯	C-2区 底部片	底径 8.0	細砂粒/還元縮 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
7	須恵器 椀	C-2区 底部片	底径 6.8 台径 6.6	細砂粒/還元縮 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部回転糸切り。高台は貼付。	
8	灰輪陶器 椀	C-2区 口縁部片	口径 12.8	微砂粒/還元縮 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は漬け掛けか。	大塚2号 壺式期
9	灰輪陶器 小瓶	C-2区 胴部片		微砂粒/還元縮 黄灰	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法は不明。	
10	須恵器 羽釜	C-5区 口~胴部片	口径 17.6 跨径 22.0	粗砂粒/酸化縮 浅黄	ロクロ整形、回転方向不明。罫は貼付。	

Ⅲ 検出した遺構と遺物



106図 D区遺構外出土遺物 遺物図

NO. P L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の特徴	備考
1 PL60	須忠器 椀	D-5区 底-口縁片	底径 5.3	細砂粒/酸化磁 黒/黒	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
2	須忠器 椀	D-8区 底部片	底径 7.0	細砂粒/還元磁 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3 PL61	須忠器 椀	D-6区 底部	底径 6.3 台径 6.8	細砂粒/酸化磁 にぶい黄緑	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ナデ。高台は 貼付。	
4	灰輪陶器 皿	D-5区 口縁部片	口径 13.6	微砂粒/還元磁 灰黄	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は刷毛塗り か。	光ヶ丘1 号密式期
5	灰輪陶器 椀	D-5区 口縁部片	口径 15.8	微砂粒/還元磁 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施軸方法は刷毛塗り か。	光ヶ丘1 号密式期
6	灰輪陶器 椀	D-5区 底-口縁片	底径 7.7 台径 6.4	微砂粒/還元磁 灰白	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。施軸方 法は不明。	大塚2号 密式期
7 PL61	灰輪陶器 椀	D-5区 底部片	底径 7.1 台径 6.9	微砂粒/還元磁 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ナデ。高台は 貼付。施軸方法不明。	大塚2号 密式期
8	須忠器 壺	D-8区 胴部片		細砂粒/還元磁 灰	外面は叩き痕、内面はナデ。	
9 PL51	土師器 壺	D-5区 口-胴部片	口径 18.4	細砂粒/良好 にぶい黄	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は横方向のヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
10	須忠器 羽釜	D-6区 胴部片	口径 26.8	粗砂粒/還元磁 灰	ロクロ整形、霧は貼付。	

4. 中世以降

(1) 井戸

B 2 号井戸

本井戸はB-4区中程、X=41939・41940、Y=-73889・-73890に位置する。今回、調査した範囲は遺構の西半部分だけであった。他遺構との重複関係はB4号住居、B10号土坑との重複が確認された。新旧関係は本井戸の方が新しい。

平面形態は楕円形を呈する。断面形態は確認面から0.5mほどはやや逆円錐状に開く、その下部からは下位になるほど狭くなるがほぼ円筒状である。

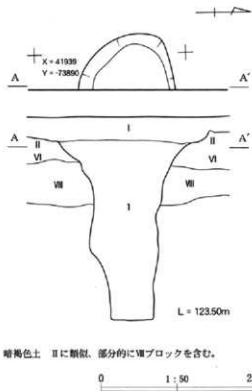
規模は確認面で径1.28m、底径0.98m、深度2.42mを測る。

井戸は井戸枠などの設備を設けた痕跡は確認されなかったことから素掘りのまま使用していたようである。

埋没状態は土層断面の観察でⅧ層ブロックを含んだⅡ層を主体とする土砂で短時間に人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。

遺物は土師器、須恵器などの小片が出土しているが図化可能なものは見られなかった。また、これらの土器片はB4号住居からの流れ込みとみられる。

本井戸の廃棄年代は埋没から12世紀以降に比定される。



1 暗褐色土 IIに類似、部分的にⅧブロックを含む。

107図 B 2号井戸 遺構図

(2) 溝

溝はB2号溝を除いてⅡ層に相当する土砂で埋没またはⅡ層が主体の土砂で埋没している。このうちA-2区では堆積土の状態が良好でⅣ層上面でA4号溝、A5号溝を確認した。その他の調査区では埋没土の状態から年代を判断している。

遺物を出した溝は少なく、出土しても周囲の奈良・平安時代の遺構からの落ち込みなどによる土師器や須恵器の小片であった。

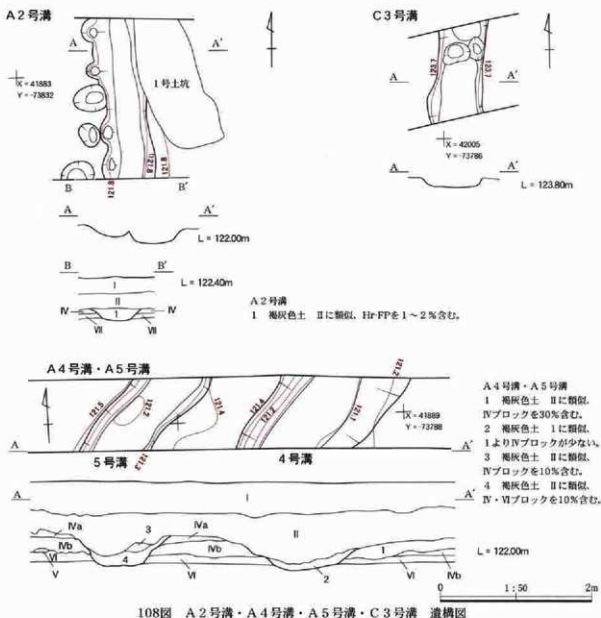
A 2 号溝

本溝はA区の東寄り、X=41881~41883、Y=-73830に位置する。他遺構との重複関係はA1号土坑と重複する。新旧関係は本溝の方が古い。平面形状はほぼ直線的で西側縁に概ね0.5m間隔に径30cm、深度10cmほどの小ピットが並列している。断面形態は逆台形状を呈する。

規模は確認面で0.60m前後、底面は0.30~0.35m、深度12~15cmを測る。

埋没状態は土層断面の観察では単一土しか確認できなかったが自然埋没であったとみられる。

Ⅲ 検出した遺構と遺物



B2号溝

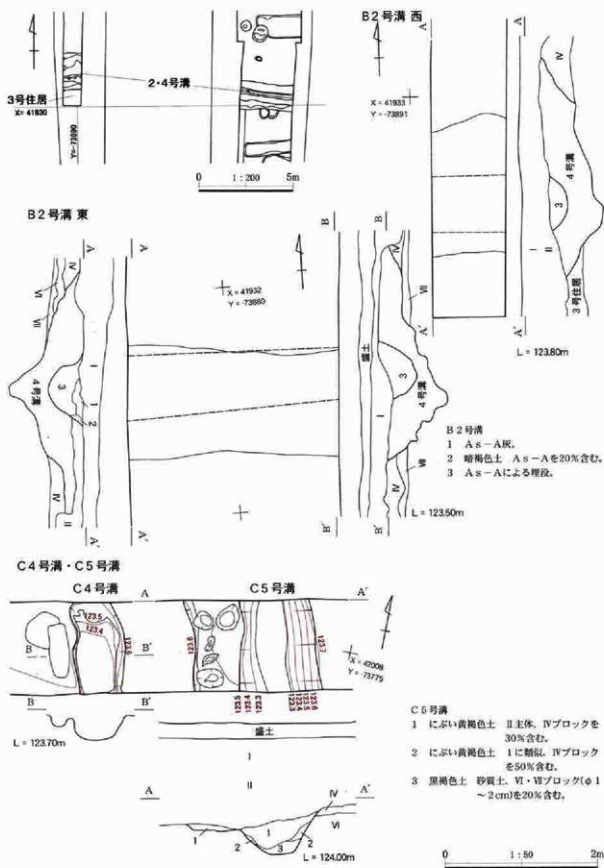
本溝はB-7区中程からB-4区の南寄りに位置し、調査区両端の断面でのみ確認した。B-4区とB-7区の間は約8mほどの間隔があるが、直線上に位置し、断面形態が同じであることから同一溝と断定した。他遺構との重複関係はB-4区、B-7区ともB4号溝との重複が確認された。新旧関係はB4号溝より本溝の方が新しい。

平面形状は直線的で、断面形態はU字状を呈する。規模は全長13m以上、上部幅0.75~0.90mを測

る。なお、B-4区では上部を攪拌されているため計測不可能である。

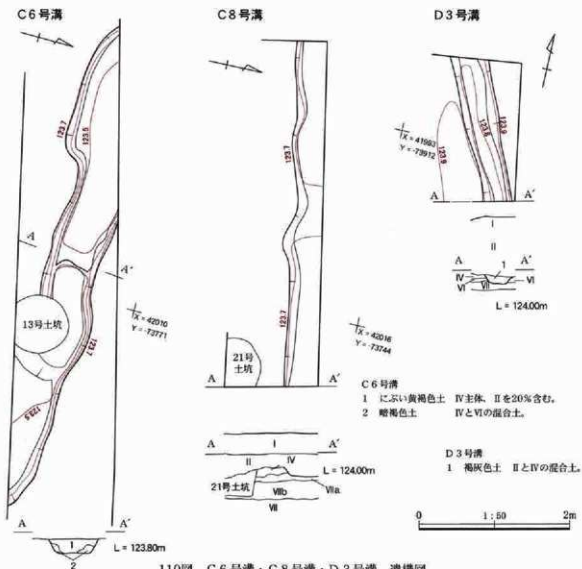
埋没状態はAs-Aが全体を埋めており、B-7区では上部に火山灰の堆積が確認できることからAs-Aの排除坑と見るより、As-Aの降下で埋没したとみられる。

本溝の年代は埋没土から1783(天明3)年以前に掘削されたものである。



109図 B2号溝・C4号溝・C5号溝 遺構図

Ⅲ 検出した遺構と遺物



110図 C6号溝・C8号溝・D3号溝 遺構図

(3)土坑

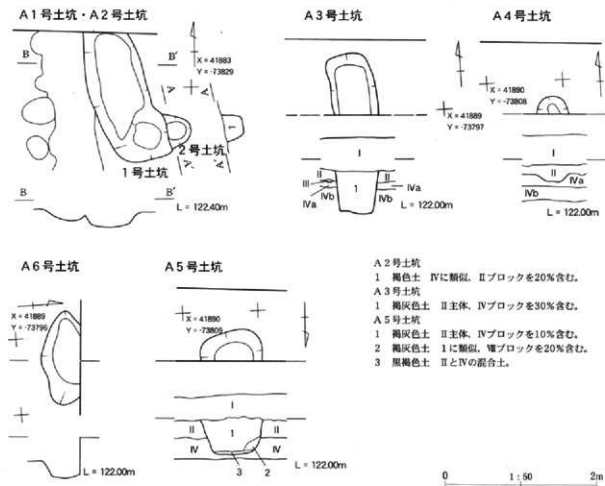
土坑はA区で6基、B区で3基、C区で10基、D区で2基の計21基を確認した。このうちA-2区では堆積土の状態が良好でIV層上面でA3号～6号土坑を確認した。その他の調査区では埋没土の状態から年代を判断している。

遺物を出土した土坑は少なく、出土しても周囲の奈良・平安時代の遺構からの落ち込みなどによる土師器や須恵器の小片であった。

2表 中世以降土坑一覧

土坑 NO.	位置		重 複	関 係	形 態	規 模(単位cm)			備 考
	X	Y				長径	短径	深度	
A 1	41882	73829		A 2号溝・A 2号土坑	矩形	(188)	80	20	
A 2	41882	73829	A 1号土坑		楕円形	(32)	48	25	
A 3	41888	73797			矩形	(82)	62	53	近畿小
A 4	41889	73806			円形	(24)	42	10	
A 5	41890	73809			楕円形	81	(42)	49	近畿小
A 6	41889	73795			楕円形	122	52	21	
B 5	41947	73880		B 1号溝	楕円形	(96)	(67)	33	
B 8	41949	73889		B 5号住居・B 6号住居	矩形	142	(100)	39	
B 10	41940	73890	B 2号井戸	B 4号住居	円形	68	(53)	55	
C 13	42008	73770			円形	(70)	76	28	
C 14	42009	73767	C 6号溝		楕円形	134	(60)	20	
C 15	42009	73764		C 20号土坑	円形	80	68	26	
C 16	42010	73760	C 17号土坑		楕円形	(130)	(40)	10	
C 17	42010	73761		C 16号土坑	楕円形	(150)	28	45	
C 18	42011	73758			矩形	(88)	85	36	
C 19	42010	73759			楕円形	112	95	33	
C 20	42010	73764	C 15号土坑		楕円形	(142)	(90)	15	
C 21	42014	73746			矩形	(65)	(50)	32	
C 22	42013	73745			楕円形	221	(88)	40	
D 6	42025	73756			矩形	96	36	12	
D 7	42025	73755			矩形	109	91	13	

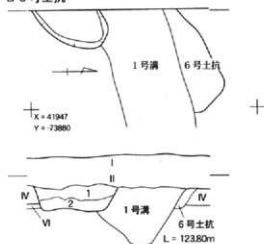
座標値Yは全て負の値であるため「-」は省略してある。



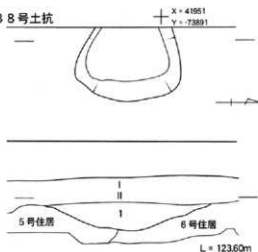
111図 A 1号～A 6号土坑 遺構図

III 検出した遺構と遺物

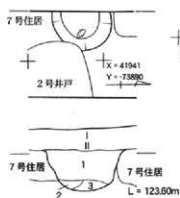
B 5号土抗



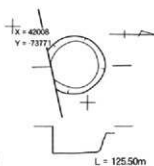
B 8号土抗



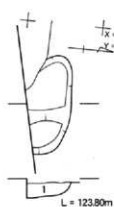
B 10号土抗



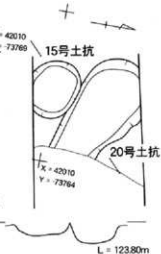
C 13号土抗



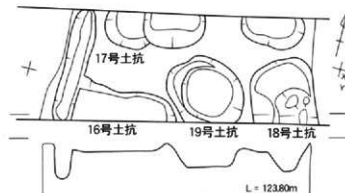
C 14号土抗



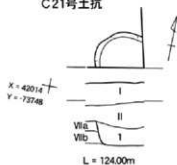
C 15号土抗・C 20号土抗



C 16号土抗・C 17号土抗・C 18号土抗・C 19号土抗



C 21号土抗



B 5号土抗

1 におい黄褐色土 IIに類似, IVが混入, Hr-FPを5%含む。
2 灰黄褐色土 1に類似, 灰、焼土ブロックを10%含む。

B 8号土抗

1 灰黄褐色土 II主体, IV, VIブロックを20~30%含む。

B 10号土抗

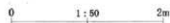
1 灰黄褐色土 IVに近似, VIブロックを10%含む。
2 灰黄褐色土 1に類似, 焼土を30%と灰を10%含む。
3 黒褐色土 IVブロックを2%含む。

C 14号土抗

1 におい黄褐色土 IV主体, IIを20%含む。

C 21号土抗

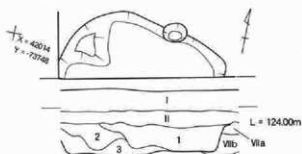
1 褐灰色土 IIに類似, A+Bを20%含む。



112図 B 5号・B 8号・B 10号・C 13号~21号土抗 遺構図

4. 中世以降

C22号土坑



C22号土坑

- 1 におい黄褐色土 IIとIVの混合土、黒色土ブロックを10%含む。
 2 におい黄褐色土 IVに類似、黒色土ブロックを20%含む。
 3 暗褐色土 IIとIV、VIの混合土、IIが50%以上を占める。

D6号土坑



D6号土坑

- 1 黒褐色土 II主体、IVが20%混入。

D7号土坑



D7号土坑

- 1 黒褐色土 II主体、IVが20~30%混入。

0 1:50 2m

113図 C22号・D6号・D7号土坑 遺構図

(4) 畠

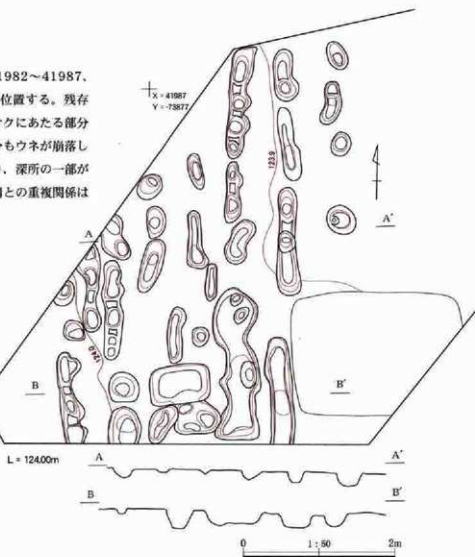
C1号畠

本畠はC-4区の西側、X=41982~41987、Y=-73874~-73878の範囲に位置する。残存状態は上部を攪拌されているためサクにあたる部分しか残っていない。また、この部分もウネが崩落して隣のサクと同一化してしまったり、深所の一部が土坑状に残るだけであった。他遺構との重複関係は確認されなかった。

耕作はサクの間隔から数次にわたって行われたと想定されるが、同一次のサクの断定についての判断はできなかった。

サクを埋めている土層はII層でも上位に相当するものに近いことから中世でも後半から近世にかけてのものと推測される。

遺物は奈良平安時代の土師器・須恵器などの小片が若干出土しているが、本畠に伴うような時期のものはみられなかった。

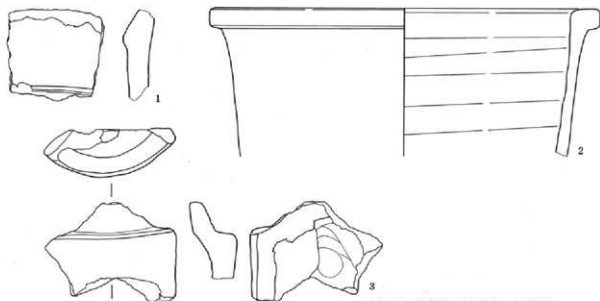


114図 C1号畠 遺構図

Ⅲ 検出した遺構と遺物

(5)遺構外出土遺物

中世以降の遺物としては陶磁器、軟質陶器、土製品瓦片などが出土しているが、ほとんど小片のため図化可能なものは掲載した3点だけであった。



115図 遺構外出土遺物 遺物図

NO. P.L	種類 器形	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成 色調	成型形の特徴	摘要
1	軟質陶器 罎	A-1区 口縁部片		粗砂粒/酸化焰 にぶい色	口縁部は横ナデ。内面割部はナデ。	
2	軟質陶器 鉢	D-10区 口縁部片	口径 29.0	細砂粒/還元焰 にぶい黄褐色	口クロ整形、回転右回りか。	
3	土製品 丸瓦	D-10区 端部片		粗砂粒/還元焰 黄灰	表面はヘラナデ、側面はヘラ削り。裏面は型肌が残る。	

ま と め

今回の群馬郡群馬町榎高東弥三郎街道遺跡発掘調査は道路整備事業で現道の両側を拡幅する工事のため調査範囲が幅1～5mの限られた狭い範囲の2,500mほどでしかなかった。そのため遺構全体を調査することができず、得ることができた情報も限られたものであった。

発掘調査では縄文時代中期の集落と古墳時代～奈良・平安時代の集落、中世及び近世以降の集落関連遺構を検出した。それぞれの時代ごとに見ていくことにする。

縄文時代

縄文時代は竪穴住居1軒と土坑4基である。竪穴住居はB区の陣馬泥流丘上の微高地に存在しているが、他の調査区では確認されておらず、遺跡全域でも数軒の規模であったと推定される。

群馬町の扇状地では集落の形成は縄文時代前期からで集落の増加がみられるのは中期以降である。榎高東弥三郎街道遺跡の縄文時代集落もこうした周辺地域の流れの中で形成されたと考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構、遺物はD区の低地から溝を検出したが、これらの溝は水性堆積とみられるがAs-Cが堆積していることから古墳時代前期のものと考えられる。しかし、これらの溝はその形状などから全てが人為的な掘削によるものとは考えにくく一部は自然の流路であった可能性が高い。中期から後期にかけての遺構は検出されなかったが、出土した遺物の中には同期のものが確認できたことから周辺には集落の存在も窺える。

奈良・平安時代

奈良・平安時代は竪穴住居を中心とする集落である。竪穴住居は縄文時代と同様に陣馬泥流丘上の微高地に立地している。住居は奈良時代8世紀第1四半期に1軒を検出しているが、その後は平安時代9世紀第1四半期までの100年間のものは検出されて

いない。これは住居以外から出土した遺物の傾向からも同様な傾向がみられる。よってこの時期の住居は調査範囲外でも存在しないと考えられる。

その後の集落変遷をみると次のとおりである。

9世紀第2四半期 3軒

9世紀第3四半期 3軒

9世紀第4四半期 2軒

9世紀代はこの他に前半代2軒、後半代2軒、9世紀代1軒が検出されている。

10世紀第1四半期 5軒

10世紀第2四半期 6軒

10世紀代はこの他に前半代1軒が検出されている。

上記のような傾向は調査区外に存在する竪穴住居でも住居以外から出土している土器の様相から想定される。

こうした集落での住居変遷の規模は榎高東弥三郎街道遺跡より大規模な集落遺跡であるが、箕郷町下芝五反田遺跡や吉岡町陣馬清里遺跡などでみることができる。これらの遺跡は古墳時代から存続し律令制によって郷里制に組み込まれた集落ではなく、律令制の土地制度が崩壊する中で新に開発を目的とした集落と考えられる。また、その立地も郷里の中心的地域からはずれた周辺部で労働力を大量に投入しないと開発が困難な荒地地などである。このような開発には「墾田永年私財法」などの規定や経済力などからみても一般農民が主導で行うことは不可能でその背景には権門などの権力が介在していた可能性が高い。

これに対して榎高東弥三郎街道遺跡では集落の立地している陣馬泥流丘による微高地が狭いため集落規模が小規模で住居総数は多くても50軒程度と推察され、四半期には7～12軒程度であったとみられる。そしてこの集落での生産域は地形的条件を見ると西に位置する天王川周囲は開析が進み開発には不適な地域であったと見られる。これに対して東側に

位置する低地は河川らしい河川も存在せず比較的開発を行いやすい地域であったのか広範囲にわたって水田として利用されている。

この様相は菅谷石塚遺跡でみることができる。菅谷石塚遺跡では南側に位置する1区から5区の広範囲でA s - B層下から水田が検出されている他に1区、2区でA s - C層下(4世紀前半代)、H r - F A層下(6世紀初頭)、H r - F A層上(水田区画の形状などはH r - F P層下の水田と同様であることから6世紀前半代)、H r - F AとA s - B層の間に起きた洪水層(出土物から9世紀~10世紀代か)下から水田が検出されている。また、4区・5区などの北側の調査区ではA s - B層下水田の耕作土が比較的薄く水田耕作の開始が南側のように古い段階からでないことが窺える。このことは南側では古墳時代から水田耕作が行われていたが北側では平安時代になってから水田域が拡大するような開発が行われたとみられる。

すなわち、南側の耕作地は旧来の集落からの距離もそれほど遠くないため分材などは行われなかったが、北側の開発をはじめめる段階で比較的至近距離にある榎高東弥三郎街道遺跡の微高地が集落適地として選択されたのではないだろうか。

榎高東弥三郎街道遺跡の所在する地域は周囲に残存する小八木や大八木の地名や河川、谷地などの地形や古墳時代終末期の古墳様相や集落遺跡の分布などから古代には上野国群馬郡八木郷の郷域に属していたと推定される。

古代八木郷の郷域は現存する地名や集落遺跡の分布から東が高崎市正観寺町、西が高崎市大八木町、北が本遺跡が所在する群馬町榎高、南が高崎市浜尻町付近の範囲が想定される。この範囲では西側の高崎市大八木屋敷遺跡、高崎市融通寺遺跡、高崎市・群馬町熊野堂遺跡などで大規模な集落とともに大八木屋敷遺跡で八脚門を伴う櫓列と溝で区画、融通寺遺跡では瓦塔、銅鏡、白磁唾壺などが出土し寺院の存在が窺える。東側でも高崎市正観寺遺跡群の大規模集落の他に高崎市小八木志貝戸遺跡で8世紀前

半代の富豪層の居宅、高崎市中川遺跡でも9世紀代の大型掘立柱建物が見つまっていることから富豪層の存在が推定される。また、これらの地域や周辺では古墳時代終末期の古墳も存在していることから古墳時代の二つの村落を郷里を制定する中で八木郷としてまとめられたと考えられる。すなわち、榎高東弥三郎街道遺跡の集落はこうした郷内の富豪層による主導の元で開発されたと考えるのが妥当ではないだろうか。

次に集落の廃絶については1108年(天仁元)の浅岡山噴火の災害によって廃絶したのなら無理のないことと考えられるが、住居は10世紀前半代で途絶えておりその後の様子は不明である。こうした集落廃絶の様相は群馬県内の多くの集落遺跡でも同様な傾向が見られる。この様な10世紀代での集落廃絶の要因としては箕郷町下芝五反田遺跡や前橋市西田遺跡などで集落の上層にA s - B層下水田が見つまっていることから、水田域など生産地への転換が考えられる。

榎高東弥三郎街道遺跡では直接の生産遺構は見つからないが、住居と重複するB 1号溝やB 3号溝、B 4号溝など平安時代の水路と見られる溝が存在することから水路確保によってより広範囲な開発のため強制的な移住が行われたと推測される。

中世

中世の遺構は少なく当時の様相を解明することは困難であるが畠などの耕作地として利用されたとみられる。

今回の発掘調査はごく限られた範囲であったが地域史解明に新たな資料を提示することができたのではないだろうか。今後、さらに資料の積み重ねによってより解明されることを願ってまとめたい。

圖 版



遺跡地遠景 南から



遺跡地近景 東から



基本的な層序 A-1区東 北から



基本的な層序 A-3区東 北から



基本的な層序 B-6区北 東から



基本的な層序 B-8区南 東から



基本的な層序 C-3区西 東から



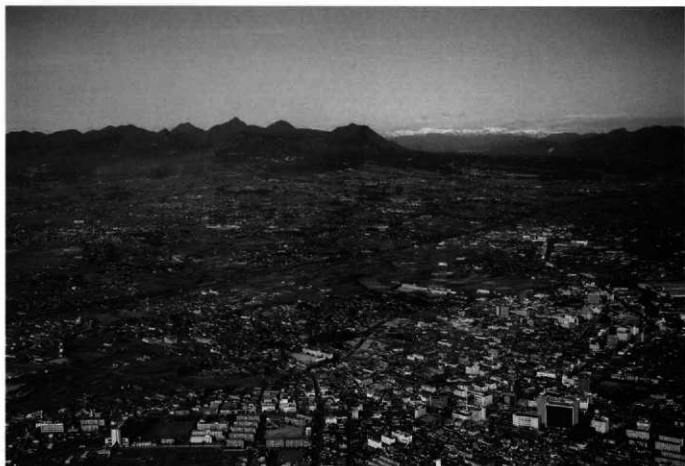
基本的な層序 C-5区西 北から



基本的な層序 D-1区東 西から



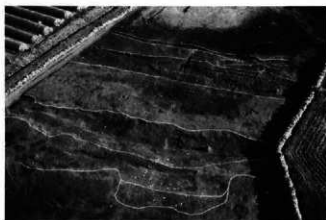
基本的な層序 D-11区中 北から



榛名山相馬ヶ原扇状地 南東から



菅谷石塚遺跡 水田跡



菅谷石塚遺跡 推定東山道駅路跡



菅谷石塚遺跡 7区・8区全景



B-3区縄文時代 北から



B-8区縄文時代調査面 全景 北から



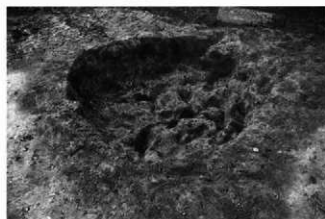
B-8区縄文時代 東から



B1号住居 全景 北から



B1号住居 遺物出土状態 北東から



B31号土坑 全景 北から



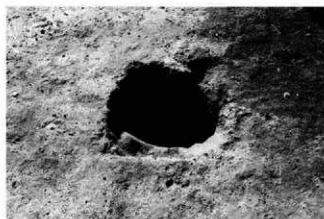
B31号土坑 土層断面 南から



B32号土坑 全景 北から



B32号土坑 土層断面 東から



B33号土坑 全景 北から



B33号土坑 土層断面 東から



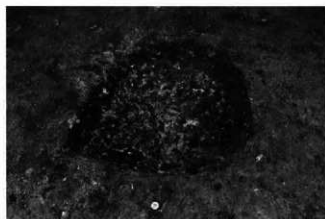
B34号土坑 遺物出土状況① 北から



B34号土坑 遺物出土状況② 西から



B34号土坑 遺物出土状況③ 西から



B34号土坑 全景 東から



A-1区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



A-2区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



B-1区古墳時代～奈良平安時代面 全景 北から



B-1区古墳時代～奈良平安時代面 全景 南から



B-2区古墳時代～奈良平安時代面 全景 北から



B-2区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



B-2区古墳時代～奈良平安時代面 全景 南西から



B-4～5区古墳時代～奈良平安時代面 全景 北から



B-4区古墳時代～奈良平安時代面 全景 北から



B-5区古墳時代～奈良平安時代面 全景 南から



B-4区古墳時代～奈良平安時代面 確認時 南から



B-6～8区古墳時代～奈良平安時代面 全景 垂直



B-6～8区古墳時代～奈良平安時代面 全景 南から



B-6～8区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



B-6区古墳時代～奈良平安時代面 全景 垂直



B-6区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



B-7区古墳時代～奈良平安時代面 全景 垂直



B-7区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



B-8区古墳時代～奈良平安時代面 全景 垂直



B-8区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



C-1区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



C-2区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



C-3区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



C-4区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



C-5区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



C-5区古墳時代～奈良平安時代面 全景 北から



C-6区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-1～6区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



D-8～11区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-1区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



D-2区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-3区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-4区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-5区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-6区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



D-6区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-7区古墳時代～奈良平安時代面 全景 北から



D-8区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-9区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-10区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



D-11区古墳時代～奈良平安時代面 全景 東から



D-11区古墳時代～奈良平安時代面 全景 西から



A1号住居 土層断面 南から



A2号住居 全景 東から



A2号住居 全景 西から



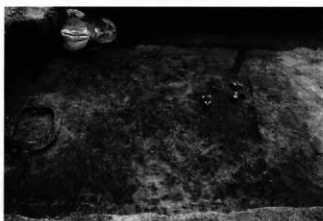
A2号住居 全景 北から



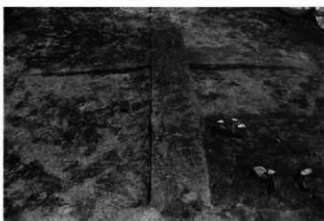
A2号住居 掘り方 北から



A2号住居 掘り方 東から



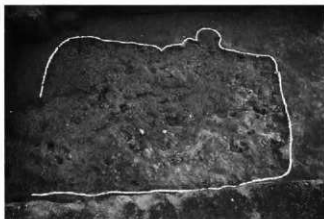
B2号住居 全景 西から



B2号住居 土層断面 南から



B 2号住居 土層断面 西から



B 2号住居 掘り方 西から



B 2号住居 カマド掘り方 西から



B 3号住居 全景 東から



B 3号住居 土層断面 東から



B 3号住居 掘り方 東から



B 4号住居・B 7号住居 全景 北東から



B 4号住居 全景 東から



B 7号住居 土層断面 東から



B 7号住居 土層断面 南から



B 4号住居・B 7号住居 掘り方 北から



B 5号住居 全景 北から



B 5号住居 遺物出土状況 南東から



B 5号住居 調査区拡張時遺物出土状況 東から



B 5号住居 掘り方 東から



B 5号住居 掘り方床下土坑 西から



B 6号住居 全景 南東から



B 6号住居 全景 北から



B 6号住居 調査区拡張時遺物出土状況 東から



B 6号住居 掘り方 北から



B 6号住居 掘り方 東から



B 8号住居 全景 西から



B 8号住居 遺物出土状況 南から



B 8号住居 掘り方 北から



B9号住居 全景 北から



B9号住居 全景 南から



B16号住居 全景 西から



B16号住居 全景 北から



B16号住居 調査区拡張時全景 西から



B16号住居 掘り方 西から



B10号住居 全景 南から



B10号住居 全景 西から



B11号住居 全景 西から



B11号住居 全景 北から



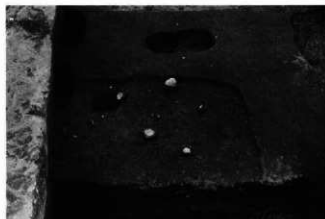
B11号住居 土層断面 北から



B11号住居 掘り方 北から



B12号住居 全景 西から



B12号住居 全景 北から



B12号住居 貯蔵穴土層断面 東から



B12号住居 掘り方 西から



B13号住居 全景 北から



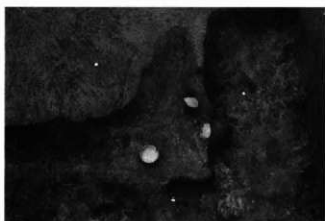
B13号住居 掘り方 北から



B15号住居 (1次調査) 全景 西から



B15号住居 (2次調査) 全景 西から



B15号住居 (1次調査) カマド 西から



B15号住居 (1次調査) カマド断面 南から



B15号住居 (1次調査) カマド断面 西から



B15号住居 (1次調査) カマド掘り方 西から



B15号住居（1次調査）掘り方 西から



B15号住居（2次調査）掘り方 西から



B17号住居 全景 西から



B17号住居 土層断面 東から



B17号住居 カマド土層断面 西から



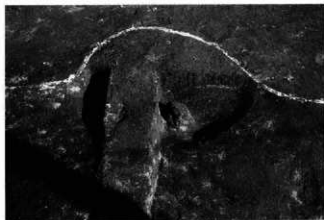
B17号住居 掘り方 西から



B18号住居 全景 西から



B18号住居 貯蔵穴 東から



B18号住居 カマド土層断面 西から



B18号住居 掘り方 西から



B19号住居 全景 西から



B19号住居 貯蔵穴 西から



B19号住居 貯蔵穴土層断面 西から



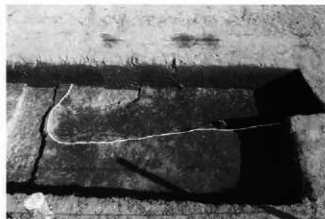
B19号住居 土層断面 東から



B19号住居 カマド土層断面 北から



B19号住居 掘り方 西から



B21号住居 全景 西から



B21号住居 掘り方 西から



B22号住居 全景 西から



B22号住居 掘り方 南西から



B23号住居 全景 南西から



B23号住居 土層断面 南から



B23号住居 カマド確認時 南から



B23号住居 カマド全景 西から



B23号住居 カマド土層断面 南西から



B23号住居 カマド煙道部土器出土状況 南から



B23号住居 カマド掘り方 西から



B23号住居 掘り方 南西から



B24号住居 全景 西から



B24号住居 貯蔵穴土層断面 南から



B24号住居 カマド土層断面 南から



B24号住居 掘り方 西から



C1号住居 土層断面 西から



C1号住居 調査状況 西から



D1号住居 掘り方 北から



D1号住居 掘り方 東から



D1号住居 土層断面・検土確認状況 東から



D2号住居 掘り方 東から



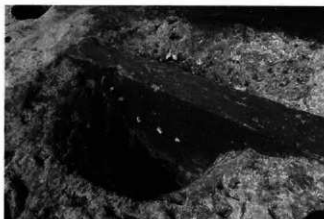
D2号住居 掘り方 西から



D2号住居 土層断面 北から



B 1号井戸 全景 東から



B 1号井戸 土層断面 東から



B 3号井戸 全景 東から



B 4号井戸 全景 東から



B 4号井戸 近接 東から



B 4号井戸 遺物出土状況 東から



B 4号井戸 遺物出土状況 西から



B 4号井戸 調査区拡張前 東から



D1号井戸 全景 南から



D1号井戸 石積み状況 東から



D1号井戸 掘り方 南から



D1号井戸 掘り方近接 南から



A1号溝 全景 北から



A3号溝 全景 北から



A8号溝 全景 北から



A9号溝 全景 北から



B 1号溝 (B-1区) 全景 東から



B 1号溝 (B-4区) 全景 東から



B 1号溝 (B-1区) 土層断面 西から



B 1号溝 (B-4区) 土層断面 東から



B 3号溝 (B-2区) 全景 東から



B 3号溝 (B-2区) 全景 西から



B 3号溝 (B-5区) 全景 東から



B 3号溝 (B-2区) 土層断面 西から



B 4号溝 (B-4区) 全景 東から



B 4号溝 (B-4区) 全景 西から



B 4号溝 (B-7区) 全景 東から



B 4号溝 (B-7区) 全景 西から



B 5号溝 全景 西から



B 5号溝 土層断面 西から



B 7号溝 土層断面 東から



B 8号溝 全景 南から



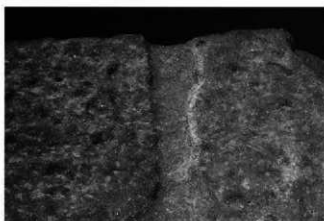
C1号溝 全景 北から



C2号溝 全景 北から



D1号溝 全景 北西から



D2号溝 全景 北から



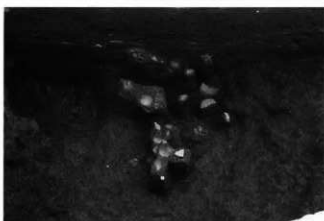
D4号溝 全景 北から



D5号溝 全景 北から



D6号溝 全景 北から



D6号溝 遺物出土状況 北から



D 8号溝 全景 北から



D 8号溝 土層断面 北から



D 9号溝 土層断面 南から



D 10号溝 全景 北から



A 8号土坑 土層断面 西から



A 10号土坑 全景 南から



B 3号土坑 全景 東から



B 7号土坑 全景 東から



B21号土坑 全景 南から



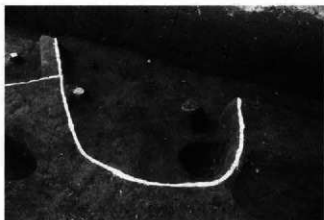
B21号土坑 土層断面 南から



B22号土坑 全景 西から



B22号土坑 遺物出土状況 西から



B27号土坑 全景 東から



D8号土坑 全景 南から



B 2号井戸 全景 西から



B 2号井戸 全景 西から



A 2号溝、A 1号土坑 全景 南から



A 4号溝 全景 北から



A 5号溝 全景 北から



B 2号溝 (B-4区) 土層断面 東から



B 2号溝 (B-7区) 土層断面 東から



C 3号溝 全景 南から



C4号溝 全景 北から



C5号溝 全景 南から



C6号溝 全景 東から



C6号溝 土層断面 西から



D3号溝 全景 北から



A3号土坑 全景 北から



A4号土坑 全景 北から



A5号土坑 全景 北から



B 8号土坑 全景 東から



C13号土坑 全景 西から



C14号土坑 土層断面 東から



C15号土坑 全景 南から



C16号土坑・17号土坑 全景 南から



C19号土坑 全景 南から



D 6号土坑 土層断面 西から



D 7号土坑 土層断面 北から



C1号冢 全景 北から



C1号冢 全景 南から



B1号住居-1



B1号住居-2



B34号土坑-1



B34号土坑-2



B34号土坑-3 (表)



B34号土坑-3 (裏)



遺構外出土遺物-1



遺構外出土遺物-2



遺構外出土遺物-3



遺構外出土遺物-4



遺構外出土遺物-5



遺構外出土遺物-6



遺構外出土遺物-7



遺構外出土遺物-8



遺構外出土遺物-9



遺構外出土遺物-10



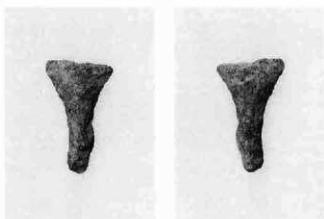
遺構外出土遺物-11



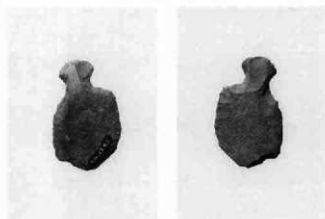
遺構外出土遺物-12



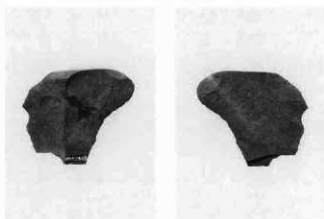
遺構外出土遺物-13



遺構外出土遺物-14 (左, 表・右, 裏)



遺構外出土遺物-15 (左, 表・右, 裏)



遺構外出土遺物-16 (左, 表・右, 裏)



遺構外出土遺物-17



遺構外出土遺物-18



A 2号住居-3



A 2号住居-11



A 2号住居-12



A 2号住居-13



A 2号住居-14



B 2号住居-1



B 2号住居-2



B 2号住居-5



B 3号住居-1



B 4号住居-3



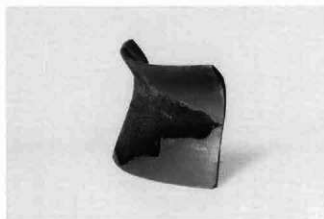
B 4号住居-4



B 4号住居-5



B 4号住居-6



B 4号住居-8



B 5号住居-5



B 5号住居-6



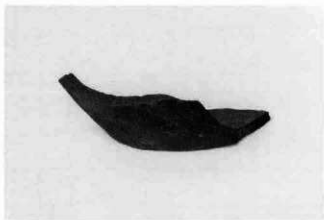
B 5号住居-7



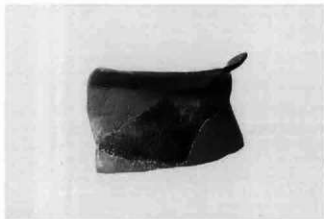
B 5号住居-9



B 5号住居-13



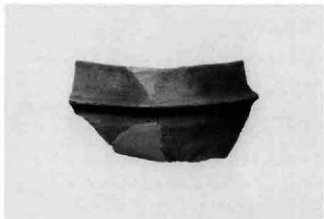
B 5号住居-14



B 5号住居-16



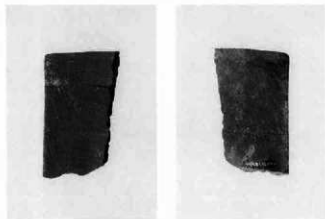
B 5号住居-20



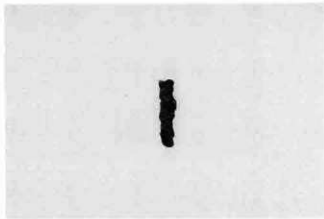
B 5号住居-21



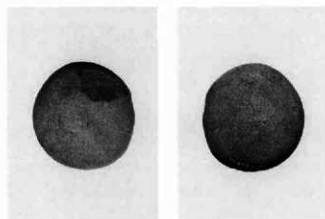
B 5号住居-25



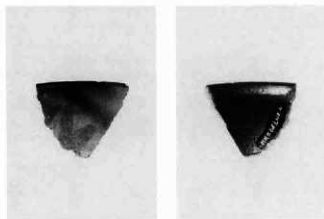
B 5号住居-26 (左, 表・右, 裏)



B 5号住居-27



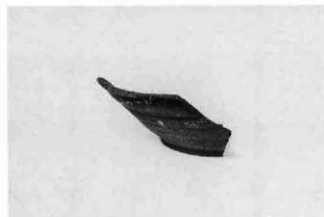
B 5号住居-28 (左, 表・右, 裏)



B 6号住居-1 (左, 外・右, 内)



B 6号住居-2



B 6号住居-3



B 6号住居-5



B 7号住居-1



B 8号住居-4



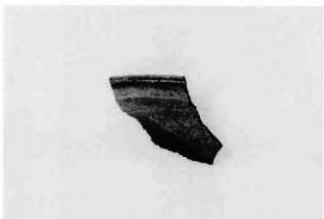
B 8号住居-5



B 8号住居-7



B 8号住居-8



B 9号住居-2



B 9号住居-5



B 9号住居-7



B10号住居-6



B11号住居-1



B11号住居-3



B12号住居-1



B12号住居-2



B12号住居-4



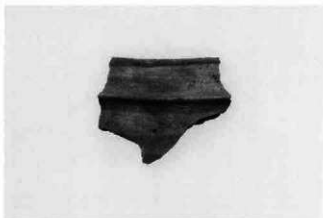
B13号住居-1



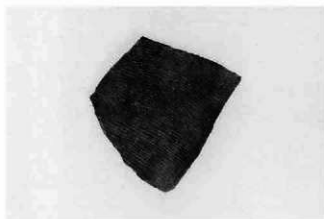
B13号住居-2 (左, 外・右, 内)



B13号住居-3



B13号住居-4



B14号住居-1



B15号住居-1



B15号住居-2



B15号住居-3



B16号住居-2



B16号住居-3



B16号住居-5



B16号住居-6



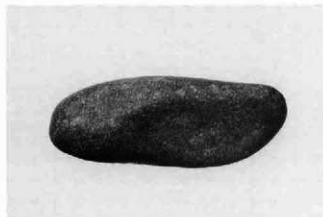
B16号住居-7



B16号住居-8



B16号住居-14



B16号住居-22

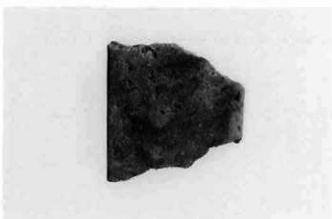


B16号住居-21 (左から、左側・正面・右側・裏面)



B16号住居-20 (左, 表・右, 裏)

B16号住居-23



B17号住居-8 (左, 表・右, 裏)



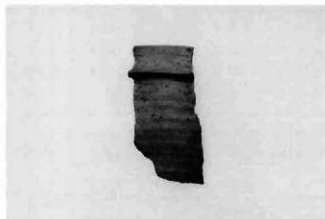
B18号住居-1

B18号住居-2



B18号住居-3

B18号住居-9



B18号住居-12



B19号住居-1



B19号住居-2



B19号住居-3



B19号住居-4



B19号住居-13



B19号住居-14



B19号住居-15



B19号住居-16



B19号住居-17



B19号住居-18



B19号住居-19



B19号住居-20



B21号住居-2



B21号住居-3 (上, 正面・下, 底面)



B23号住居-1



B23号住居-2



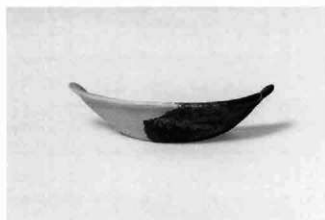
B23号住居-3



B23号住居-4



B23号住居-5



B23号住居-6



B23号住居-7



B23号住居-8



B23号住居-10



B23号住居-11



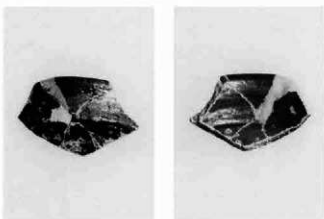
B23号住居-12



B23号住居-13



B23号住居-15



B23号住居-18 (左, 外・右, 内)



B23号住居-21



B23号住居-22



B23号住居-23 (左. 表・右. 裏)

B23号住居-24



B23号住居-25

B23号住居-26



B24号住居-1

B24号住居-2



B24号住居-5

B24号住居-6



D 1号住居-1



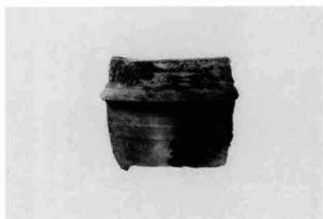
B 1号井戸-4



B 1号井戸-5



B 1号井戸-8



B 1号井戸-9



B 1号井戸-10



B 3号井戸-2



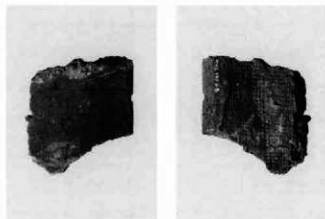
B 3号井戸-3



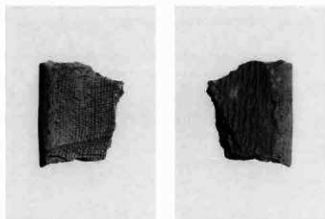
B 3号井戸-10



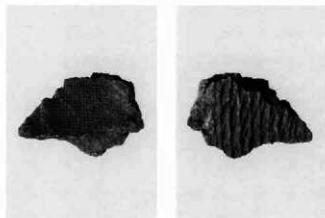
B 3号井戸-15



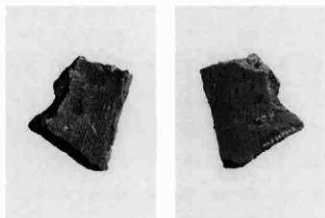
B 3号井戸-17 (左, 表・右, 裏)



B 3号井戸-18 (左, 表・右, 裏)



B 3号井戸-19 (左, 表・右, 裏)



B 3号井戸-20 (左, 表・右, 裏)



B 3号井戸-23



B 3号井戸-24



B 4号井戸-1



B 4号井戸-2



B 4号井戸-3



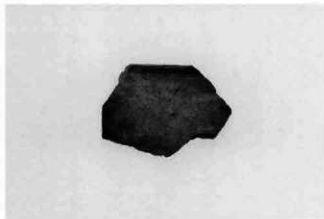
B 4号井戸-4



B 4号井戸-6



B 4号井戸-8



B 4号井戸-10



B 4号井戸-11



B 4号井戸-12



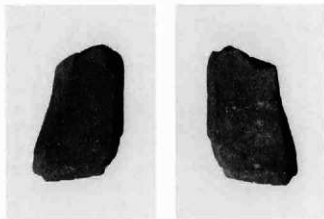
B 4号井戸-13



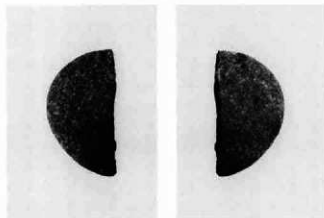
B 4号井戸-14 (上, 表・下, 裏)



B 4号井戸-16



B 4号井戸-17 (左, 表・右, 裏)



B 4号井戸-18 (左, 表・右, 裏)



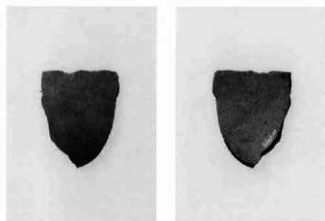
B 4号井戸-19



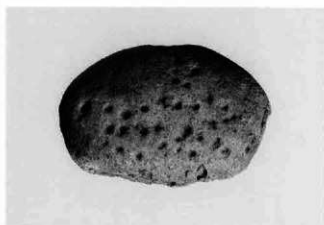
B 4号井戸-20



D 1号井戸-2



D1号井戸-4 (左, 表・右, 裏)



B3号溝-2



D1号井戸-6 (上, 表・下, 裏)



B3号溝-5



B4号溝-3



B4号溝-4



B8号溝-1



B 8号溝-2



B 8号溝-3



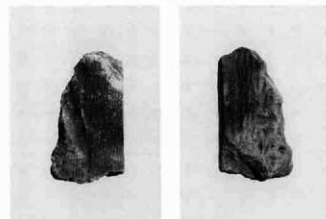
B 8号溝-5 (上, 正面・下, 底面)



B 8号溝-4



B 8号溝-6



D 5号溝-1 (左, 表・右, 裏)



D 6号溝-1



D6号溝-3



D6号溝-4



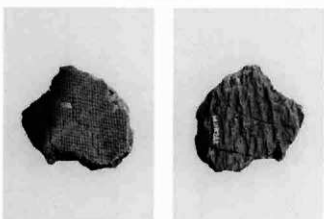
D6号溝-5



D6号溝-6



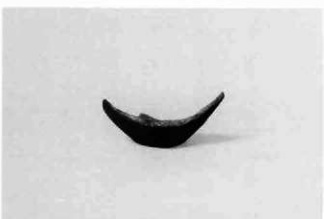
B22号土坑-1



B24号土坑-1 (左, 表·右, 裏)



B27号土坑-2



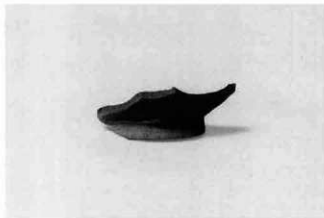
D8号土坑-3



B区遺構外出土遺物-2



B区遺構外出土遺物-3



B区遺構外出土遺物-6



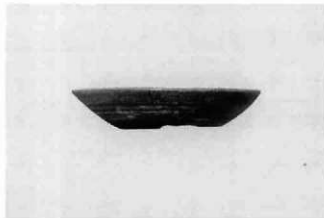
B区遺構外出土遺物-7



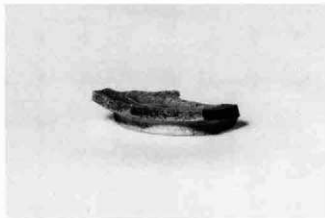
B区遺構外出土遺物-8



B区遺構外出土遺物-9



B区遺構外出土遺物-10



B区遺構外出土遺物-14



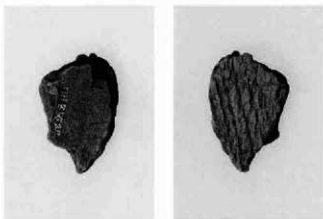
B区遺構外出土遺物-15



B区遺構外出土遺物-16



B区遺構外出土遺物-17



B区遺構外出土遺物-19 (左, 表・右, 裏)



B区遺構外出土遺物-22



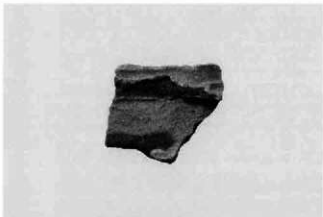
B区遺構外出土遺物-23



B区遺構外出土遺物-24



B区遺構外出土遺物-25



B区遺構外出土遺物-21



D区遺構外出土遺物-1



D区遺構外出土遺物-3

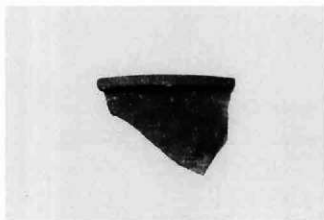


D区遺構外出土遺物-7



D区遺構外出土遺物-9

中世以降



遺構外出土遺物-2

報告書抄録

書名ふりがな	むなたかひがしやさぶろうかいどういせき
書名	棟高東弥三郎街道遺跡
副書名	主要地方道高崎渋川バイパス地方特定道路整備事業(道路整備課所管)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第354集
編著者名	神谷佳明
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2005.03.22
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	むなたかひがしやさぶろうかいどう
遺跡名	棟高東弥三郎街道
所在地ふりがな	くんまけんくんまぐんくんままちおおあざむなたかあざひがしやさぶろうかいどう
遺跡所在地	群馬県群馬郡群馬町大字棟高字東弥三郎街道
市町村コード	10324
遺跡番号	10005-00937
北緯(日本測地系)	36° 22' 28.8196"
東経(日本測地系)	139° 00' 39.4745"
北緯(世界測地系)	36° 22' 40.11164"
東経(世界測地系)	139° 00' 28.00220"
調査期間	2003.04.01～2003.06.30/2004.01.01～20004.02.29
調査面積	2524㎡
調査原因	道路整備
種別	集落
主な時代	縄文時代/奈良・平安時代
遺跡概要	縄文時代中期～竪穴住居1軒、土坑4基(うち1基は埋裏を伴う)/奈良・平安時代～竪穴住居28軒、井戸4基、溝22条、土坑25基/中世以降～井戸1基、溝10条、土坑21基、畠1面。
特記事項	群馬泥流丘上の微高地に形成された集落遺跡。奈良・平安時代、9世紀から10世紀前半にかけて周辺の低地開発を目的とした小規模集落。



財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第354集
棟高東弥三郎街道遺跡

主要地方道高崎渋川線バイパス地方特定整備事業(道路整備箇所)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月22日 発行

2005年3月18日 印刷

発行／編集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話番号 0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷

上武印刷株式会社

棟高東弥三郎街道遺跡 全体図 (古墳時代～奈良・平安時代)

